

市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査等報告書

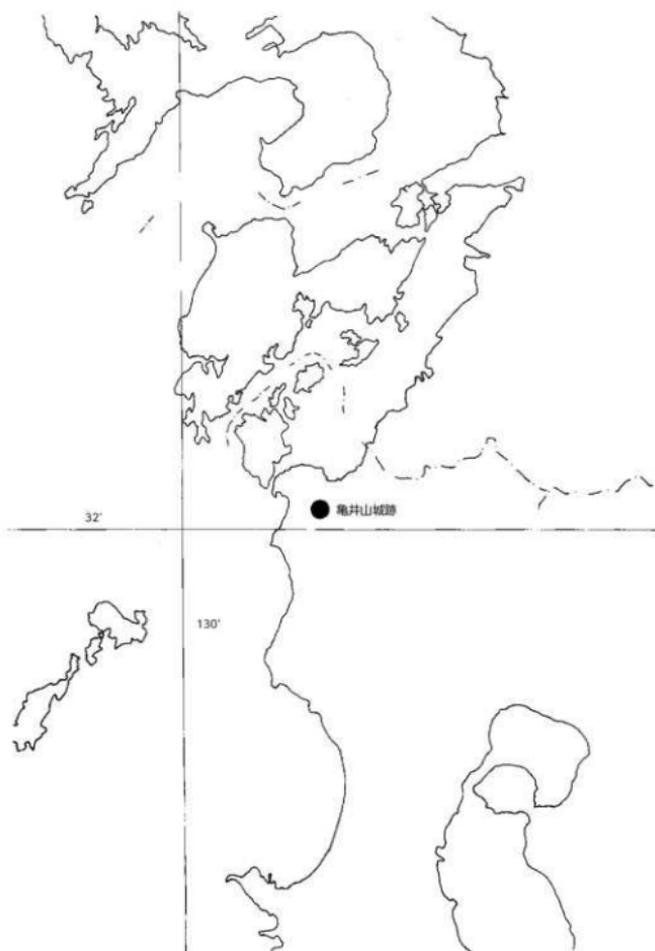
平成19～24年度の調査報告

2013年3月

出水市教育委員会



亀井山城跡



付図 遺跡の位置

報告書抄録

ふりがな	しないいせき (かめいやまじょうあととほか) ほくつちょうさきとうほうこくしよ							
書名	市内遺跡 (亀井山城跡地) 発掘調査等報告書							
副書名	平成19～23年度の調査							
巻次								
シリーズ名	出本市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	23							
編著者名	岩崎新輔、橋本理和							
編集機関	出本市教育委員会							
所在地	〒899-0292 鹿児島県出本市緑野1番3号 TEL. 0996-63-2111							
発行年月日	西暦2013年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		経緯度 (海王測地系)		調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
かめいやまじょうあと 亀井山城跡	かごしまけんいせき のだちょうかみみよ じょうないはか 鹿児島県出本市 野田町上名 城内地		8-302	32° 02' 59"	130° 15' 51"	20071107～ 20071205、 20081106～ 20081204、 20091105、 20091204、 20101109～ 20101207	2007年度 194.3 2008年度 348 2009年度 305.7 2010年度 386.2	史跡整備
うたまついでせき 上松遺跡	鹿児島県出本市知識町山下		8-94	32° 05' 13"	130° 20' 23"	20080925	4.5	個人住宅
かどういせき 御堂遺跡	鹿児島県出本市下加藤町1村西		8-92	32° 05' 40"	130° 20' 01"	20090119	2.2	個人住宅
いずみかづら 出水城跡	鹿児島県出本市鶴町		8-24	32° 04' 04"	130° 21' 34"	20090302～ 20090304	11.6	治山事業
いずみかづら 出水貝塚	鹿児島県出本市中央町雲葉		8-1	32° 04' 55"	130° 20' 54"	20091215～ 20091216	4	個人住宅
うげくちだにいせき 受口壇遺跡	鹿児島県出本市野田町上名受口		8-386	32° 03' 02"	130° 15' 15"	20091221	4	携帯電話基地
にしきまのういせき 西木佐木野遺跡	鹿児島県出本市野田町上名木野	402080	8-392	32° 01' 47"	130° 15' 43"	20091221	4	携帯電話基地
おおくぼいせき 大久保遺跡群	鹿児島県出本市高尾野町大久保大塚		8-290	32° 03' 36"	130° 19' 43"	20100611	21	高校施設
ししやまのういせき 桃山遺跡	鹿児島県出本市野田町上名桃山		8-343	32° 01' 35"	130° 16' 53"	20101028	6	携帯電話基地
かみみょういせき 上名遺跡群	鹿児島県出本市野田町上名町原		8-314	32° 03' 22"	130° 16' 30"	20110215	6	個人住宅
かみみょういせき 上名遺跡群	鹿児島県出本市野田町上名大塚		8-314	32° 03' 15"	130° 16' 24"	20110215	6	個人住宅
こほりばいせき 小針原遺跡	鹿児島県出本市境町針原		8-201	32° 08' 07"	130° 21' 28"	20110617	8.4	個人住宅
しちこおりやまいせき 下郡山遺跡	鹿児島県出本市文化町鎌平		8-95	32° 05' 34"	130° 20' 231"	20110720～ 20110722	182.5	工場建設
のぞいせき 野添遺跡	鹿児島県出本市下加藤町津山		8-360	32° 06' 19"	130° 20' 07"	20110810	6	個人住宅
ししやまのういせき 下名遺跡群	鹿児島県出本市野田町下名		8-313	32° 03' 26"	130° 16' 13"	20111007	14.2	介護施設建設
つばのうらしいせき 坪ノ後遺跡	鹿児島県出本市下加藤町ノ津中		8-214	32° 07' 21"	130° 20' 49"	20111107	6	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項		
亀井山城跡	中世山城	中世	堀立建物、大型土坑、土壇、柱穴跡、石敷遺構、石組遺構、土師器集積遺構	土師器、大型陶器、須恵質陶器、瓦質器、中世陶磁器、輸入陶磁器、碁石、滑石製品	大型の須恵質陶器(甕類)や磨鉢が多く出土。遺物はほぼ中世の時期に限られる。			
上松遺跡	散布地	縄文	出土なし	出土なし				
御堂遺跡	散布地	古墳、中世	出土なし	出土なし				
出水城跡	中世山城	中世	柱穴跡、通路状遺構	中世陶磁器	事業中止			
出水貝塚	貝塚	縄文、中世	貝層ブロック	縄文土器	遺構現地保存			
受口壇遺跡	散布地	縄文、古世	出土なし	出土なし				
西木佐木野遺跡	散布地	縄文、古世	出土なし	出土なし				
大久保遺跡群	散布地	縄文	出土なし	出土なし				
桃山遺跡	散布地	縄文	出土なし	出土なし				
上名遺跡群	散布地	中世	出土なし	出土なし				
上名遺跡群	散布地	中世	出土なし	出土なし				
小針原遺跡	散布地	縄文	出土なし	出土なし				
下郡山遺跡	散布地	縄文、古墳	時期不明ピット	古墳時代土器	中世陶磁器	本調査へ移行		
野添遺跡	散布地	縄文～古代	出土なし	出土なし				
下名遺跡群	散布地	縄文～中世	出土なし	出土なし				
坪ノ後遺跡	散布地	縄文	出土なし	出土なし				
要約	<p>亀井山城跡からは中世後半期の時期を中心に、柱穴跡のほか、大型土壇や土坑、石敷・石組遺構などが同時期を中心とした多様な遺物と共に出土した。本城跡は山城遺構は広範囲に良好に残存しているが不明な点が多かった。今回の調査で人々が本城跡に生活していたことが判明した。</p> <p>市内遺跡分布調査では、市町村合併後の旧高尾野町、野田町地区を対象に踏査を行い、計120の新遺跡を確認した。</p> <p>開発に伴う試掘・確認調査では、15の周辺の遺跡と周辺外の1地点で発掘調査を行った。調査の結果、1遺跡で事業中止、1遺跡は現地保存措置、1遺跡は本調査へ移行となり、遺跡の保護に努めることができた。</p>							

序 文

本書は、鹿児島県出水市教育委員会が平成19～24年度の6箇年にかけて、国・県の補助を受けて実施した、出水市内遺跡の調査報告書です。

出水市指定史跡である亀井山城跡（かめいやまじょうあと）は、平安時代末期に築かれたとされる中世山城跡です。確認されている曲輪は14箇所あり、そのほかに土塁や空堀といった中世山城特有の遺構が良好に残されており、その山城全体の広さは北薩地域でも最大級のものであります。

発掘調査では、中世後期を中心に建物跡や生活の跡を示す土器類が多く出土しました。

また、出水市内遺跡の保護と活用を目的に、遺跡分布調査を高尾野地域と野田地域を中心に行いました。調査の結果、新たに120の遺跡が確認されました。分布調査の成果は、遺跡保護と開発計画との調整のための基礎的な資料となります。

この報告書が、文化財の保護と学術研究のために広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、本調査に際して多大な御理解と御協力をいただきました地元住民の方々をはじめ、本報告書を作成するにあたって、御指導をいただきました諸先生ならびに関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月

出水市教育委員会
教育長 溝口省三

例 言

- 1 本書は、鹿児島県出水市教育委員が平成19～24年度の6箇年に、国・県の補助を受けて実施した、出水市内遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査及び分布調査、報告書作成は、出水市教育委員会が調査主体となって行い、生涯学習課 岩崎新輔が調査担当した。
- 3 亀井山城跡の発掘調査全般について、三木靖氏（鹿児島国際大学名誉教授）に御指導を賜った。出土遺物の一部については、中村和美氏（鹿児島県教育委員会）に御指導を賜った。
- 4 各調査の現場各種実測図、写真撮影は岩崎が行った。また、報告書作成に係る遺物全点の実測図作成及び遺構・遺物実測図浄書は岩崎が整理事業員の協力を得て行った。本文執筆のうち、I部第1章と第2章は出水市教育委員会生涯学習課 橋元邦和が、I部第3章から第5章及び、II部、III部については岩崎が行った。全編の編集・図版レイアウトは岩崎が行った。
- 5 出土遺物の写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て、同センター調査課 吉岡康弘氏と同辻明啓氏が行った。なお、分布調査遺物写真撮影については、岩崎が行った。
- 6 I部亀井山城跡発掘調査編第1章の亀井山城跡地形測量平面図については、株式会社みともコンサルタントに委託して作成した。
- 7 I部亀井山城跡発掘調査編第4章の自然科学分析については、炭化物年代測定、樹種同定、リン・カルシウム分析、花粉・寄生虫卵分析を古環境株式会社、炭化物年代測定をバリノ・サーヴェイ株式会社それぞれ委託して行った。
- 8 本書では三木靖氏作製の亀井山城跡縄張図を基に、縄張図の「曲輪1」を市指定史跡である「本城跡」とし、同図及び野田町郷土誌記載内容から曲輪2を「蔵之城跡」とする。
- 9 本書のレベルはすべて海拔高である。
- 10 本書で使用した土層の色調表記は標準土色帖の2001年版による。
- 11 本書では遺構のアルファベット表記は次の通りとする。
SBP:掘立柱建物柱穴跡 P:柱穴跡、小穴 SK:土坑 ㇿ' DP:土師器集積遺構
- 12 本書では遺物の成形調整方法については、カタカナで表記する。
- 13 本書に記載した遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真図版に記した番号と一致する。
- 14 発掘調査で得た全ての成果については、出水市教育委員会で保管し、活用する。

本文目次

序文
例言
報告書抄録

第I部 亀井山城跡の発掘調査	1
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 発掘調査の組織	1
第3節 日誌抄	3
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 遺跡の環境	7
第3章 調査の概要	13
第1節 調査トレンチの設定	13
第2節 土層と空堀トレンチ	
第3節 本城跡	17
(1) 中央部	17
(2) 西側	25
(3) 東側	48
(4) 土塁下基壇・虎口部	53
第4節 蔵之城跡	63
(1) 概要	63
第4章 自然科学分析	71
第5章 まとめ	86
第II部 分布調査	93
第III部 市内遺跡試掘・確認調査	99

挿図目次

付図 遺跡の位置		
第1図 周辺の遺跡	9	
第2図 亀井山城跡縄張り図	10	
第3図 亀井山城跡地形測量平面図	11	
第4図 亀井山城跡発掘調査トレンチ配置図	14	
第5図 本城跡 5・18・19トレンチ土層断面図	15	
第6図 蔵之城跡 8・9トレンチ、空堀トレンチ層断面	16	
第7図 本城跡遺構検出図	18	
第8図 本城跡 4トレンチ遺構検出図	19	
第9図 本城跡 4トレンチ大型土坑	20	
第10図 本城跡 20トレンチ遺構検出図	21	
第11図 本城跡 20トレンチ掘立柱建物ピット	22	
第12図 本城跡中央部遺構出土遺物 1	25	
第13図 本城跡中央部表～包含層出土遺物 1	26	
第14図 本城跡中央部表～包含層出土遺物 2	27	
第15図 本城跡 15トレンチ遺構検出概要図	29	
第16図 本城跡 16トレンチ遺構検出概要図	30	
第17図 本城跡 16トレンチ土師器集積遺構	31	
第18図 本城跡 16トレンチ土師器集積遺構出土遺物 1	32	
第19図 本城跡 16トレンチ土師器集積遺構出土遺物 2	33	
第20図 本城跡 16トレンチ土師器集積遺構出土遺物 3	34	
第21図 本城跡 16トレンチ遺構出土遺物 1	35	
第22図 本城跡西側遺構出土遺物 1	36	
第23図 本城跡西側遺構出土遺物 2	37	
第24図 本城跡西側表～包含層出土遺物 1	38	
第25図 本城跡西側表～包含層出土遺物 2	39	
第26図 本城跡西側表～包含層出土遺物 3	40	
第27図 本城跡西側表～包含層出土遺物 4	41	
第28図 本城跡西側表～包含層出土遺物 5	42	
第29図 本城跡西側表～包含層出土遺物 6	43	
第30図 本城跡西側表～包含層出土遺物 7	44	
第31図 本城跡 8・12トレンチ遺構検出図	48	
第32図 本城跡 14トレンチ遺構検出図	48	
第33図 本城跡東側遺構出土遺物	50	
第34図 本城跡東側出土遺物表～包含層出土遺物 1	51	
第35図 本城跡東側出土遺物表～包含層出土遺物 2	52	
第36図 本城跡 10トレンチ遺構検出概要図	54	
第37図 本城跡土塁下基壇部遺構出土遺物 1	55	
第38図 本城跡土塁下基壇部遺構出土遺物 2	56	
第39図 本城跡土塁下基壇部遺構出土遺物 3	57	
第40図 本城跡土塁下基壇部遺構出土遺物 4	58	

第41図	本城跡土塁下基壇部表～包含層 出土遺物1	59
第42図	本城跡土塁下基壇部表～包含層 出土遺物2	60
第43図	本城跡虎口トレンチ表～包含層 出土遺物	61
第44図	本城跡その他の出土遺物	61
第45図	蔵之城跡遺構検出図	64
第46図	蔵之城跡トレンチ遺構検出状況 及び地盤上面遺物出土状況	65
第47図	蔵之城跡ピット平面・断面横断図	66
第48図	蔵之城跡8トレンチ土坑半掘 及び土層断面図	67
第49図	蔵之城跡遺構出土遺物	68
第50図	蔵之城跡表～包含層出土遺物	69
第51図	土師器分類図1	88
第52図	土師器分類図2	89
第53図	法量差相関グラフ	90
第54図	平成19年度新発見遺跡位置図	94
第55図	平成20年度新発見遺跡位置図	95
第56図	平成21年度新発見遺跡位置図1	96
第57図	平成21年度新発見遺跡位置図2	96
第58図	平成22年度新発見遺跡位置図	97
第59図	平成20・21年度市内試掘・確認 調査遺跡	101
第60図	平成21・22年度市内試掘・確認 調査遺跡	102
第61図	平成22・23年度市内試掘・確認 調査遺跡	103
第62図	平成23年度市内試掘・確認 調査遺跡	104

表目次

第1表	周辺の遺跡	12
第2表	本城跡4トレンチ遺構計測表1	19
第3表	本城跡20トレンチ遺構計測表1	23
第4表	本城跡20トレンチ遺構計測表2	24
第5表	本城跡中央部出土遺物観察表	28
第6表	本城跡15トレンチ遺構計測表	30
第7表	本城跡西側出土遺物観察表1	45
第8表	本城跡西側出土遺物観察表2	46
第9表	本城跡西側出土遺物観察表3	47
第10表	本城跡8トレンチ遺構計測表	49
第11表	本城跡12トレンチ遺構計測表	49
第12表	本城跡14トレンチ遺構計測表	49
第13表	本城跡東側出土遺物観察表	52
第14表	本城跡10トレンチ遺構計測表	53
第15表	本城跡土塁下基壇部・虎口部 出土遺物観察表1	62
第16表	本城跡出土石器観察表	62
第17表	蔵之城跡トレンチ遺構計測表	67
第18表	蔵之城跡出土遺物観察表	70
第19表	平成19年度新発見遺跡一覧	94

第20表	平成20年度新発見遺跡一覧	95
第21表	平成21年度新発見遺跡一覧	96
第22表	平成22年度新発見遺跡一覧	97
第23表～第26表	平成19～23年度市内遺跡 試掘・確認調査一覧	100

図版目次

図版1	本城跡の調査1	105
図版2	本城跡の調査2	106
図版3	本城跡の調査3	107
図版4	本城跡の調査4	108
図版5	本城跡の調査5	109
図版6	本城跡の調査6	110
図版7	本城跡の調査7	111
図版8	本城跡の調査8	112
図版9	蔵之城跡の調査1	113
図版10	蔵之城跡の調査2	114
図版11	平成21年度現地説明会	115
図版12	本城跡出土遺物1	116
図版13	本城跡出土遺物2	117
図版14	本城跡出土遺物3	118
図版15	本城跡出土遺物4	119
図版16	本城跡出土遺物5	120
図版17	本城跡出土遺物6	121
図版18	本城跡出土遺物7	122
図版19	本城跡出土遺物8	123
図版20	本城跡出土遺物9	124
図版21	本城跡出土遺物10	125
図版22	蔵之城跡出土遺物	126
図版23	分布調査採集遺物	127

第 I 部 亀井山城跡の発掘調査

第 1 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至るまでの経緯

出水市野田町上名の亀井山城跡は、古くから残る城跡として地元住民に知られており、また土地所有者の城跡に対する保護意識が強く、良好な状態で保存されてきた。しかしながら、平成 11 年に発生した台風 18 号の災害等により保存状況が悪化していった。

そこで、市町合併前の旧野田町では、平成 13 年度に策定した第 4 次野田町振興計画において公園として保全を図ることとした。

この計画を進めるにあたって平成 14 年度に旧野田町教育委員会社会教育課（以下、「旧町社会教育課」という。）は、城跡の全体像を把握するため、三木靖氏（鹿児島国際大学短期大学部教授）に「縄張図」の作成を依頼した。

三木氏の調査の結果、亀井山城跡は 14 の曲輪や土塁などが良好な状態で現存していることが分かり城跡の保存活用に対して旧町社会教育課がその計画を立案することになった。

平成 15 年度～同 16 年度は緊急地域雇用創出特別基金事業（史跡環境整備事業）を活用し、倒木等の処理を行い城跡の保全に努めるとともに、平成 15 年 7 月に南九州城郭談話会主催で「亀井山城と野田の中世城郭」と題して三木氏の講演と見学会を開催していただいた。

平成 17 年度に至り、亀井山城跡の主要部分である本城跡（曲輪 1）について平成 18 年 1 月 9 日付けで町指定史跡として文化財指定した。

その後、平成 18 年 3 月に旧出水市、旧高尾野町、旧野田町の 1 市 2 町が合併し、新制出水市として出水市教育委員会生涯学習課が旧町社会教育課の計画を引き継ぎ、平成 19 年度から「市内遺跡（亀井山城跡）発掘調査等補助事業」を実施する計画を国及び県に申請した。申請は認められ、発掘調査等補助事業を遂行することとなった。

現地発掘調査及び報告書作成作業は、平成 19 年度から同 24 年度の 6 箇年度で実施した。

第 2 節 発掘調査の組織

平成 19 年度 市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会			
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三	
調査企画者	〃	教 育 部 長	小野田 彰	
〃	〃	生涯学習課	課 長	川上 義夫
〃	〃	〃	主幹兼文化係長	園田 正治
事務・調査担当	〃	〃	主 査	岩崎 新輔
調査指導者	鹿児島国際大学短期学部	教 授	三木 靖	
発掘調査作業員	大野藤見、鐘ヶ江洋子、川口直子、木場安雄、田代貞次、田下正廣			

飛松奈緒美、福浜信夫、松ヶ野由紀子、道上利枝子、築瀬真一
吉岡二千子

分布調査作業員 須賀良一、田下正廣、野間口三千男、福浜信夫
整理作業員 市来善美、澤田知香子、道上利枝子、山口明子

平成 20 年度 市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	崎元 健一
〃	〃	生涯学習課	課 長 川上 義夫
〃	〃	〃	主幹兼文化係長 園島 正治
事務・調査担当	〃	〃	主 査 岩崎 新輔
調査指導者	鹿児島国際大学短期学部	教 授	三木 靖
発掘調査作業員	小野清則、鐘ヶ江洋子、川口直子、川口渉、木場安雄、田下正廣 田代貞次、野上洋弥、福浜信夫、外村義弘、道上利枝子、牟禮万里子		
分布調査作業員	川口渉、田代貞次、田下正廣、福浜信夫		
整理作業員	市来善美、小田幸枝、道上利枝子、宮内あり子		

平成 21 年度 市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	崎元 健一
〃	〃	生涯学習課	課 長 宇都宮 久雄
〃	〃	〃	主幹兼文化係長 園島 正治
事務・調査担当	〃	〃	主 査 岩崎 新輔
調査指導者	鹿児島県教育庁文化財課	文 化 財 主 事	中村 和美
発掘調査作業員	大塚冷子、川口直子、貴島和英、清田裕、西正弘、原田克己、 原田秀夫、久田有一、平藪真由美、福浜信夫、道上利枝子、山口仁美		
分布調査作業員	木原義次、迫田博志、西正弘、福浜信夫		
整理作業員	小田幸枝、坂口健太郎、本田哲郎		

平成 22 年度 市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	植村 猛
〃	〃	生涯学習課	課 長 宇都宮 久雄
〃	〃	〃	主幹兼文化係長 園島 正治

事務・調査担当	〃	〃	主 査	岩崎 新輔
調査指導者	鹿児島県教育庁文化財課		文化財主事	中村 和美
発掘調査作業員	市村次男、岩崎義彦、上野純矢、大塚冷子、小野篤治、川口直子 川畑健治、北嶋善政、田中伸一、福浜信夫、古里敏廣、山本松男 湯田雅博			
分布調査作業員	川畑健治、北嶋善政、迫田博志、田代貞次			
整理作業員	金松卓哉、永福絵里奈、宮内あり子			

平成 23 年度 市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会			
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三	
調査企画者	〃	教 育 部 長	植村 猛	
〃	〃	生涯学習課 課 長	園畠 正治	
〃	〃	文化係 長	吉永 恵子	
事務・調査担当	〃	主 査	岩崎 新輔	
	〃	主 査	橋元 邦和	
整理作業員	江島康平、中村憲博			

平成 24 年度 市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会			
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三	
調査企画者	〃	教 育 部 長	植村 猛	
〃	〃	生涯学習課 課 長	園畠 正治	
〃	〃	主幹兼文化係 長	内之浦 昭	
事務・調査担当	〃	主 査	岩崎 新輔	
	〃	主 査	橋元 邦和	
調査指導者	鹿児島国際大学	名 誉 教 授	三木 靖	
〃	鹿児島県教育庁文化財課	文化財主事	中村 和美	
整理作業員	田方由美子、鳥飼めぐみ、山下正満			

発掘調査及び本報告書の作成にあたり、多くの諸機関並びに諸氏にご協力とご指導を頂いた。以下に芳名を記し、ここに感謝の意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

青崎 和憲 有川 孝行 井上 秀明 中原 一成 中村 和美
鹿児島県教育庁文化財課 鹿児島県立埋蔵文化財センター

第 3 節 日誌抄

調査の経過を年度ごとに週単位で略述する。

平成 19 年度

[11月7日(水)～9日(金)]

本城跡内をⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区に分ける。このうちⅡ区内に4×2メートルのトレンチを任意に3箇所設定する。1トレンチの北東角から石塁を検出、石塁は北方向に続いており石塁の西側が基壇状の地形であることが判明した。この基壇状地点中央部付近に12×2.4メートルで4トレンチを設定。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。野田教育支所来跡。

[11月12日(月)～16日(金)]

1～3トレンチは一旦掘り下げを中止し、4トレンチの遺構検出に努める。Ⅳ区内に3×1.5メートルで地層確認目的の5トレンチを設定、掘り下げ、地盤検出面まで人力による掘削終了。Ⅱ区内南側土塁の下位にも石塁で区切られた段差のある地点があり、ここに14×2メートルで6トレンチ設定、掘り下げと同時に石塁も清掃作業。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。

[11月19日(月)～22日(木)]

4トレンチを東西両側に拡張、表土剥ぎ後Ⅰ層遺構精査。3トレンチを南側に拡張、7トレンチとし重機表土除去後Ⅰ層遺構精査。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。

[11月26日(月)～30日(金)]

鹿児島国際大学短期学部教授三木靖氏現地指導。4トレンチ石塁遺構の残存状況確認作業。5トレンチ地盤下位層確認、風化土壌下位は頑強な岩盤を確認。土層断面図作成。7トレンチを一部拡張し遺構精査を続ける。Ⅳ区内に8トレンチを、Ⅲ区内に9トレンチをそれぞれ4×2メートルで設定、人力で掘り下げ。8トレンチからビット検出、精査作業。6トレンチ東側に10トレンチ、4トレンチ東側に11トレンチを設定、人力により掘り下げ。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。市生涯学習課来跡。

[12月3日(月)～5日(水)]

4・6・8・9・10トレンチ各遺構検出状況写真撮影や実測作業行う。これらのトレンチは継続調査のためシートを敷き埋戻す。全トレンチ配置図作成。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。器材撤収し19年度現地調査終了。

平成 20 年度

[11月6日(木)～7日(金)]

8トレンチ南東側に4×2メートルで12・13・14トレンチを設定、人力により掘り下げ。14トレンチはビット数基検出のため拡張。6・8・9・10トレンチを重機で再掘。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。野田教育支所来跡。

[11月10日(月)～14日(金)]

6・9・10トレンチ重機で拡張、各石敷・石組遺構上面まで掘り下げる。12・13トレンチⅠ層掘り下げ。14トレンチ再度拡張する。6トレンチと9トレンチの中間部付近に4×2メートルで15トレンチ設定、人力で掘り下げ。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。

[11月17日(月)～21日(金)]

6 トレンチ石敷遺構検出。9 トレンチ南側を拡張、人力で掘り下げ。10 トレンチ地盤上面からピット、石敷遺構を検出。14 トレンチの検出ピットを5センチメートルほど段掘りし遺構精査する。15 トレンチ重機で拡張、人力で1層掘り下げ。16 トレンチを9 トレンチと15 トレンチとの間に設定、重機で掘り下げ。

[11月25日(火)～28日(金)]

6 トレンチ石敷遺構精査と清掃後写真撮影。9 トレンチⅡ下層遺物測量後取り上げ。10 トレンチ石敷遺構精査と清掃後写真撮影。12 トレンチ遺構精査後写真撮影。13 トレンチ地盤上面層精査。14 トレンチピット遺構半掘精査後、検出状況写真撮影。15 トレンチ遺構精査、トレンチ南側拡張する。16 トレンチ小片遺物等一括取り上げ。雨天が多かったため各トレンチ排水作業に追われる。

[12月1日(月)～4日(木)]

三木靖先生現地指導。6 トレンチ各検出遺構精査。9 トレンチⅡ下層遺物測量後取り上げ、石敷遺構清掃後写真撮影。12・14 トレンチ遺構位置図実測図作成。15 トレンチ遺構精査後写真撮影、遺物一括取り上げ。16 トレンチⅡ下層掘り下げ、出土遺物は検出遺構ごとに取り上げ、これ以外は測量後取り上げ。土師器集積遺構検出するが、詳細調査は来年度以降とするため検出状況写真撮影後現地保存処置を施す。各トレンチ検出遺構面を保護シートで覆い埋め戻す。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。器材撤収し20年度現地調査終了。

平成21年度

[11月5日(木)～6日(金)]

6・9・10・14・15・16 トレンチ重機により再掘、シート検出後人力で再掘。6・10 トレンチは石敷遺構範囲確認のため再掘と同時に拡張。16 トレンチ土師器集積遺構再掘。4 トレンチと5 トレンチの間に17 トレンチを10×2メートルで設定、人力にて掘り下げ。虎口地点に門柱跡や通路関係遺構有無確認のためサブトレンチを4箇所設定、それぞれS1T～S4Tとし、人力にて掘り下げ。市生涯学習課来跡。

[11月9日(月)～13日(金)]

6 トレンチ拡張部石敷遺構検出、清掃作業、共伴遺物一括取り上げ後、各状況写真撮影。10 トレンチ石敷遺構検出、清掃作業後各状況写真撮影。16 トレンチ土師器集積遺構実測図作成後、遺物取り上げ。17 トレンチ石敷遺構検出。溝状遺構検出のためトレンチ内にサブトレンチ設定、掘り下げ。曲輪2の蔵之城跡発掘準備作業。県立埋蔵文化財センター中原氏来跡。出水市歴史民俗資料館井上秀明氏見学。

[11月16日(月)～20日(金)]

本城内曲輪の虎口平坦部にサブトレンチを4箇所(S1T～S4T)設定、人力で掘り下げ。遺物一括取り上げ。遺構検出、遺物出土状況等写真撮影。15・16・17 トレンチポンプで雨水排出。蔵之城跡曲輪内に4×1.5メートルで1 トレンチ、4×2メートルで2 トレンチを設定、人力で掘り下げ、遺構精査まで。市生涯学習課、阿久根市郷土史研究会来跡。

[11月24日(火)～28日(土)]

28 日予定の現地説明会準備のため各トレンチ清掃作業、会場準備。28 日には予定通り現地説明会開催。蔵之城跡内に 4×1.2 メートルで 3 トレンチを設定、人力で掘り下げ。長島町教育委員会来跡。県立埋蔵文化財センター富山氏、花田氏来跡。

[11月30日(月)～12月4日(金)]

本城跡内 10・15 トレンチ遺構検出状況平板実測。14 トレンチ検出遺構復元現地検討。各トレンチ埋め戻し作業開始。蔵之城跡 1～3 トレンチ掘り下げ、また、新たに 7×2 メートルで 4 トレンチ設定、人力で掘り下げ。各トレンチ出土状況等写真撮影。トレンチ配置状況実測図作成。野田教育支所来跡。全トレンチ埋め戻し、器材撤収して 21 年度現地調査終了。

平成 22 年度

[11月9日(火)～12日(金)]

本城跡 4・14 トレンチ覆土・保護シート除去。昨年度まで検出の遺構建物復元検討。蔵之城跡内の樹木の影響がない地点に任意で 5・6・7・8 トレンチを設定、人力で掘り下げ。

[11月15日(月)～19日(金)]

本城跡内 18 トレンチを地形追確認で、19 トレンチを石罫遺構痕跡確認のため設定、重機で表土掘り下げ、遺構検出面から人力で掘り下げ。4 トレンチの遺構広がり確認のための 20 トレンチを設定、人力で掘り下げ、検出遺構精査。蔵之城跡 5・6・7・8 トレンチ掘り下げ、遺構検出・遺物出土状況写真撮影。各遺構の半掘作業。7×1.5 メートルで 9 トレンチ設定、人力で掘り下げ。

[11月22日(月)～26日(金)]

各トレンチ雨水除去。本城跡 4・20 トレンチ遺構精査、建物復元検討。18 トレンチ掘り下げ。蔵之城跡 5・6 トレンチ検出遺構実測図、5～9 トレンチ配置図作成。現地一般公開を 26 日から随時実施、見学者 1 名。市生涯学習課来跡。

[11月29日(月)～12月3日(金)]

本城跡 4・20 トレンチ遺構精査、建物復元検討。石罫遺構痕跡確認のための 21・22 トレンチを設定、重機により遺構確認面まで掘り下げ。蔵之城跡 8 トレンチ土坑清掃、科学分析用土壌試料採取後埋め戻し。同 9 トレンチ検出遺構実測図作成後埋め戻し。同 5～7 トレンチ埋め戻し。本城跡と蔵之城跡の間の空堀部に空堀トレンチを設定、人力で掘り下げ、完掘状況写真撮影後土層断面実測図作成。県文化財課中村和美氏現地指導。県立埋蔵文化財センター中原氏、田畑氏、森氏来跡。出水市歴史民俗資料館井上氏来跡。野田教育支所来跡。一般市民 11 名見学。

[12月6日(月)～7日(火)]

本城跡 4 トレンチ検出土坑段掘り、検出状況写真撮影。同 18・19 トレンチ土層断面図作成。同 20 トレンチ遺構精査、建物復元検討。本城跡新設トレンチ配置図作成。空堀トレンチ埋め戻し。市歴史民俗資料館脇岡隆夫氏来跡。一般市民 2 名見学。4・20 トレンチは実測作業未了(※翌 23 年 2 月までに調査員により終了)のためこれ以外のトレンチを埋め戻し、器材撤収して 22 年度現地調査終了。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

今回調査した亀井山城跡は出水市野田町上名地区字城内に所在する。

遺跡の所在する出水市は、鹿児島県の最北端に位置し、熊本県水俣市に接する県境の市である。

北東部は、矢筈岳（687m）を中心に輝石安山岩を岩盤とする肥薩山塊がほぼ東西方向に走り、熊本県水俣市及び鹿児島県伊佐市と接する。

南部は、紫尾山（1,067m）を主峰とする四万十層群と一部花崗閃緑岩よりなる紫尾山地がほぼ南北方向に走り、薩摩郡さつま町及び薩摩川内市と接する。紫尾山は、北薩一の高峰である。

この紫尾山地と、出水平野との境の断崖下には、シラス台地と高位段丘がある。これに続く大野原町・高尾野町・野田町の一帯は、洪積台地の扇状地で広大に広がっている。この扇状地を囲むように、河岸段丘と沖積地が発達している。

矢筈山地に源を発した米ノ津川と、紫尾山地を源とする平良川は、中流域で合流し、北流して八代海に注ぐ。

平良川及び米ノ津川の左岸には、知識面と呼ばれる河岸段丘が扇状地をとりまくように細長く形成され、中流域では米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達する。

なお、下流域では三角洲や海岸平野となり八代海となるが、海岸部は江戸時代以後干拓が行われ、現況の地形を呈す。

西部は、扇状地及び高尾野川、野田川、岩下川（西目川）によって形成された河岸段丘や沖積地で、阿久根市と境を接する。

北西部は、遠浅の八代海を距て、出水郡長島町及び熊本県の天草諸島を望むことができる。八代海では遠浅を利用した浅草のりの養殖が盛んであり、また、冬には季節風をいっぱいにはらんだ白い帆のけたうたせ船がクマエビ漁にいそしみ、荒崎の干拓地には、冬の使者、ナベヅル・マナヅルらがシベリアからの長旅を癒すように群舞している。

亀井山城跡は、北に舌状に突出した洪積地を利用して作られており、東西に沖積地を利用した田が外堀を成す形で広がっている。眺望は、東に出水平野を、北に野田町一円および八代海を、西に阿久根市脇本を望む位置にあり、標高は約64メートルである

第2節 遺跡の環境

出水地方は、早くから考古学・古代学・歴史学研究的フィールドとして、学術上重要な地として注目されてきた。

出水市の東部、伊佐市、水俣市と接する標高約500mの上場高原一帯は、旧石器時代遺跡が集中し、特に上場遺跡は、始良テフラ（約2.4万年前）を境に爪形土器と細石器の共伴やナイフ形石器、台形石器等を包含する7時期の文化層の存在が明らかになった。隣接する伊佐市日東には、黒曜石原産地が所在する。

縄文時代遺跡の立地は、主に扇頂部及び扇端部の河岸段丘や山麓縁辺、裾部に集中している。早・

前・後期の牟田尻遺跡、カラン迫遺跡、中尾Ⅰ・Ⅱ遺跡などがあり、前期の荘貝塚、中期の柿内遺跡や江内貝塚、後期の出水貝塚、晩期の沖田岩戸遺跡、大坪遺跡などがある。

特に出水貝塚は大正9年、京都大学によって本県で最初の貝塚遺跡調査が行われ、戦後の調査によって貝塚下から早期押型土器が出土し、貝層中及び貝層上部から中・後期の土器(南福寺式土器・出水式土器)などが出土するほか、埋葬人骨も計7体確認されている。また、江内貝塚でも中期を中心とする遺物や埋葬人骨が出土している。

縄文晩期遺跡では、沖田岩戸遺跡、尾崎B遺跡、大坪遺跡などがあり、いずれの遺跡も発掘調査が行われ、出水地方の考古学研究に大きな成果をあげている。

弥生時代遺跡としては、堂前遺跡や下高尾野遺跡があり、これらの遺跡により、弥生時代中期の覆石墓から後期の葺き石土壙墓、さらに古墳時代の地下式板石積石室へと移行する埋葬形態の変遷を知ることができる。弥生時代終わりの埋葬跡では、箱式石棺の形態を持つ石棺が境町切通に出現する。

古墳時代になると、洪積台地縁辺に位置する、短甲が出土した溝下遺跡(溝下古墳群)や、八代海と東シナ海をつなぐ黒ノ瀬戸海峡によって隔てられた長島には、5世紀から7世紀にかけて高塚古墳が出現する。

出水の地名が文献資料にあらわれるのは、続日本記の宝亀9年(778年)11月の条に遣唐船が出水海岸に漂着、その後和名抄には「伊豆美」とあり、建久因田帳に「和泉郡」として登場する。平安時代には、「院」が成立し山門院となり和泉郡から独立して荘園化し、島津荘の成立と共に吸収される。その後、守護被官本田氏一族の所領に組み込まれ、やがて島津用久が薩州家を興す(1425年)と共に荘園は崩壊する。また、島津忠久が元暦2年(1185年)に島津荘下司職に補任され、忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させ、木牟礼城は五代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。

藩政期に入ると、島津家の外城制度の下に藩境地としての政治的要所の性格を強め、藩内外から派遣された郷士が居を構える。そして、県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「籠」を形成するに至った。いわゆる出水市籠町の籠地区は、出水市街地の南部一帯に所在し、地区内の道路は格子状に整然と区画され、各家々の周りには石垣・生垣が巡らされ、敷地内には畑を広くするなどして作られており、町の一区画ごとが「砦」や「廓(曲輪)」のような性格を持っており、「籠」の歴史的な背景を裏付けるものである。また、野田町上名の熊陣地区(地蔵・大日・天神・仮屋集落)にも藩政期の石垣や武家門など、当時の面影を現在に残すところもある。

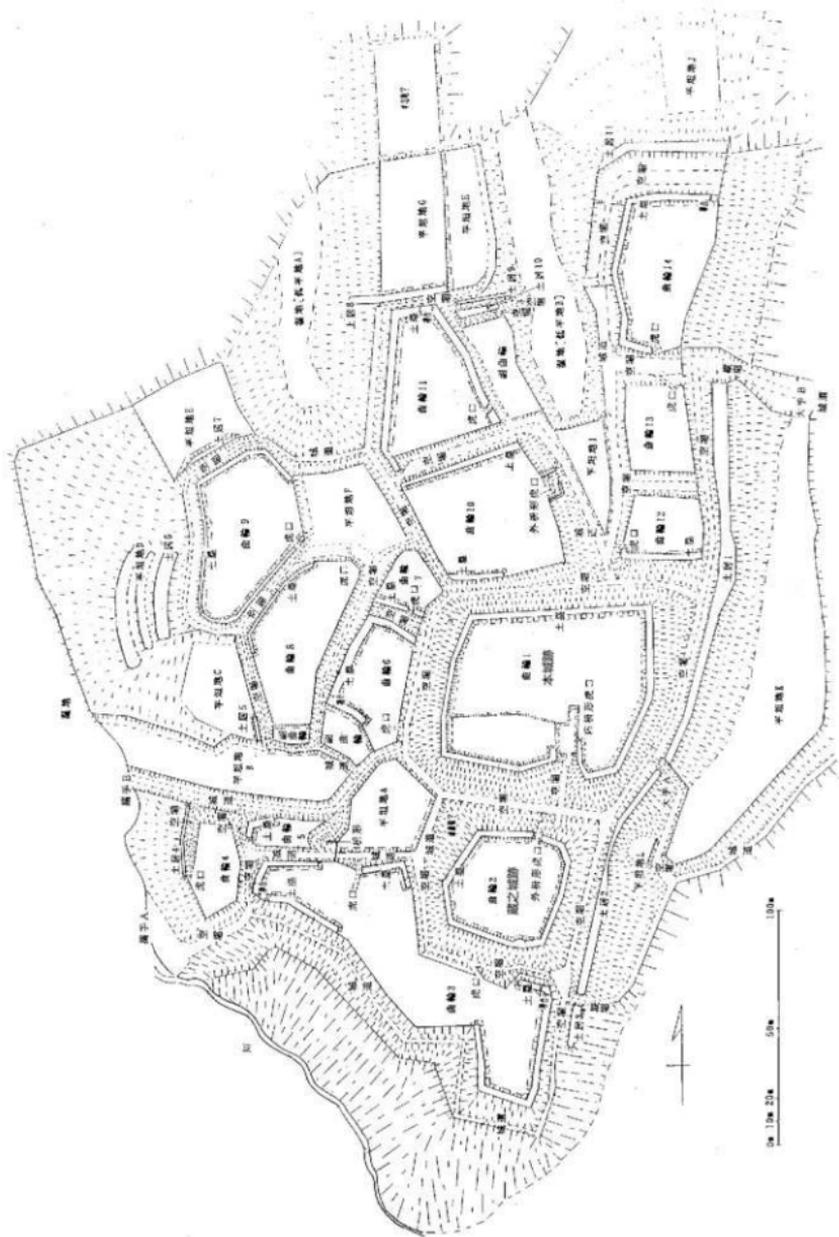
「地誌備考」、「諸家大要略記」、「薩日隅三州他家古城由来記」等によれば、亀井山城を築いたとされる種国は平氏千葉氏流で、種方一祖国一國秀一秀忠となり、種方は肥前神崎荘、河副荘の本領主で、その子種国は権別当、平次郎大夫と称し、平治年間(1156~1159)に初めて山門院郡司(院司)職として野田亀井山城に居し、その子国秀は権別当を称したとある。国秀の子秀忠は、将軍家下文により、山門院の郡司職を安堵され、在地領主として島津氏の被官本田氏の入部に対しても協力をしている。山門郡司一族は、鎌倉時代以降内乱期を通じて守護島津氏側に立っており、実質的に島津氏へ被官化していったようである。亀井山城のある山門院は南北朝の争いの後、島津家を2分した総州家と奥州家の争いで奥州家の援護を行った人吉荘の相良氏が木牟礼城の落城に際し、奥



第1図 周辺の遺跡

州家から与えられており、応永29年(1422年)から一族の村山備前守を派遣して25年間相良氏が支配することとなったが、相良氏の同族争いの中で山門院は放棄されたと相良氏の史料「洞前居士状」にある。亀井山城の東側、湿地で隔てられた台地を地元では、「熊陣」と呼んでおり、相良氏が陣地を構えた場所であると伝えられている。

その後、亀井山城が登場するのは、16世紀中頃である。地域の伝承によれば、薩州家第5代実久の弟の島津常陸介忠兼が野田を領したとある。忠兼は東郷渋谷氏との領地紛争や長島の攻略などで武功を挙げ、領民に慕われた人物であったが、謀反の疑いにより第6代義虎に殺害された。後に義虎も忠兼の無実を悟り、山内寺住職豪契法師に祈祷をさせ、「若宮八幡」と称して祀った。その後、寛永13年(1636年)に藩主光久の命により、出水地頭山田有榮(昌巖)が奉行となり、亀井山城の南側に神社を建立し「若宮大明神」の称号を勧請した。(この時の棟札が野田歴史民俗資料館に残されている。)若宮神社がある丘陵には、深い堀と土塁が巡らされ、忠兼の館があったと伝えられ、地元では亀井山城に対し「新城」と呼ばれている。



第2図 龜井山城 縄張り図 (平成15年) 三木彌氏作成



第3図 亀井山城跡地形測量 現況平面図(縮尺=1:1000)

第1表 周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	地 形	時 代	遺 構	遺 物	調 査 年 次
1	亀井山城跡	野田町上名本城	丘陵地	保元平治期	堀、空堀、土塁、ピット		平成19~22年度発掘調査
2	新城跡(野田)	野田町上名新城	丘陵地	中世	帯郭、空堀、土塁		平成15年度確認調査
3	城内貝塚	野田町上名城内	山麓緩斜面	縄文、中世	貝層(一枚目)		平成19年度市内分布調査
4	湯之谷	野田町上名湯之谷	丘陵地	縄文、古墳	ヤト、古墳時代土器		平成20年度市内分布調査
5	受口A	野田町上名受口	丘陵地	縄文	ヤト		平成20年度市内分布調査
6	受口B	野田町上名受口	丘陵地	古墳、近世	古墳時代土器、近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
7	受口壇	野田町上名受口壇	丘陵地	縄文、近世	磨石、磨石、土製紡錘、近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
8	茅迫	野田町上名茅迫	丘陵地	縄文	ヤト		平成20年度市内分布調査
9	桜ヶ城跡	野田町下名桜ヶ城	丘陵地	中世	土塁、空堀		平成23年度確認調査
10	松ヶ池跡	野田町上名松ヶ池	丘陵地	中世~近世	青磁、近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
11	大角倉倉	野田町上名大角倉倉	丘陵地	近世	近世陶磁器、染付		平成20年度市内分布調査
12	松ヶ池A	野田町上名松ヶ池	丘陵地	縄文、近世	ヤト、近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
13	袋之城跡	野田町下名袋之城	丘陵地	中世	土塁、空堀		
14	上名遺跡群	野田町上名	低地	中世	土師器		平成13年分布調査
15	春	野田町下名下田多園	台地	古墳~中世	成川式、土師器、染付		
16	野田島	野田町下名田多園	台地	縄文~中世	惣穴建物、ピット、晩期土器、土師器、瓦質土器		平成15年確認、同17年全面調査
17	辻	野田町下名辻	台地	古代~中世			平成12年度農政分布
18	感成寺跡	野田町下名八幡	台地	中世(鎌倉)	建立	中世寺院	
19	三斗跡	野田町下名三斗跡	台地	中世~近世			平成14年度試験調査
20	野田西牟田	野田町下名西牟田	台地	縄文、古墳~古代			平成14年度試験調査
21	大園	野田町下名大園	台地	中世	土師器		平成14年度試験調査
22	大島	野田町下名瀬戸大島	台地	縄文、中世	溝状遺構、柱穴、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器		平成13年確認、同16年全面調査
23	山西寺跡	野田町下名中部	台地	鎌久7年	建立	中世寺院	
24	木ノ上城跡	野田町下名中部	丘陵地	中世	山城	中世山城	
25	中郡	野田町下名中部	台地	弥生(後)	弥生土器		
26	崩上城跡	野田町下名中部	丘陵地	中世	山城	中世山城	
27	木牟礼城屋形跡	野田町下名屋形ほか	丘陵地	中世	水の手、土塁、折れひすみ		平成22~23年度確認全面調査
28	下名遺跡群	野田町下名	低地	縄文~中世	押型文、石鏝、土師器		
29	東笠掛	野田町下名屋地	台地	古墳~中世	成川式、土師器、須恵器		
30	六枝	野田町下名六枝	丘陵地	中世~近世	青磁、染付、陶器		平成20年度市内分布調査
31	北山田	野田町下名	台地	古墳	水田跡、青磁、染付、陶器、土師器		平成21~22年度南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査
32	中林	野田町下名中林	丘陵地	中世	中世磁器		平成20年度市内分布調査
33	田神丸	野田町下名田神丸	丘陵地	縄文	ヤト、打製石斧、局部磨製石斧		平成20年度市内分布調査
34	野田川骨	野田町下名原田・川骨	台地	古墳、中世	土師器、中世染付、龍首埴輪鉢		平成21年度市内分布調査
35	六田多	野田町下名原田・六田多	丘陵地	古墳、中世	成川式土器、青磁、須恵器		平成21年度市内分布調査
36	川骨	高尾野町下名	台地	縄文、古墳	土器、成川式		平成7年分布調査
37	木牟礼城跡	高尾野町下名西尾崎	台地	中世	中世山城		
38	田瀬	庄上	扇状地縁辺	縄文、古墳	貝殻、土器、須恵器		
39	堀ノ内	庄上	扇状地	平安~中世	青磁、土師器		H13年度市内分布調査
40	下高尾野	高尾野町下高尾野	台地	弥生(後)	弥生土器		
41	外島	庄上	台地	縄文、古代、中世~近世	土坑、石状遺構、掘立柱建物、溝状遺構、土壇墓、縄文後・晩期土器、石器、土師器、須恵器、白磁、青磁、洗武通宝、寛永通宝、人骨など		平成22年度南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査
42	松ヶ角	高尾野町下名松ヶ角	台地	古代	土師器		平成18年度農政分布調査
43	宮田	庄上	扇状地縁辺	平安~中世	土師器、陶磁器		H13年度市内分布調査
44	小村	庄上	扇状地	平安~中世	土師器、陶磁器		H13年度市内分布調査
45	松ヶ野	高尾野町下高尾野	台地	縄文(早・晩)、古墳、中世	貝殻筒形土器、土師器、青磁、石鏝、打製石斧		平成7年分布調査
46	出し道	高尾野町下高尾野	台地	縄文、中世	黒曜石、土器、土師器		平成7年分布調査
47	諏訪下	高尾野町下高尾野	台地	縄文(早・晩)、中世	貝殻筒形土器、土師器		平成7年分布調査
48	諏訪上	高尾野町下高尾野	台地	縄文~弥生	縄文時代土器		
49	放光寺	高尾野町下高尾野放光寺	扇状地	縄文~古墳、中世	A地点(石室(鎌倉)、礎石(鎌倉)、土師器、須恵器、陶磁器、磨製石斧、磨石、弥生中期土器、成川式瓦(中世以降)、瓦釘(中世以降))、青磁、近世陶磁器 B地点(石室2、土壇、土壇墓、礎石、縄文土器、弥生土器、磨製打製石斧、石鏝、十字形石鏝、磨製石鏝、磨石、滑石石鏝、河原石、角礫、人骨、磨骨片、火葬骨盆、五輪塔残欠、中期土器、瓦筒式)		昭和49年確認調査
50	船道	高尾野町下高尾野船道	台地	縄文~弥生			
51	新堀跡(高尾野)	高尾野町下高尾野新堀	河岸段丘	中世	土塁、空堀、土塁		平成9年調査
52	柴引遺跡群a	高尾野町下高尾野・柴引	台地	縄文~弥生	集石遺構、弥生時代住居跡、古墳時代住居跡・土坑、押型文、黒髪式、折貫式、須恵器、土師器、瓦質土器		平成15~16年度確認全面調査
53	上石坂	高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世	近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
54	芥田	高尾野町下高尾野芥田	台地	古代、近世	土師器、近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
55	本道	高尾野町下高尾野本道	台地	縄文、古墳、近世	縄文晩期土器、古墳時代土器、近世陶磁器		平成20年度市内分布調査
56	水天原	高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳、近世	古墳時代土器、近世陶磁器、寛永通宝		平成20年度市内分布調査
57	木城跡	高尾野町下高尾野木城	台地	古墳	土壇、土壇墓、土坑		平成20年度市内分布調査
58	高尾野徳富跡	高尾野町下高尾野徳富ノ下	山麓緩斜面	近世	大型陶器、摺鉢、窯道具		平成20年度市内分布調査

第3章 調査の概要

第1節 調査トレンチの設定 [第2図～第4図]

亀井山城跡の発掘調査対象として、本城跡としている曲輪1を本丸の機能を持った曲輪として位置づけた上で発掘調査を計画した。また、この本城跡に接し、縄張り図で曲輪2と位置づけている、俗称「蔵之城跡」とよばれている曲輪も、その俗称の由来や本城跡との位置的関係から関連が深く、本城跡の性格・特徴を裏付けるような成果が期待されたため、発掘調査の対象とした。

本城跡の発掘調査は、初年度のみ曲輪1内を東西北方向に4区画に区切り、南東角部から南西方向にⅠ・Ⅱ区、Ⅰ区の北側をⅢ区、その南西側をⅣ区と分け、トレンチをそれぞれに設定した。なお、以前に本城跡内で多量の風倒木が処理されそのまま放置されていた箇所が残っており、この箇所についてはその後もトレンチ設定は避けた。

本城跡ではその後の調査の状況から、曲輪1内での地点による機能がだまかに分かれることが推定された。このことから4区画での調査区設定を取り止め、曲輪1内を「中央部」、「西側」、「東側」、「土塁下基壇部及び虎口」と再設定し、本報告書内でも調査成果をこの4地点ごとの成果として報告することとした。

トレンチの設定理由として、「中央部」では、石塁遺構で囲まれた基壇状地形は曲輪1が本丸としての機能を持っていたことを裏付けられる遺構と考えたため、1～4、7、11、19、20、22のトレンチを設定した。このうち、1～3、7、22トレンチは表土下位層の確認トレンチとし、表土層のみの掘り下げとした。「西側」では9、15、16トレンチを設定した。15、16トレンチでは工房的な性格の遺構遺物が出土し、その広がり確認を目的とした。「東側」では8、12～14、17、18トレンチを設定した。柱穴跡群の広がり地形形成層確認を目的とした。「土塁下基壇部及び虎口」では6、10、21、S1T～S4Tのトレンチを設定した。基壇状地形の性格と虎口の付属施設遺構の有無確認を目的とした。5トレンチは地層確認曲輪1全体の地層確認トレンチである。

蔵之城跡の発掘調査は、ほぼ全面に植林の個人所有地である、その空いたスペースにトレンチを設定することとなった。設定した1～4、6～7、9トレンチは遺構遺物の有無確認を目的とした。5、8トレンチは2トレンチで検出された溝状遺構の延長を確認するために設定したが、どちらのトレンチからも延長部は検出されなかった。

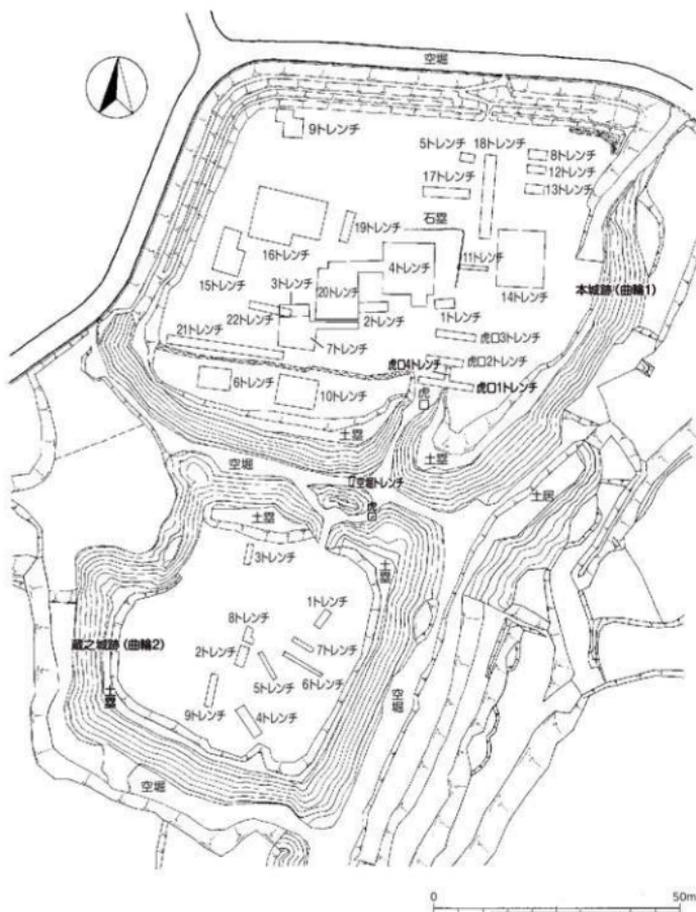
このほか、本城跡と蔵之城跡とを隔てる空堀部の任意の地点に空堀トレンチを設定し、空堀の形成過程並びに形態確認と土層堆積状況確認を行った。

第2節 土層及び空堀トレンチ [第5図～第6図]

本城跡、蔵之城跡ともに表土下位を発掘調査したトレンチで、空堀トレンチ以外のほぼすべては、第5図及び第6図に示した土層堆積状況である。

0層は表土で黄灰色の腐植土又は旧耕作土である。

1層は地盤層に由来する岩盤礫の小破片や小片の炭化物がまばらに散在する灰オリーブ色の造成土である。中世の遺物が多く出土するものの、小破片やローリング作用を受けているものが目立

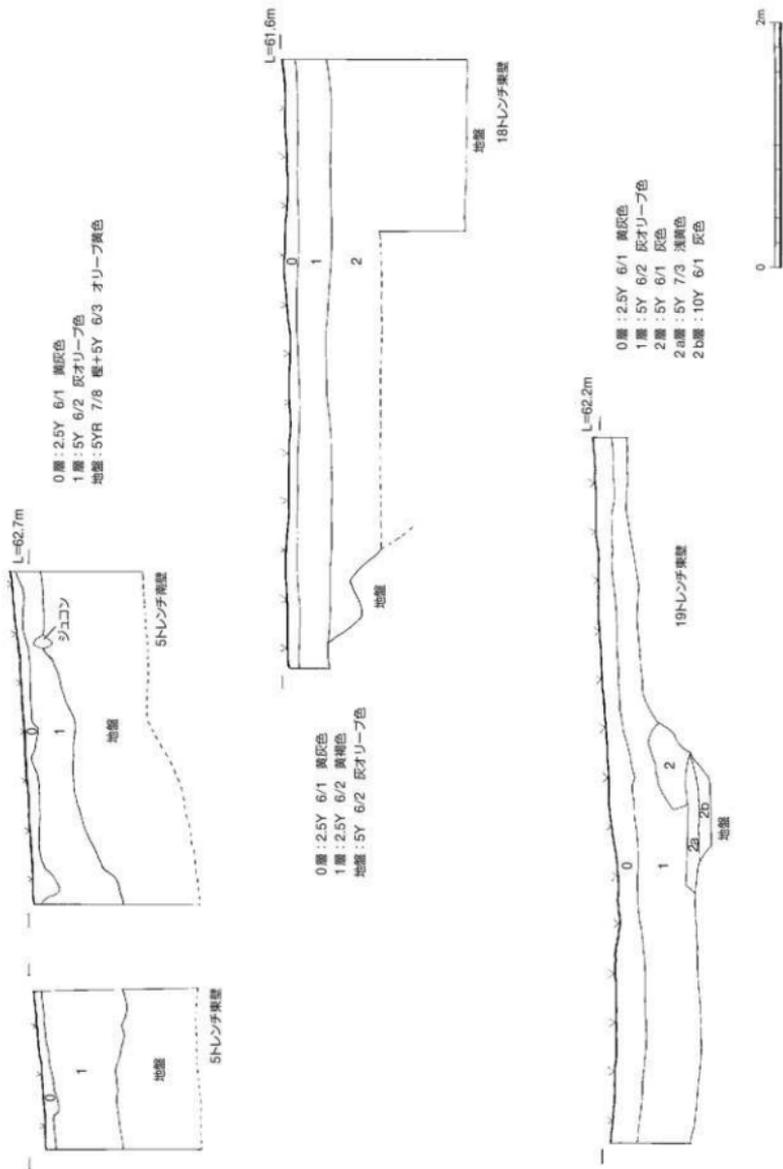


第4図 亀井山城跡 発掘調査 トレンチ配置図

つ。また、近世以降の遺物も多くはないが出土している。

本城跡の9、10、16、18トレンチ並びに蔵之城跡8トレンチでは、1層下位に同様の造成土と思われる土層が見られた。1層よりはやや色調が濃く地盤由来と思われる礫片も1層よりは大きく、密度も濃く散在することが看取できた。この層でも近世の遺物が僅かではあるが出土している。

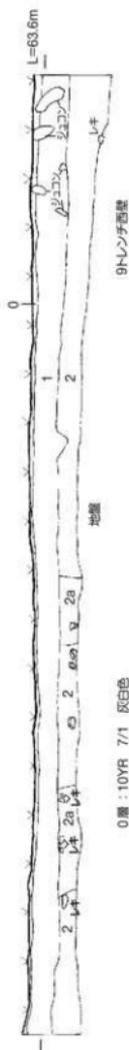
この造成土の下位は岩盤風化土層で地盤層である。両城跡とも遺構はこの上面で検出される。



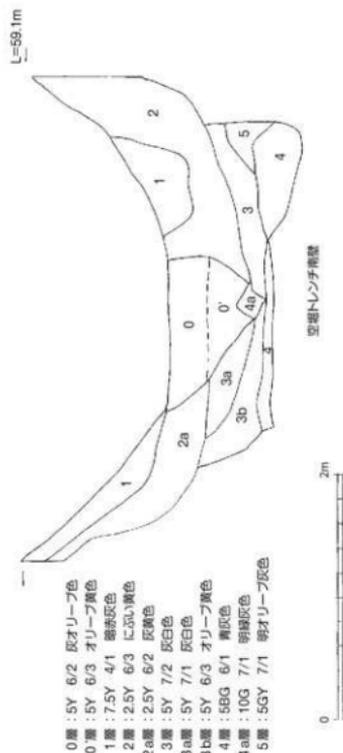
第5図 本城跡 5・18・19トレンチ土層断面図



- 0層 : 10YR 7/1 灰白色
- 1層 : 2.5Y 6/1 黄灰色
- 2層 : 5Y 5/2 灰オリーブ色



- 0層 : 10YR 7/1 灰白色
- 1層 : 2.5Y 6/2 灰黄色
- 2層 : 2.5Y 4/1 黄灰色
- 2a層 : 10YR 5/2 灰黄褐色



- 0層 : 5Y 6/2 灰オリーブ色
- 0層 : 5Y 6/3 オリーブ黄色
- 1層 : 7.5Y 4/1 黄灰色
- 2層 : 2.5Y 6/3 濃い黄灰色
- 2a層 : 2.5Y 6/2 灰黄色
- 3層 : 5Y 7/2 灰白色
- 3a層 : 5Y 7/1 灰白色
- 3b層 : 5Y 6/3 オリーブ黄色
- 4層 : 5B3 6/1 黄灰色
- 4a層 : 10G 7/1 黄褐色
- 5層 : 5GY 7/1 黄オリーブ灰色

第6図 戴之城跡 8・9トレンチ、空堀土層断面図

空堀トレンチでは、両曲輪側の掘削可能な空堀斜面上部から堆積した土砂を除去し、堀底部が通路として使用された際の硬化面や造成土等の有無に注意を払いながら地盤層まで掘り下げた。

結果、この地点の空堀の形状は箱堀で、なお、本城側に溝を付帯していることが分かった。硬い地盤を掘り込んで作られており、底部幅が約2.6m、うち、溝部幅が約1mを測る。堀底部と両曲輪平坦面との比高差は約8mを測る。

通路を示すような硬化面は確認できないものの、溝を付帯していることから、堀底部にはやはり往來の機能を少なからず持っていたことが予想される。なお、溝部と堀底地盤上面にはグライ化した砂質土が堆積していた。溝部に堆積した土壌がオーバーフローし、堀底部に流出したものと見られる。溝部の断面は本城側を深く掘り込む逆三角形を呈している。

第3節 本城跡の調査 [第7図]

本城跡では合計26トレンチを設定した。遺構の検出状況は第7図の通りである。なお、発掘調査では検出された遺構は原則現地保存とするため、掘り下げについては必要最低限度で行った。これに伴い遺構検出状況等の図化作業に係る測量も必要以上は行わなかったが、これを補完するため写真撮影による記録作業を適宜実施した。

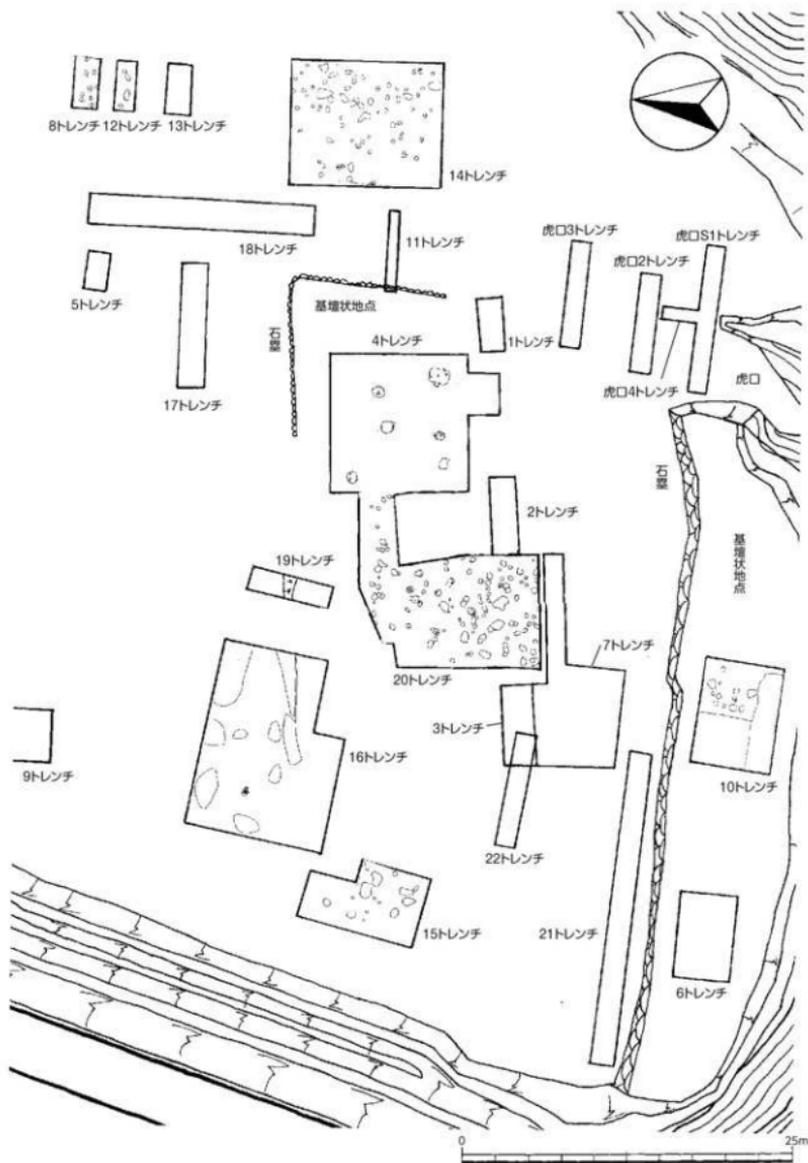
(1) 中央部 [1～4、7、11、19、20、22トレンチ]

遺構 [第7図～第11図、第2表～第4表]

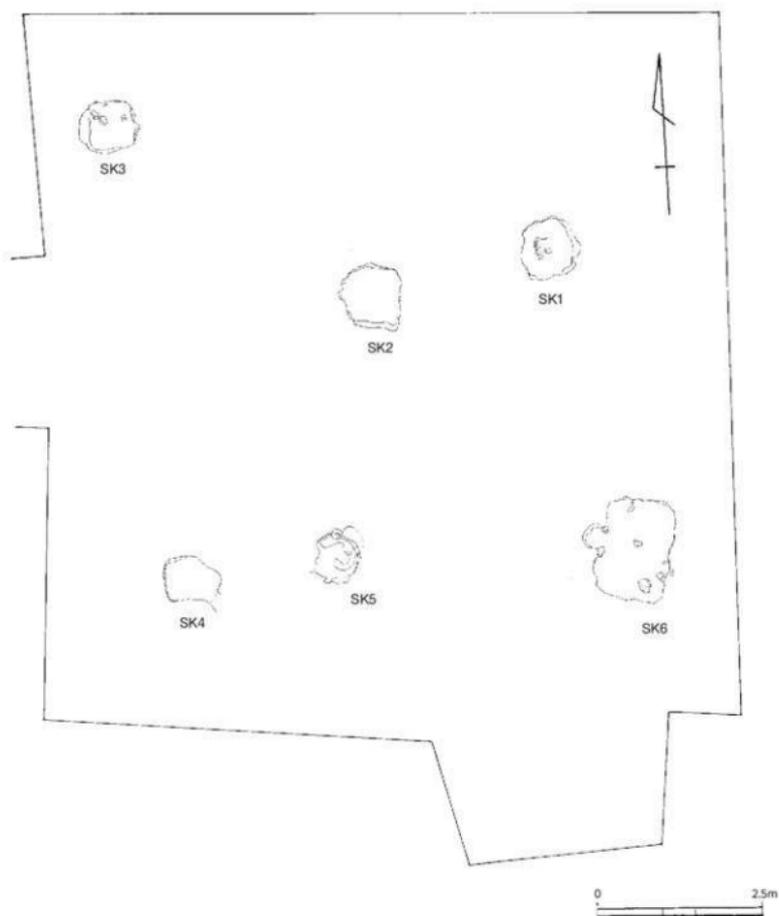
4トレンチから大型土坑が6基(SK1～SK6)検出された。石塁遺構で囲まれた基壇状地形の内側である。石塁基壇状地形は東側で数十cmほどの高さであるが、西側に行くほど高さは消失し、石塁遺構も消失する。大型土坑の検出面は地盤上面で、5～15cmほど段掘り掘り下げで遺構と確認した。6基の配列に規則性は見られない。形状は隅丸方形が中心で、径は70～150cmである。礫を伴うものが4基である。SK4では半円状に炭化物の散布が見られた。SK6からは陶器片が1点出土した。いずれも埋土は1層の造成土である。

20トレンチから柱穴跡群が合計113基検出された。石塁基壇状地形が高さを消失させた西地点にあたり、この地形変化との関連は不明であるが、ほぼ本城跡の中心部に位置している。遺構の検出面は地盤上面で、検出平面形状と規模から柱穴跡とした。これらのうち、配列に規則性が見られたものをSBIP1～SBIP8とし、掘立柱建物(の一部)を想定した。SBP9とSBP10はこの配列には並ばないが規模と位置から掘立柱建物を構成していたものと考えられる。P85、P93、P98も建物を構成する配列とそれぞれ同規模の柱穴跡とも考えられる。このほか、P35、P36、P94は柱抜き取りのピットとも考えられる。SBIP1のみ半掘し底面と断面の形状確認を行った。底面は平坦で断面は逆台形を呈していた。すべての遺構の埋土は1層であり、ほぼ半数近くに栗石と見られる礫が出土した。

これらの外のトレンチからは特筆すべき遺構は検出されていない。



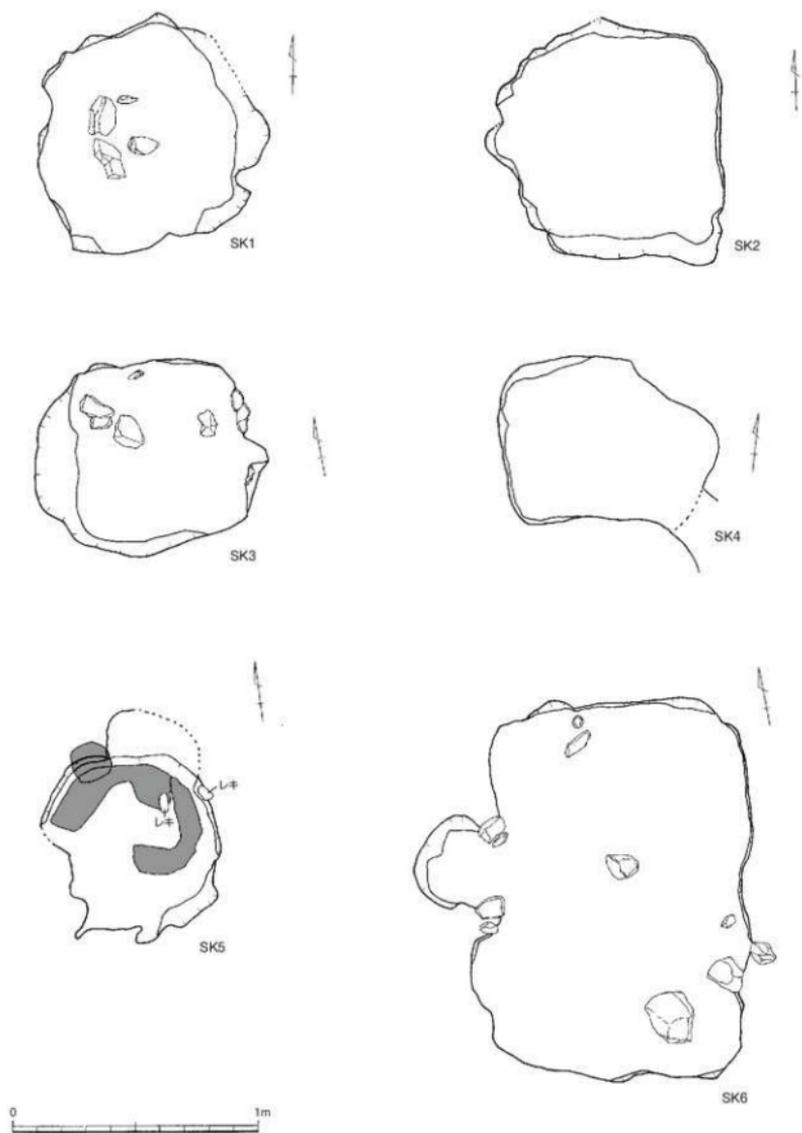
第7図 本城跡 遺構検出図



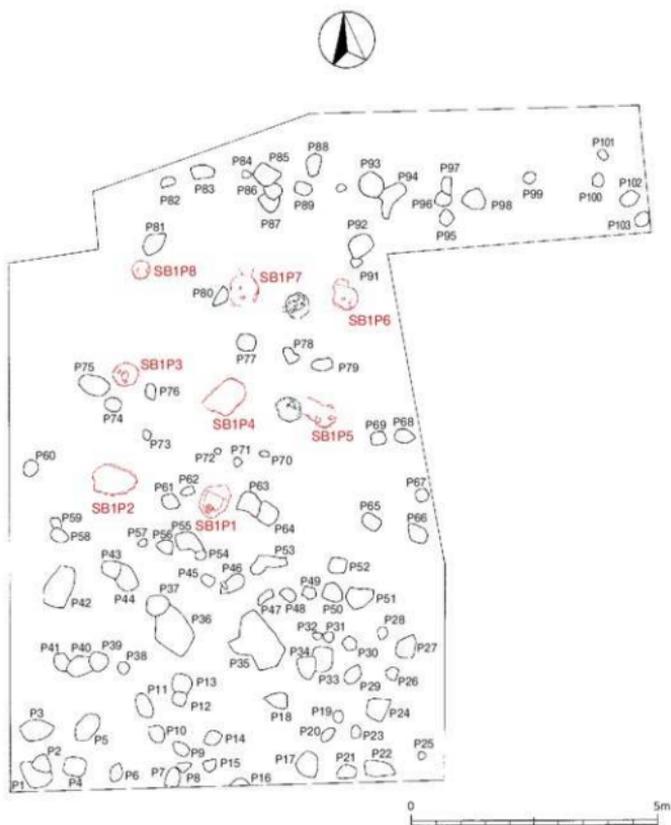
第8図 本城跡4トレンチ 遺構検出図

第2表 本城跡4トレンチ遺構計測表

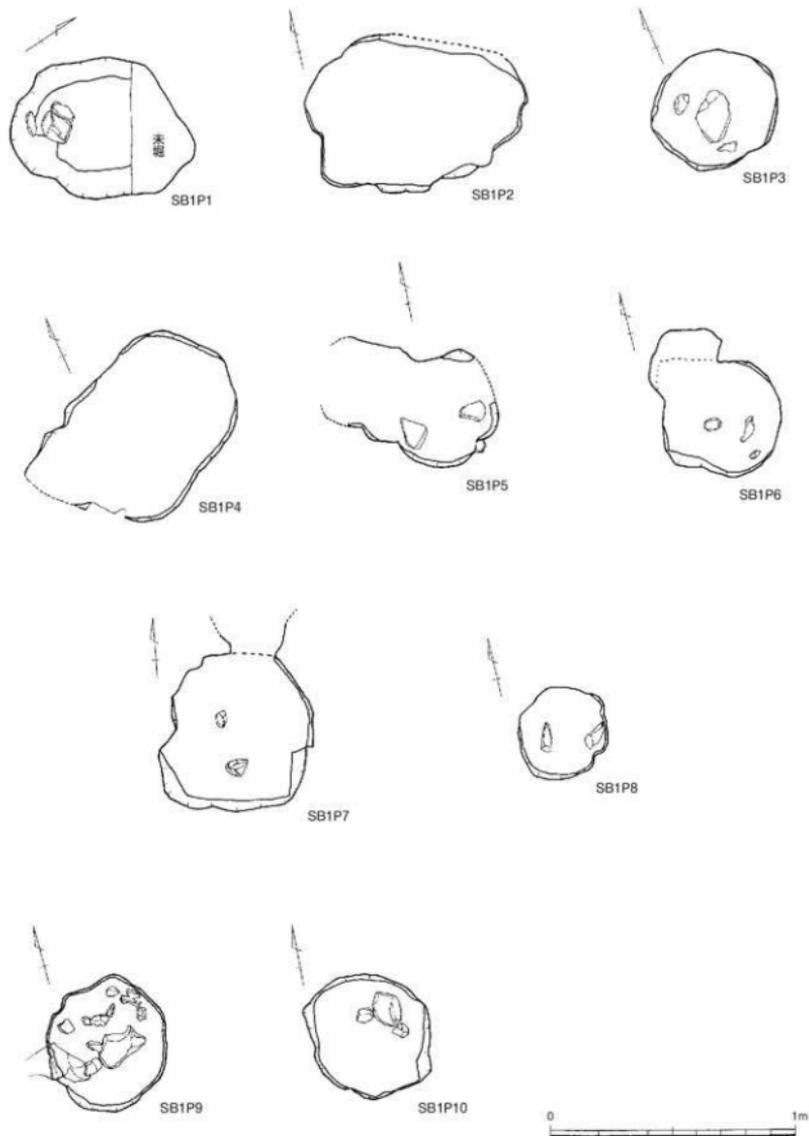
陣図	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
9	4T	SK1	98	96	(5~15)	円形	-	-	段掘り、礫5
	4T	SK2	100	95	(5~15)	隅丸方形	-	-	段掘り
	4T	SK3	95	80	(5~15)	隅丸方形	-	-	段掘り、礫7
	4T	SK4	88	70	(5~15)	隅丸方形	-	-	段掘り
	4T	SK5	90	70	(5~15)	円形	-	-	段掘り、礫1、炭化物
	4T	SK6	150	100	(5~15)	隅丸長方形	-	-	段掘り、礫11



第9図 本城跡 4トレンチ大型土坑



第10図 本城跡 20トレンチ 遺構検出図



第11図 本城跡 20トレンチ 掘立柱建物ピット

第3表 本城跡20レンテ遺構計測表(1)

挿図	調査区	遺構	計測値(単位:cm)		検出面	形状		遺物・備考
			長さ	短径・深さ		底面	断面	
	20T	P1	72	34 (5~10)	隅丸三角形	-	-	段掘り、P2に切られる
	20T	P2	40	36 (5~10)	隅丸三角形	-	-	段掘り、栗石有、P1を切る
	20T	P3	70	46 (5~10)	楕円形	-	-	段掘り
	20T	P4	49	46 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り
	20T	P5	74	38 (5~10)	楕円形	-	-	段掘り
	20T	P6	39	25 (5~10)	楕円形	-	-	段掘り、栗石有
	20T	P7	43	38 (5~10)	隅丸三角形	-	-	段掘り
	20T	P8	28	20 (5~10)	隅丸三角形	-	-	段掘り
	20T	P9	36	28 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P10	40	32 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有
	20T	P11	52	30 (5~10)	長円形	-	-	段掘り
	20T	P12	30	30 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有、P13を切る
	20T	P13	46	40 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有、P12に切られる
	20T	P14	40	30 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有
	20T	P15	29	21 (5~10)	台形	-	-	段掘り
	20T	P16	(25)	(6) (5~10)	(円形)	-	-	段掘り
	20T	P17	54	44 (5~10)	円形	-	-	段掘り
	20T	P18	47	34 (5~10)	台形	-	-	段掘り
	20T	P19	25	22 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P20	34	20 (5~10)	小楕円形	-	-	段掘り
	20T	P21	42	32 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り
	20T	P22	64	30 (5~10)	略台形	-	-	段掘り
	20T	P23	25	20 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P24	56	50 (5~10)	台形	-	-	段掘り
	20T	P25	16	16 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P26	26	24 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P27	52	40 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P28	28	22 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P29	42	28 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P30	30	28 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P31	22	22 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P32	19	14 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P33	53	50 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り、P34に切られる
	20T	P34	44	40 (5~10)	隅丸三角形	-	-	段掘り、栗石有、P33を切る
	20T	P35	122	64 (5~10)	不定形	-	-	段掘り、土坑? 柱抜取穴あり?
	20T	P36	106	70 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り、土坑? 柱抜取穴あり? P37に切られる
	20T	P37	50	42 (5~10)	円形	-	-	段掘り、P36を切る
	20T	P38	26	23 (5~10)	円形	-	-	段掘り
	20T	P39	40	34 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有、P40を切る
	20T	P40	50	40 (5~10)	長円形	-	-	段掘り、栗石有、P41を切り、P39に切られる
	20T	P41	36	28 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有、P40に切られる
	20T	P42	90	52 (5~10)	長方形	-	-	段掘り、栗石有、土坑?
	20T	P43	42	37 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り、栗石有、P44を切る
	20T	P44	67	38 (5~10)	長円形?	-	-	段掘り、P43に切られる
	20T	P45	29	22 (5~10)	円形	-	-	段掘り、栗石有
	20T	P46	54	30 (5~10)	楕円形	-	-	段掘り、礫1
	20T	P47	42	14 (5~10)	台形	-	-	段掘り
	20T	P48	34	22 (5~10)	半円形	-	-	段掘り
	20T	P49	29	25 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P50	47	38 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P51	58	42 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P52	42	36 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り
	20T	P53	73	28 (5~10)	不定形	-	-	段掘り、栗石有、土坑?
	20T	P54	24	18 (5~10)	小円形	-	-	段掘り、栗石有、P55を切る
	20T	P55	63	44 (5~10)	不定形	-	-	段掘り、栗石有、P54に切られる
	20T	P56	35	28 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P57	18	13 (5~10)	小円形	-	-	段掘り
	20T	P58	36	28 (5~10)	楕円形	-	-	段掘り、栗石有、P59を切る
	20T	P59	29	18 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り、P58に切られる
	20T	P60	34	29 (5~10)	円形	-	-	段掘り
	20T	P61	40	31 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り
	20T	P62	28	16 (5~10)	台形	-	-	段掘り
	20T	P63	56	40 (5~10)	隅丸長方形	-	-	段掘り、P64に切られる
	20T	P64	50	40 (5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り、P63を切る
	20T	P65	40	28 (5~10)	隅丸長方形	-	-	段掘り、栗石有
	20T	P66	48	34 (5~10)	略五角形	-	-	段掘り、栗石有

10

第4表 本城跡20レン子遺構計測表(2)

挿園	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
10	20T	P67	26	26	(5~10)	凹形	-	-	段掘り
	20T	P68	44	28	(5~10)	紡錘形	-	-	段掘り
	20T	P69	32	26	(5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り
	20T	P70	21	11	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り
	20T	P71	18	16	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り
	20T	P72	14	11	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り
	20T	P73	20	18	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り
	20T	P74	32	28	(5~10)	凹形	-	-	段掘り
	20T	P75	66	37	(5~10)	長凹形	-	-	段掘り
	20T	P76	33	26	(5~10)	長凹形	-	-	段掘り
	20T	P77	42	34	(5~10)	凹形	-	-	段掘り, 栗石有
	20T	P78	40	22	(5~10)	不定形	-	-	段掘り
	20T	P79	42	24	(5~10)	長凹形	-	-	段掘り
	20T	P80	44	22	(5~10)	半凹形	-	-	段掘り, 栗石有
	20T	P81	54	32	(5~10)	略五角形	-	-	段掘り
	20T	P82	33	15	(5~10)	隅丸長方形	-	-	段掘り, 栗石有
	20T	P83	49	26	(5~10)	隅丸長方形	-	-	段掘り, 栗石有
	20T	P84	21	20	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り
	20T	P85	60	47	(5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り, P86を切る
	20T	P86	40	34	(5~10)	凹形	-	-	段掘り, P87を切り, P85に切られる
	20T	P87	44	24	(5~10)	隅丸三角形	-	-	段掘り, P86に切られる
	20T	P88	46	29	(5~10)	台形	-	-	段掘り, 栗石有
	20T	P89	38	26	(5~10)	隅丸長方形	-	-	段掘り
	20T	P90	20	16	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り
	20T	P91	24	19	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り, P92に切られる
	20T	P92	55	50	(5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り, 栗石有, P91を切る
	20T	P93	50	48	(5~10)	凹形	-	-	段掘り
	20T	P94	78	34	(5~10)	不定形	-	-	段掘り, 栗石有 P93の柱抜取穴?
	20T	P95	34	30	(5~10)	凹形	-	-	段掘り
	20T	P96	36	25	(5~10)	凹形	-	-	段掘り, 栗石有, P97に切られる
20T	P97	37	20	(5~10)	隅丸長方形	-	-	段掘り, P96を切る	
20T	P98	48	44	(5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り	
20T	P99	28	24	(5~10)	凹形	-	-	段掘り	
20T	P100	25	23	(5~10)	凹形	-	-	段掘り	
20T	P101	13	12	(5~10)	小凹形	-	-	段掘り, 栗石有	
20T	P102	38	27	(5~10)	隅丸方形	-	-	段掘り	
20T	P103	36	27	(5~10)	凹形	-	-	段掘り	
11	20T	SB1P1	73	57	36	楕凹形	平坦	逆台形	半崩, 埋土1層, 栗石3
	20T	SB1P2	90	60	(15)	楕凹形	-	-	段掘り, 埋土1層
	20T	SB1P3	50	49	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石3
	20T	SB1P4	80	56	(15)	隅丸長方形	-	-	段掘り, 礎
	20T	SB1P5	60	34	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石3
	20T	SB1P6	65	28	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石3, 抜取痕?
	20T	SB1P7	70	55	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石2
	20T	SB1P8	40	35	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石2
	20T	SB1P9	54	46	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石12
	20T	SB1P10	50	48	(15)	凹形	-	-	段掘り, 埋土1層, 栗石3

遺物 [第12図～第14図、第5表]

1、2は遺構からの出土遺物、3～30は表土から包含層までの一括出土遺物である。

1は陶器碗である。うす緑の釉が内部部と外面口縁部直下まで施釉される。

2は染付である。碁笥底で高台中央部は無釉である。

3は土師器小皿である。磨耗が激しい。内面ハケナデ、外面回転ナデ後ハケナデで調整。

4は須恵質陶器である。外面頸部にヘラ記号が施される。内外面とも回転ナデ後ナデ調整。5は須恵質陶器である。外面格子目タタキ、内面ヘラナデされる。

6、7は摺鉢である。7の内面はハケナデされ、これ以外は回転ナデ後ハケナデされる。

8～11は青磁である。8は無釉の碁笥底である。10は蓮弁文の末端が僅かに見られる。11は見込みに蛇の目剥ぎが見られ、高台内面は無釉である。

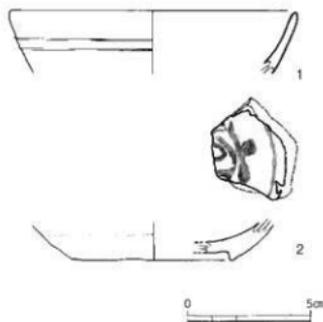
12、13は白磁である。12は碁笥底で外面途中まで施釉される。13は瓶類か、口縁部は先細り外反する。

14～17は染付である。15は猪口で壘付は輪状に剥ぎ取られる。16は壘付の釉は剥ぎ取られる。

17の壘付は輪状に剥ぎ取られる。高台内面まで施釉。

18～20は土鍾である。18の孔は円筒状できれいに通されている。

21～30は基石である。それぞれ大小・形状の差はあるが、全て全面研磨が見られる。25のみ長円形で色調も灰黒色で黒白区別しにくい、その外は色の区別も可能と考えられる。



第12図 本城跡 中央部遺構出土遺物

(2) 西側 [9、15、16 トレンチ]

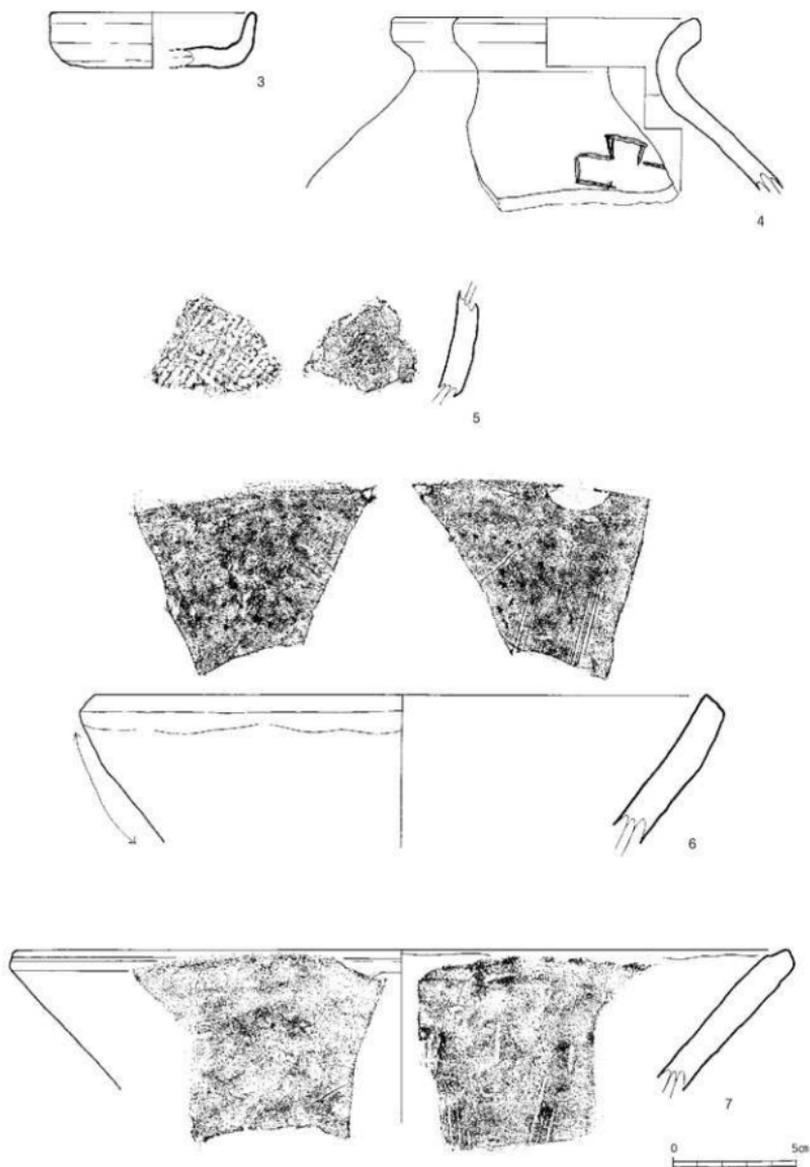
遺構 [第7図、第15図～第17図、第6表]

15 トレンチからは焼土遺構1箇所、炭化物集中地点2箇所、石組遺構3基、土坑3基、ビット9基が検出され、遺物では奈良火鉢が出土している。また、北側に隣接する16 トレンチでは、焼土遺構1箇所が検出、埴場と鉄滓が出土している。この両トレンチの辺りは火を使用する作業場・工房的な性格を持っていると思われる。しかしながら建物を構成するような規模の柱穴跡は両トレンチからは検出されていない。

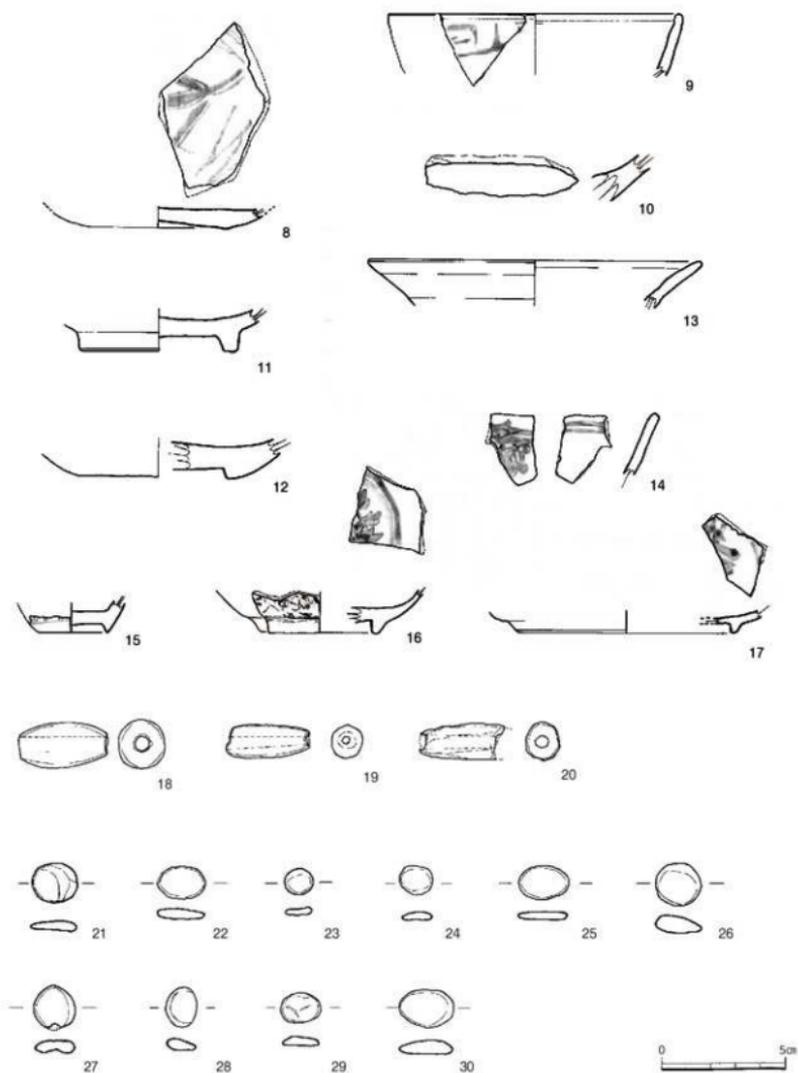
15 トレンチの焼土遺構及び炭化物集中地点周辺の検出面は非常に硬化しており、強い、あるいは長期にわたる力の作用が働いていたとみられる。石組遺構や土坑、小規模なビットなども検出したが、これ以上の遺構精査掘り下げは実施しなかったため、詳細は不明である。

16 トレンチからは土師器集積遺構1基、土器溜り2箇所、礫集中地6箇所、焼土遺構1基が検出された。このうち、土師器集積遺構以外は検出だけに止め、範囲及び位置を記録した。

土師器集積遺構はトレンチ西側中央部で検出された。1層下位で地盤面のやや上位である。出土



第13圖 本城跡中央部 表層～包含層 出土遺物①（須惠質陶器，瓦質器）



第14図 本城跡中央部 表層～包含層 出土遺物② (青・白磁, 染付, 土錘, 基石)

第5表 本城跡中央部出土遺物観察表

陣岡	レイアウト 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考
							口径	高さ	底径	
12	1	4T	SK6	一括	陶器	碗	5.8	(2.5)	-	きめ細かい脂土
	2	20T	ピット	一括	染付	皿	-	(1.5)	3.1	基筋底
	3	4T	地盤上	一括	土師器	小皿	4.2	2.2	3.3	白系肌色
13	4	4T	I	28	須恵質陶器	つぼ	6.0	(7.0)	-	ヘラ記号
	5	4T	表	一括	須恵質陶器	甕・壺類	-	(4.2)	-	樽巻城標、中世前期13c、胴部
	6	II	表	一括	瓦管器	すり鉢	13.1	(6.0)	-	備前焼系か、薄い灰色
	7	4T	地盤上	一括	瓦管器	すり鉢	16.3	5.7	-	灰系肌色
	8	21T	地盤上	一括	青磁	皿	-	(0.8)	2.7	同安楽窯、12c後半
	9	4T	表	一括	青磁	碗	6.0	(2.5)	-	龍泉窯系、書文、14c後期～15c前後
	10	20T	地盤上	一括	青磁	鉢か大碗	-	(2.0)	-	龍泉窯系、15c後期
11	4T	地盤上	一括	青磁	鉢	-	(2.2)	3.2	龍泉窯系、15c初期	
12	20T	地盤上	一括	白磁	鉢	-	(1.6)	3.0	中世後期、16c?	
13	20T	地盤上	一括	白磁	瓶類	6.7	(1.9)	-	仏花か?	
14	4T	表	一括	染付	碗・鉢類	-	(12.6)	-	昆虫跡し?花文?	
15	4T	表	一括	染付	楕口	-	(1.3)	1.3	-	
16	20T	地盤上	一括	染付	皿	-	(1.65)	2.4	外面唐草文、内面花文?	
17	4T	表	一括	染付	皿	-	(0.9)	4.3	-	
18	22T	地盤上	一括	土師	-	-	-	-	長3.6 径2.0	
19	3T	表	一括	土師	-	-	-	-	長3.4 径1.3	
20	3T	I	一括	土師	-	-	-	-	長(3.5) 径1.6	
21	4T	表	一括	赤石	黒灰	-	-	-	長1.9 短1.6 厚0.4	
22	II	表	一括	赤石	黒	-	-	-	長2.0 短1.4 厚0.5	
23	II	表	一括	赤石	黒灰	-	-	-	長1.2 短1.1 厚0.3	
24	4T	I	一括	赤石	黒灰	-	-	-	長1.4 短1.2 厚0.3	
25	II	表	一括	赤石	灰黒色	-	-	-	長2.1 短1.4 厚0.3、変形石?	
26	4T	表	一括	赤石	灰白	-	-	-	長1.9 短1.8 厚0.7、黄灰色	
27	4T	I	一括	赤石	灰白	-	-	-	長1.7 短1.6 厚0.4	
28	4T	表	一括	赤石	灰白	-	-	-	長1.7 短1.2 厚0.5	
29	II	表	一括	赤石	灰白	-	-	-	長1.6 短1.2 厚0.4	
30	II	表	一括	赤石	白	-	-	-	長2.2 短1.6 厚0.6、うすい灰色	

地点中心から半径約3mの範囲で中心に向かい、浅く5cmほど凹む地点である。土師器は径約70～80cmの範囲で集中して出土している。土師器集積をとり囲む図示した線は土質の違いである。線の内側は柔らかい質の土壌である。東側には被熱作用の見られる地盤由来の礫が2点検出された。土師器は皿・杯類のみである。完形品は見られず、出土状態も埋納や保管の状態を示すものではない。一括廃棄されたと見られる。土師器を取り上げる際に土器の間に炭化物が出土したため、これを探取し、年代測定を試みたところ、15世紀前期後半頃を示す結果(第4章自然科学分析に詳細を掲載)が得られた。炭化物は中位から小片まで量は多くないが散見されるくらいに出土した。土師器自体には熱作用を受けた痕は見られず、共存した被熱作用の見られる礫との関係も詳細は不明である。

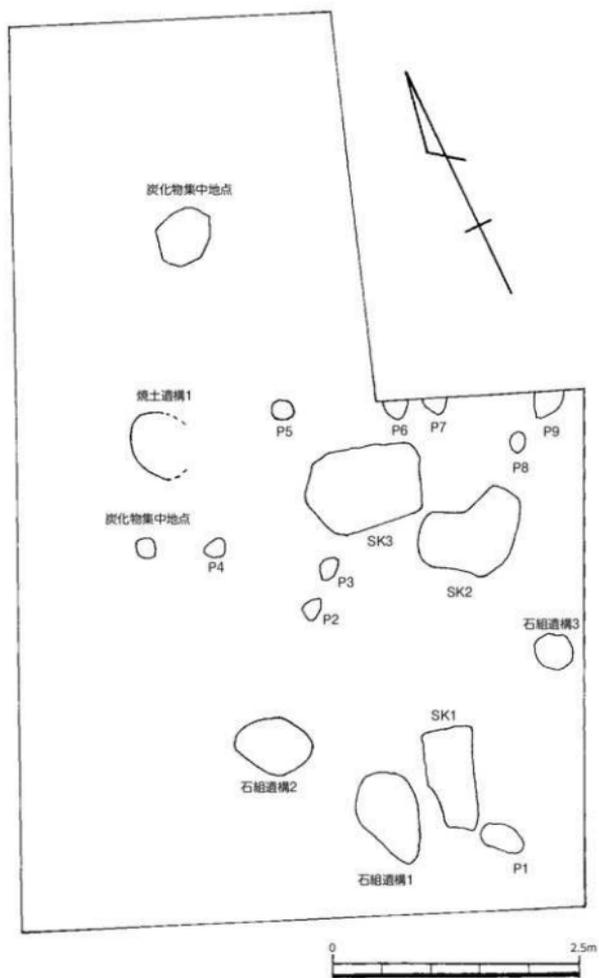
土器溜りとした箇所では土器が一括廃棄されたように密度濃く集中して出土した状態ではなく、同トレンチの他所よりは土器が割りと集中して出土した箇所であり、この箇所だけ下位層を掘り込んだりするなどの特異な点は見られない。土器溜りで出土した遺物は取り上げている。

礫集中地は地盤由来の礫が、これもこのトレンチ内の他所よりも割りと多く集中して出土した箇所である。配列や規則性は取敢えず、必要に応じて集められていたものが後に散逸したような印象を受ける。

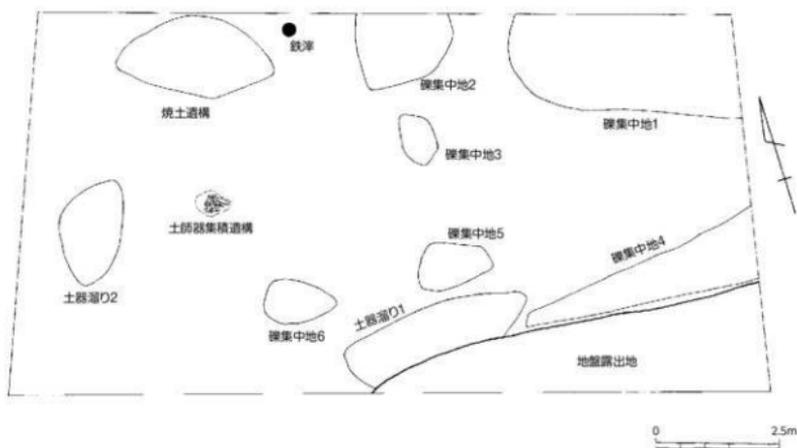
16トレンチでは、これらの遺構を検出した箇所とトレンチ南側の地盤が露出している箇所との段差が15～20cmほどあり、このような地盤を削り込む段差地形は19トレンチでも検出されている。16トレンチの地盤露出面は、19トレンチの段差地形に繋がり、その延長は中央部(4トレンチ)の西側へ向かう石畳遺構(途中で消失している)に続くかのように作られている。

遺物 [第18図～第30図、第7表～第9表]

31～98までは遺構からの出土遺物である。31～66までは土師器集積遺構出土で、31～48は土師器皿類である。31は内外面ハケナデ調整。32、33は外面回転ナデ、内面ハケナデ調整され、33の



第15図 本城跡 15トレンチ遺構検出概要図



第16図 本城跡 16トレンチ 遺構検出概要図

第6表 本城跡15トレンチ遺構計測表

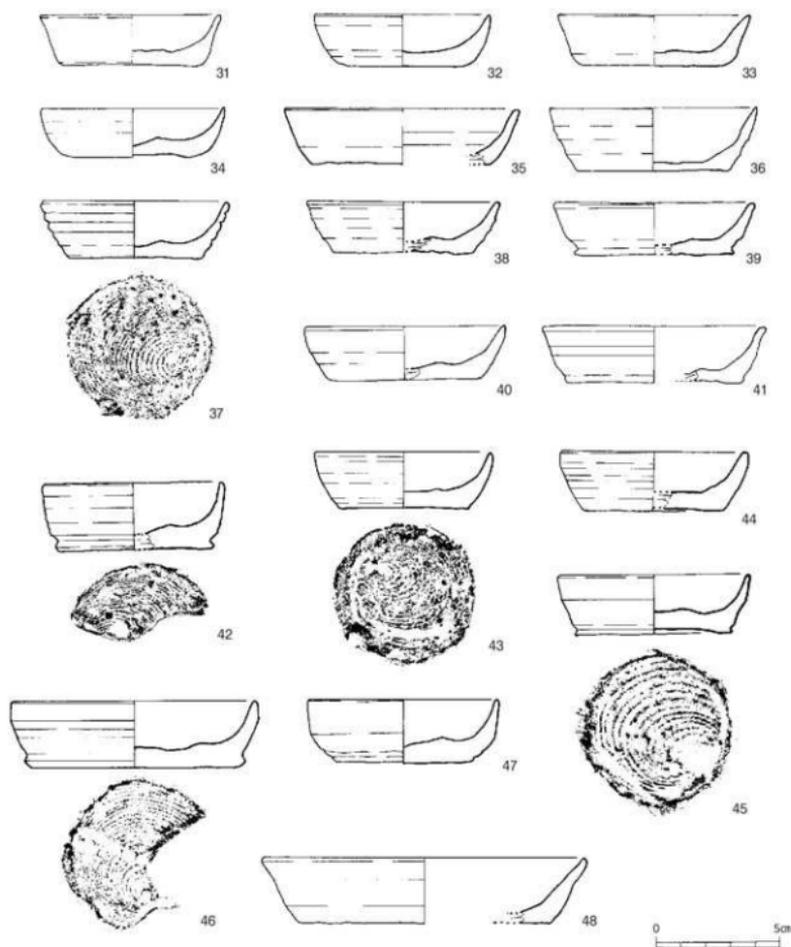
挿図	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
15	15T	P1	43	32	-	長円形	-	-	未掘
	15T	P2	24	19	-	小円形	-	-	未掘
	15T	P3	26	16	-	小円形	-	-	未掘
	15T	P4	24	17	-	小円形	-	-	未掘
	15T	P5	24	22	-	小円形	-	-	未掘
	15T	P6	(25)	(18)	-	小円形?	-	-	未掘
	15T	P7	(24)	(16)	-	小円形?	-	-	未掘
	15T	P8	22	15	-	小円形	-	-	未掘
	15T	P9	(30)	(26)	-	小円形?	-	-	未掘
	15T	SK1	110	89	-	台形	-	-	未掘
	15T	SK2	117	67	-	双角形	-	-	未掘
	15T	SK3	120	118	-	略五角形	-	-	未掘
	15T	炭化物	60	52	-	円形	-	-	未掘
	15T	炭化物	22	20	-	小円形	-	-	未掘
	15T	右組1	98	64	-	台形	-	-	未掘
	15T	右組2	78	66	-	長円形	-	-	未掘
	15T	右組3	40	36	-	円形	-	-	未掘
15T	焼土	(70)	(42)	-	(円形)	-	-	未掘	



第17図 本城跡 16トレンチ 土師器集積遺構

糸切痕はナデ消される。34、35、39 は外面回転ナデ、内面回転ナデ後ハケナデ調整。36、38、42～46 は外面回転ナデ、内面ハケナデ調整。37 は外面の回転ナデが顕著で、内面ハケナデ調整。40、41、47、48 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整。

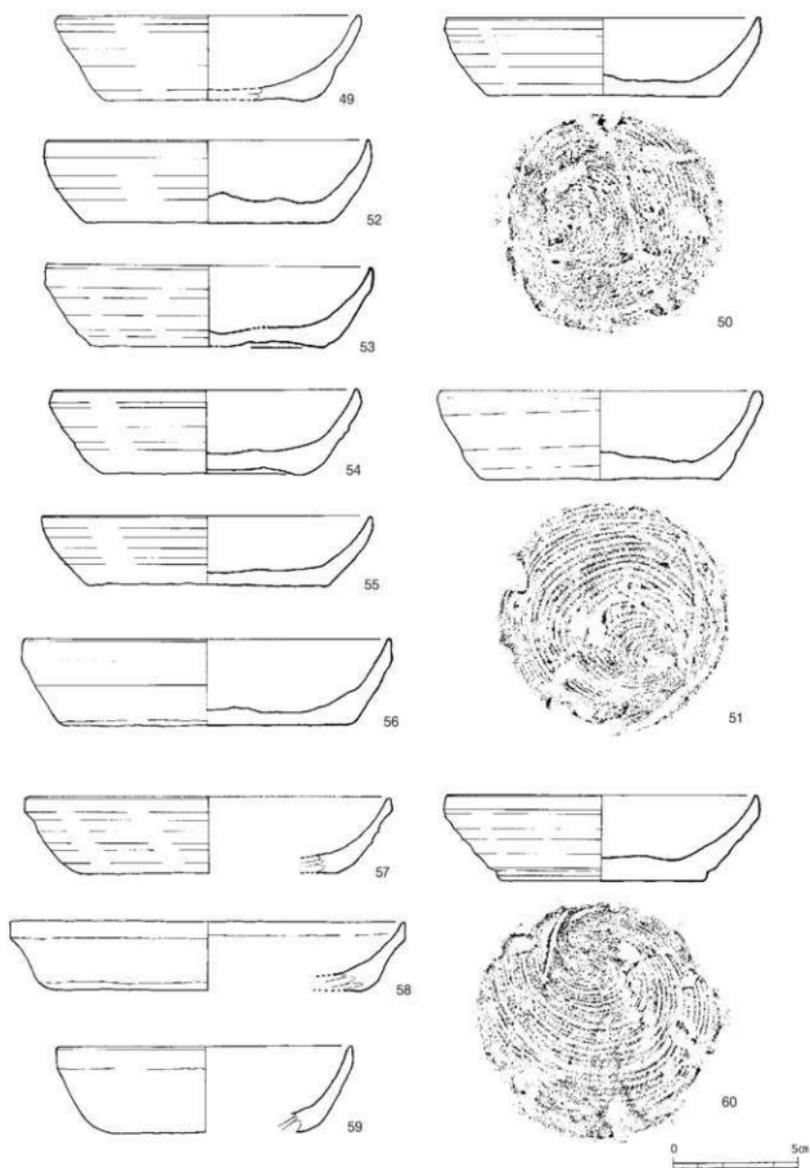
49～66 は土師器坏類である。49～51、53～56、58、60～63、66 は外面回転ナデ、内面ハケナデ調整。52 は外面回転ナデ、内面回転ナデとハケナデ調整。57 は外面回転ナデ、内面と底部外面はハケナデ調整されるため、切離法が不明である。59 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整。64、65 は外面回転ナデ、内面回転ナデとハケナデ調整。



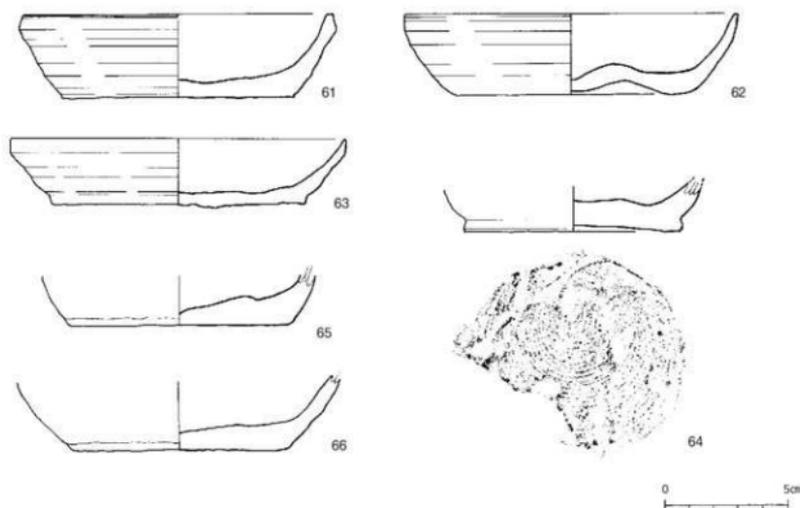
第18図 本城跡 16トレンチ 土師器集積遺構 出土遺物① (土師器皿)

67～98 は土器溜り、礫集中地及び遺構検出面の遺物である。

67～85 は土師器類である。67 は外・内面ともハケナデ調整。68、71、73、76、77、80 は外面回転ナデ、内面ハケナデ調整。69、84 は外面回転ナデ、内面と底部外面はハケナデ調整される。70、79 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面と底部外面はハケナデ調整される。72、83 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整される。74、85 は外・内面ともハケナデ調整で、底部立ち上がり部は回



第19図 本城跡 16トレンチ 土師器集積遺構 出土遺物② (土師器坏)



第20図 本城跡 16トレンチ 土師器集積遺構 出土遺物③ (土師器坏)

転ナデ調整。75は外面回転ナデ後ミガキ、内面ハケナデ後ミガキ、底部外面ハケナデ調整。78は外・内面とも回転ナデ後ハケナデ、底部外面もハケナデ調整。81は磨耗が激しく切離法や調整は不明。82は底部外面含み全面ともハケナデ調整。

86~90は鉢類である。86~88は摺鉢である。外面上位はハケナデ、ヘラ押さえ、底部立ち上がり部にはヘラケズリで調整。87・88は外面横位の回転ナデ、ハケナデ、内面横位にハケナデ調整され、87は両面とも研磨がみられる。

89、90は奈良火鉢である。どちらも頸部に花文が刻印され、胎土には砂粒が目立つ。

91、92は中国産陶器である。どちらも外面は茶緑色の施釉で、91の内面は灰色の自然釉、92の内面は無釉である。

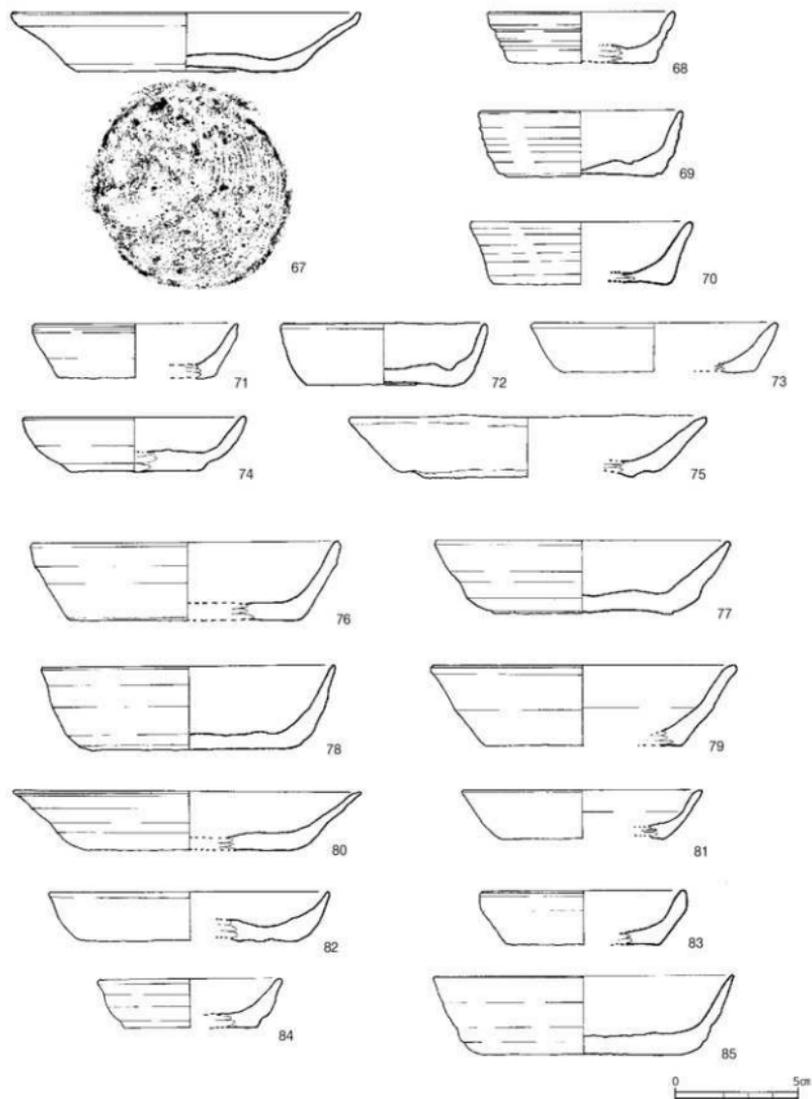
93~96は青白磁・青磁である。93は灰色の胎磁に薄い青色が入る透明に近い釉がわかる。94、95は口縁部が外反する。96は高台内面を輪状に釉を削り取る。

97は染付皿である。基筋底で施釉は外面胴部下位までで底面は無釉である。

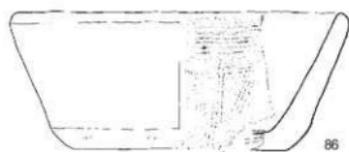
98は滑石製石鍋である。口縁部直下に断面三角形の鏝が見られる。

99~185は表土から包含層までの一括出土遺物である。

99~126は土師器皿類である。99、106、109、114、115、117、119、120は外内面ともハケナデ調整。100、101、108、110、121、122は外内面ともハケナデ調整され、底部外面もハケナデ調整。102、104、112、124、125は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整。103、105、107、111、116、118、123、126は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整され、底部外面までハケナデ調整。113は外面回転ナデ、内面と底部外面ハケナデ調整。



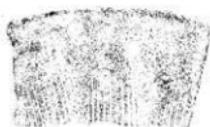
第21図 本城跡 16トレンチ遺構 出土遺物①(土師器皿・坏)



86



87



88



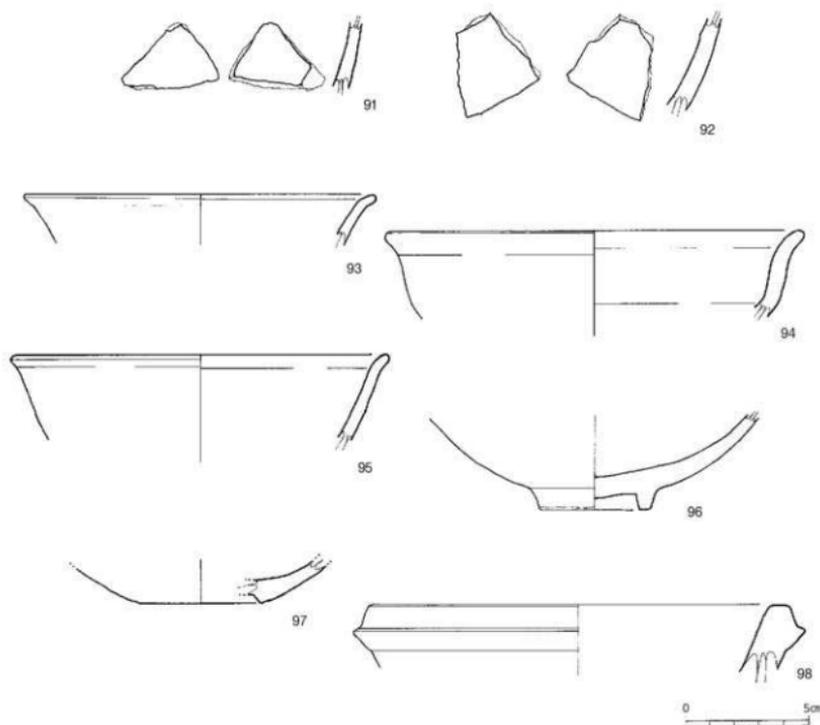
89



90



第22図 本城跡 西側遺構 出土遺物①(瓦質器)



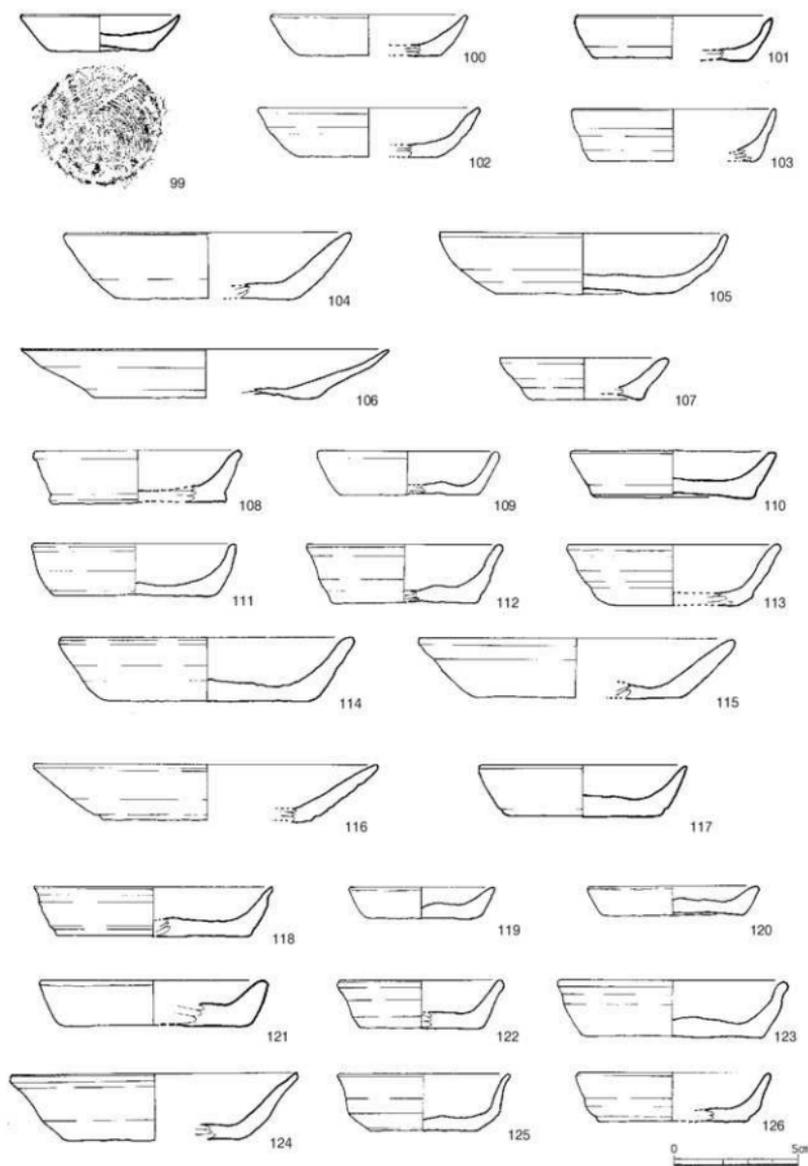
第23図 本城跡 西側遺構 出土遺物（陶器、青白・青磁、磁器、染付、滑石製品）

127～132 は土師器坏類である。127、128 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整。129 は外内面と底部外面もハケナデ調整。130 は外内面とも回転ナデ後ハケナデ調整。131、132 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整され、底部外面もハケナデ調整。

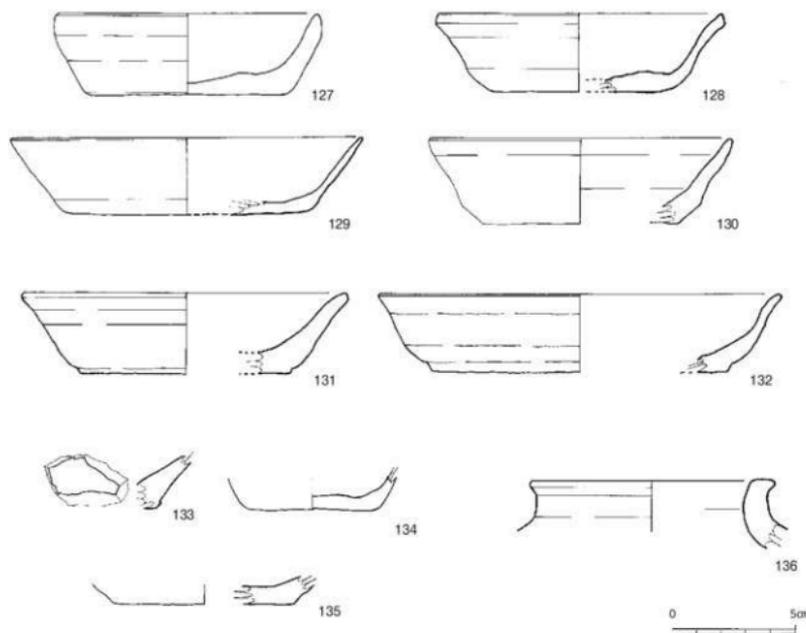
133～135 は鉄分が付着する土師器坏類で、いずれも被熱により硬化や変形が見られる。

136～144 は須恵質陶器である。136～142 は壺・甕類、143、144 は摺鉢である。136、138 は外内面とも回転ナデ調整。137 は外面回転ナデ、内面回転ナデとヘラナデ調整。139 は外面回転ナデ、内面回転ナデとヘラナデ調整。140 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面回転ナデ後一部ヘラナデ調整。141 は外面山形のタタキ、内面ヘラナデ調整で、断面にスが見られる。142 は外面山形のタタキ後ヘラ・ハケナデ、内面側面はヘラナデ、内面底面はヘラナデ後ナデ消し調整で、断面にスが見られる。143 は外面ハケナデ、内面指頭ナデ調整。144 は横位に外面ハケナデ、内面ヘラナデ調整。

145～171 は陶器である。145～156 は摺鉢である。145 は横位に外面回転ナデ、内面ハケナデ調整。146、148 は横位に外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整。147 は横位に外内面ハケナデ調整。



第24図 本城跡 西側表層～包含層 出土遺物① (土師器Ⅲ)



第25図 本城跡 西側 表層～包含層 出土遺物②(土師器杯, るつば, 須恵質陶器)

149は横位に外内面回転ナデ, 工具ナデ調整, 150は外面ハケナデ調整, 内面は磨耗激しく詳細不明。
 151は外面底部立ち上がり部に横位のケズリ, 上位側面ハケナデ, 内面ハケナデ調整。152は外内面横位にハケナデ調整。153は外面底部立ち上がり部に横位のケズリ, 上位側面ハケナデ調整。154は外面底部立ち上がり部に横位の回転ナデによる礫移動の溝が見られる。155・156は外面底部立ち上がり部に横位のケズリが見られる。

157～159は瓦質器の壺・鉢類である。159の胴部には鏝が作られる。

160～163は大型の甕類で, 同一固体か同種類のものと思われる。口唇部に細い溝が見られる。口縁部は外内面とも回転ナデ, 肩部下位はハケナデや指頭オサエの調整。

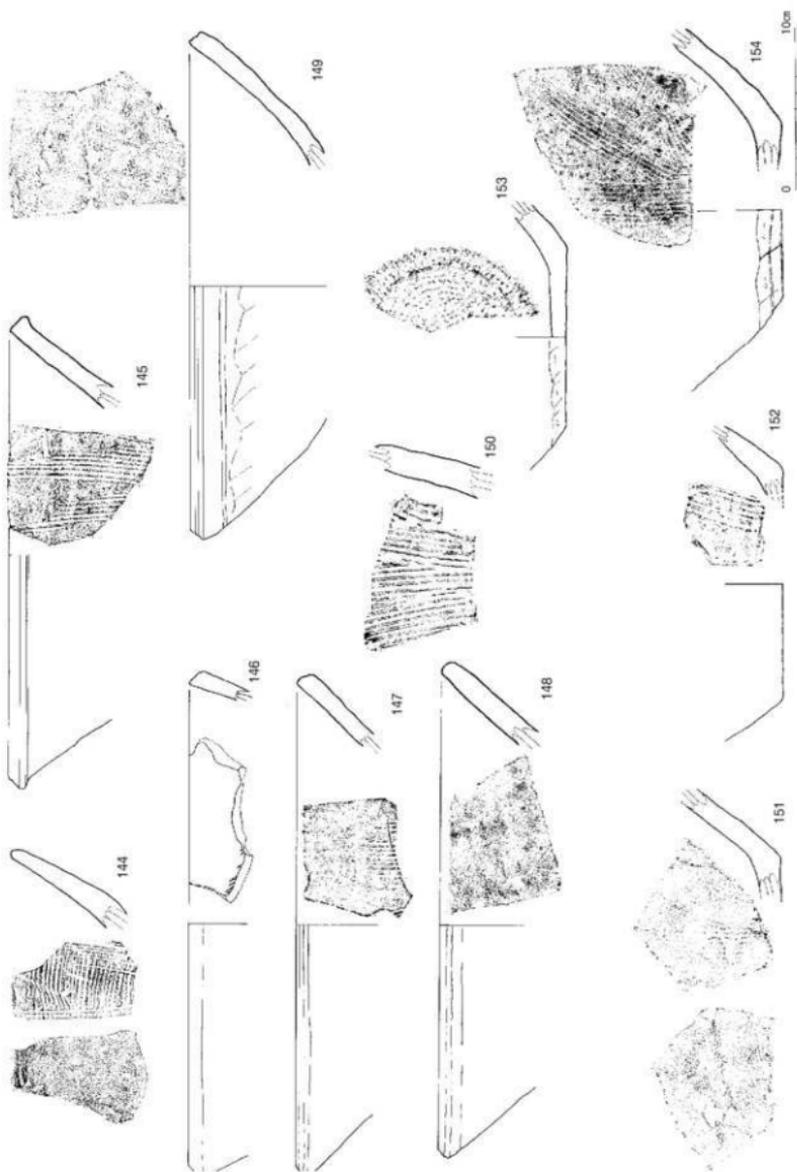
164～171は中・小型の壺・鉢・碗類である。164は扇形のようなへら記号が肩部に刻まれる。165は鉄釉が胴部下位まで, 166は全面に施釉される, 天目の鉢類である。167は無釉の高台に挟りが4箇所施される皿である。見込みにも重ね焼痕が残る。170は外面途中まで鉄釉, 内面は薄い赤茶色の釉が施される。171は外面に黒褐色の釉が施され, 内面は無釉である。

172～184は磁器, 185は滑石製品である。

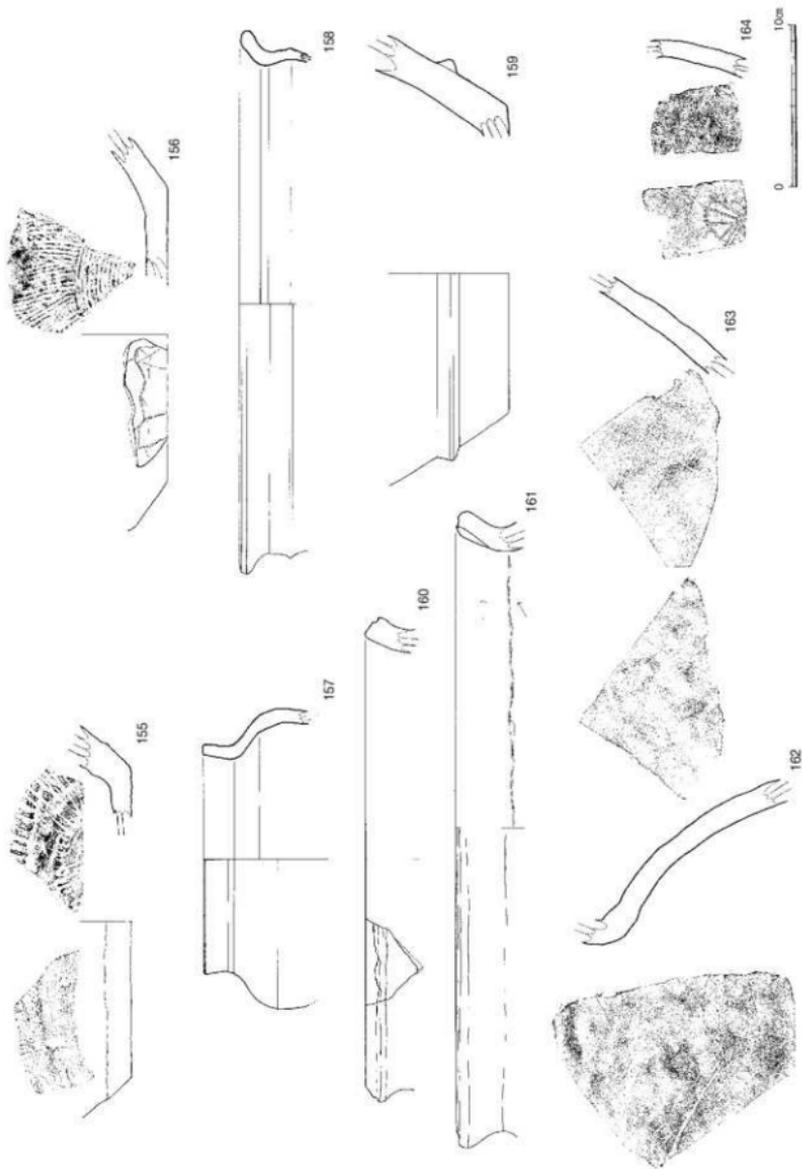
172は白磁である。口唇部は口禿げで底部近くは無釉である。173～179, 182は青磁である。173～176, 179, 182は薄い緑色の施釉, 177, 178はくすんだ緑色の施釉が見られる。182は見込みに



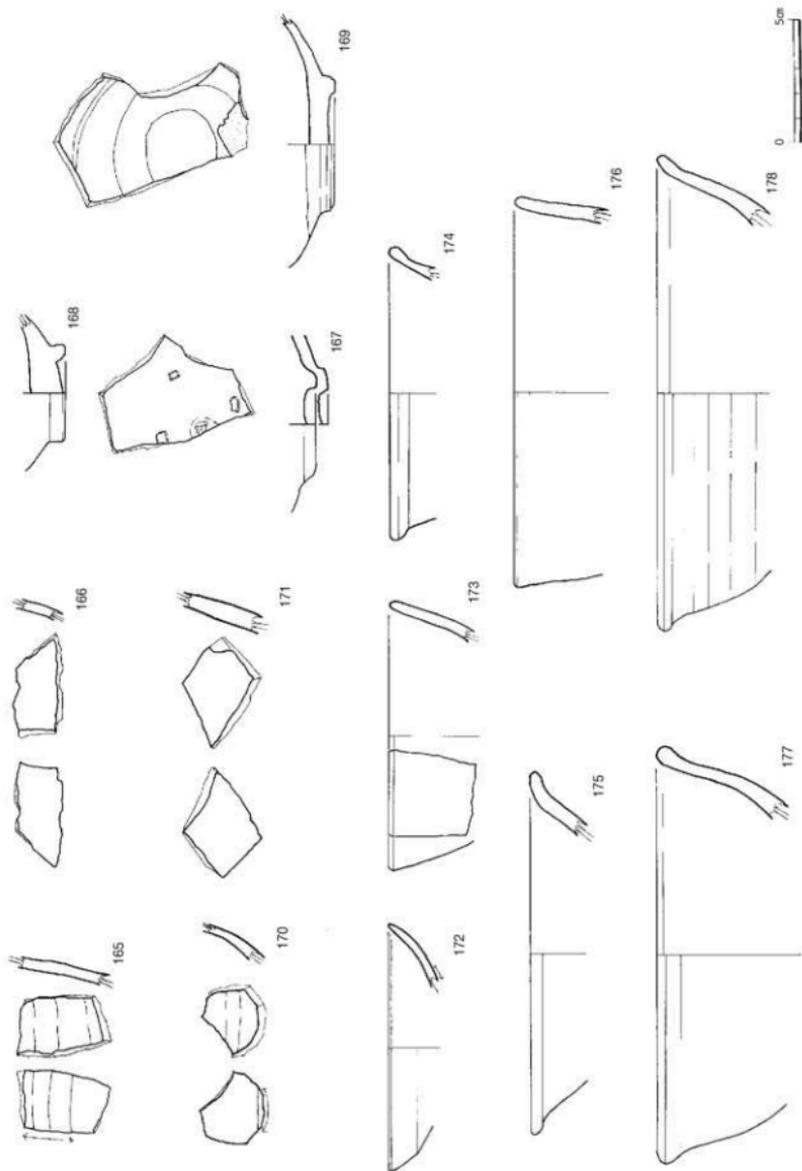
第26圖 本城跡 西側 表層～包含層出土遺物③ (須惠質陶器)



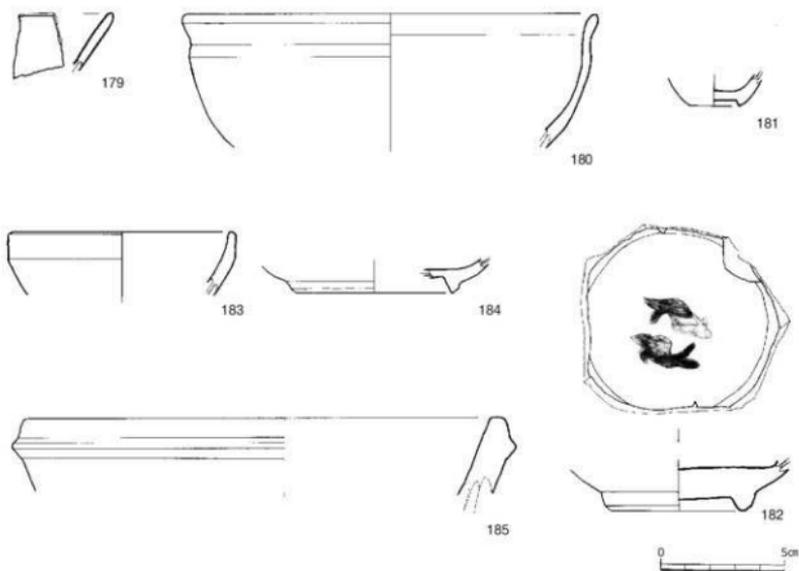
第27図 本城跡 西側 表層～包含層出土遺物④ (須惠質陶器, 瓦質器, 備前焼)



第28図 本城跡 西側 表層～包含層出土遺物⑤ (瓦質器, 陶器)



第29図 本城跡 西側 表層～包含層⑥ (陶器, 青・白・青白磁)



第30図 本城跡 西側 表層～包含層 出土遺物（青磁，磁器，滑石製品）

双魚文が刻まれる。180は灰色の胎磁に透明釉がかかる鉢である。181は猪口である。灰色の胎磁に灰色の釉がかかる。高台内にのみ鉄釉が見られる。184は皿付が輪状に剥ぎ取られる。

185は鈎の付く滑石製石鍋である。

第7表 本城跡西側出土遺物観察表(1)

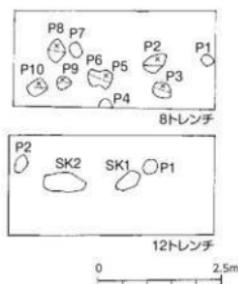
採回	レイアウト 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考		
							口径	高さ	底径			
18	31	16T	Ⅱ	DP	3	土師器	小皿	3.6	2.0	2.9	(太)糸切底、胎土石英多	
	32	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.6	2.1	2.9	糸切底、灰系肌色、胎土石英多	
	33	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.9	2.1	2.8	糸切底、白系肌色、胎土石英多	
	34	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.7	2.0	2.8	(太)糸切底、灰系肌色、胎土石英少	
	35	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	4.8	2.3	3.6	(太)糸切底、灰系肌色、胎土石英少	
	36	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	4.2	2.6	3.0	糸切底、灰系肌色、胎土石英多	
	37	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.8	2.3	2.8	糸切底、薄肌色	
	38	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.9	2.1	2.8	(太)糸切底、灰系肌色、胎土石英多	
	39	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	4.1	2.1	3.2	糸切底、胎土石英多	
	40	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	4.1	2.2	3.0	糸切底、胎土石英多	
	41	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	4.5	2.3	3.5	糸切底、灰系肌色、胎土石英多	
	42	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.7	2.7	3.1	糸切底、茶系肌色	
	43	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.7	2.3	2.7	糸切底、胎土砂粒多、灯明皿	
	44	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.8	2.4	2.8	糸切底、灰系肌色	
	45	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.9	2.4	3.2	(太)糸切底、灰系肌色	
	46	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	4.0	2.7	4.2	糸切底、灰系肌色、胎土石英多	
	47	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	小皿	3.9	2.6	2.8	糸切底、白系肌色	
	19	48	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	皿	6.6	2.7	5.1	(太)糸切底、胎土きめ細かい
49		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.2	3.4	4.4	糸切底、胎土石英多	
50		16T	Ⅱ	DP	3	土師器	環	6.3	3.2	4.7	糸切底、胎土石英多	
51		16T	Ⅱ	DP	11	土師器	環	6.6	3.6	4.8	糸切底、灰系肌色、砂粒多	
52		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	5.5	3.4	4.9	糸切底、灰系肌色	
53		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.7	3.3	4.8	糸切底、胎土石英多	
54		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.3	3.3	4.3	糸切底、灰系肌色、砂粒多	
55		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.7	2.8	4.9	糸切底、灰系肌色	
56		16T	Ⅱ	DP	7	土師器	環	7.5	3.5	5.8	糸切底、白系肌色、胎土石英多	
57		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	7.4	3.1	5.2	切離法不明、胎土石英多	
58		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	8.0	2.8	6.3	糸切底、灰系肌色	
59		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.0	3.5	4.0	切離法不明、胎土砂粒多	
60		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.4	3.5	4.1	糸切底、灰系肌色、胎土石英多	
61		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.4	3.4	4.6	糸切底	
62		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.8	3.3	4.7	(太)糸切底、胎土石英多	
63		16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	6.8	2.8	5.2	糸切底、胎土砂粒多	
64		16T	Ⅱ	DP	1	土師器	環	(5.2)	(1.8)	4.4	糸切底、灰系肌色	
20		65	16T	Ⅱ	DP	11	土師器	環	(5.0)	(2.0)	4.4	糸切底、灰系肌色、胎土砂粒多
	66	16T	Ⅱ	DP	一括	土師器	環	(6.6)	(2.8)	4.4	糸切底、灰系肌色	
	67	16T	ドキダマ	一括	土師器	皿	7.1	2.4	4.3	糸切底、明肌色、胎土砂粒多		
	68	16T	ドキダマ	一括	土師器	皿	3.8	2.1	3.0	糸切底		
	69	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	4.2	2.7	3.0	糸切底		
	70	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	4.5	2.6	3.7	糸切底、胎土石英多、灯明皿		
	71	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	5.0	2.2	3.1	磨耗大切離法不明、白系肌色		
	72	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	4.2	2.4	3.1	糸切底、胎土砂粒多		
	73	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	5.0	2.0	3.8	磨耗大切離法不明		
	74	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	4.5	2.2	3.6	磨耗大切離法不明、胎土石英多		
	75	16T	ドキダマ	一括	土師器	皿	7.3	2.5	4.3	糸切底、きめ細かい、胎土		
	76	16T	ドキダマ	一括	土師器	環	6.2	3.2	3.2	糸切底、胎土石英多		
	77	16T	ドキダマ	一括	土師器	環	6.0	3.0	3.6	糸切底、きめ細かい、胎土		
	78	16T	ドキダマ	一括	土師器	環	5.8	3.4	4.2	糸切底、胎土石英多		
	79	16T	ドキダマ	一括	土師器	環	6.2	3.3	4.0	糸切底、胎土石英多		
	80	16T	ドキダマ	一括	土師器	皿	7.1	2.4	4.2	糸切底、胎土砂粒多、スス付着		
	81	16T	ドキダマ	一括	土師器	小皿	4.9	2.0	3.3	切離法不明		
	21	82	16T	ドキダマ	一括	土師器	皿	5.6	2.0	4.4	糸切底、白系肌色、胎土石英多	
83		16T	縄4	一括	土師器	小皿	4.2	2.2	3.0	磨耗大切離法不明		
84		16T	縄5	一括	土師器	小皿	3.8	2.0	3.0	切離法不明、白系肌色		
85		16T	ドキダマ	2	一括	土師器	環	6.1	3.2	4.1	糸切底、灰系肌色	
86		16T	縄1	一括	瓦質器	ナリ鉢	10.3	8.4	(6.6)	小型、白系肌色、きめ細かい、胎土		
87		16T	ドキダマ	一括	瓦質器	ナリ鉢	13.9	(5.2)	-	-		
88		9T	石敷	一括	瓦質器	ナリ鉢	15.9	(6.0)	-	13c墳、黄系肌色、軟質焼成		
89		15T	遺構	一括	瓦質器	鉢	15.6	(9.6)	-	奈良火鉢		
90		15T	遺構	一括	瓦質器	鉢	20.7	(12.0)	-	奈良火鉢		
91		16T	縄1	一括	陶器	甕類	-	(2.7)	-	中国産、胴部		
92		16T	縄2	一括	陶器	甕類	-	(3.6)	-	中国産、胴部		
93		15T	遺構	一括	青白磁	鉢類	7.0	(2.1)	-	-		
22		94	16T	ドキダマ	一括	青磁	鉢	8.2	(3.5)	-	龍泉窯系、14c中	
		95	9T	石敷	一括	青磁	鉢	7.5	(3.5)	-	龍泉窯系、15c初	
		96	9T	遺構面	31	一括	青磁	鉢	-	(4.9)	2.3	龍泉窯系、14c中
		97	15T	遺構	一括	染付	皿	-	(1.8)	2.6	16c	
		98	16T	縄6	一括	滑石製品	石鐘	8.5	(2.7)	-	中世前期	
		99	16T	Ⅱ	一括	土師器	小皿	3.2	1.5	1.9	糸切底、きめ細かい、胎土	
	100	16T	地盤上	一括	土師器	小皿	4.0	1.7	3.0	切離法不明、きめ細かい、胎土		
	101	16T	Ⅱ	一括	土師器	小皿	4.0	1.8	3.2	切離法不明、朱系肌色、磨耗大		
	102	16T	I	一括	土師器	小皿	4.0	2.0	2.8	(太)糸切底、胎土石英多		
	103	16T	I下	一括	土師器	小皿	4.2	2.2	3.4	切離法不明、胎土石英多		

第8表 本城跡西側出土土遺物観察表(2)

挿入	レイアウト 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	種類	器種	法量(cm)			特徴・備考
							口径	高さ	底径	
24	104	16T	I下	一括	土師器	皿	5.9	2.7	3.6	糸切底
	105	16T	I	一括	土師器	皿	5.9	2.5	3.6	糸切底
	106	16T	II下	一括	土師器	皿	7.4	2.0	4.5	(太)糸切底, 白系肌色
	107	16T	I	一括	土師器	小皿	3.4	1.7	2.3	切離法不明, 白系肌色
	108	16T	I下	一括	土師器	小皿	4.2	2.2	3.5	切離法不明, 灰系肌色
	109	16T	I	一括	土師器	小皿	3.7	1.8	2.9	(太)糸切底
	110	16T	地盤上	一括	土師器	小皿	4.2	1.9	3.3	糸切底
	111	16T	表	一括	土師器	小皿	4.1	2.1	3.2	糸切底, 灯明皿
	112	16T	表	一括	土師器	小皿	4.0	2.4	2.9	糸切底, 胎土石英多
	113	16T	II下	一括	土師器	小皿	4.3	2.5	2.6	糸切底, 胎土石英多
	114	16T	I	一括	土師器	皿	6.0	2.6	4.2	糸切底, 朱系肌色
	115	16T	I	一括	土師器	皿	6.5	2.4	4.1	(太)糸切底
	116	16T	II下	121	土師器	皿	7.0	2.3	4.2	糸切底, 白系肌色, 胎土石英多
	117	16T	II下	125	土師器	小皿	4.3	2.1	3.0	糸切底, 明茶系肌色
	118	16T	I下	一括	土師器	小皿	4.8	2.0	3.9	糸切底
	119	16T	II	一括	土師器	小皿	3.0	1.3	2.2	糸切底, 茶系肌色, 磨耗大
	120	16T	I	一括	土師器	小皿	3.5	1.2	2.5	糸切底, 明肌色
	121	16T	表	一括	土師器	小皿	4.6	1.8	3.8	糸切底, 磨耗大
	122	16T	I	一括	土師器	小皿	3.4	1.9	2.5	糸切底, 灰系肌色
	123	16T	II下	141	土師器	小皿	4.6	2.3	3.6	糸切底, 明肌色, 胎土石英多
	124	16T	II下	121	土師器	皿	5.8	2.7	3.6	糸切底
	125	16T	II下	168	土師器	小皿	3.5	2.3	2.2	糸切底, 胎土きめ細かい, スス付着
	126	16T	II下	一括	土師器	小皿	3.9	2.0	3.0	糸切底, 白系肌色, 胎土石英多
	127	16T	II	一括	土師器	坏	5.5	3.3	4.0	糸切底, 茶系肌色
128	16T	II	一括	土師器	坏	5.9	3.2	3.2	糸切底	
129	16T	I	一括	土師器	坏	7.1	3.1	4.8	切離法不明	
130	16T	II	一括	土師器	坏	6.1	3.5	4.0	糸切底, 灰系肌色	
131	16T	I	一括	土師器	坏	6.6	3.3	4.3	切離法不明	
132	16T	I	一括	土師器	坏	8.2	3.1	6.1	切離法不明, 胎土きめ細かい	
133	16T	II下	一括	土師器	小皿	-	(2.1)	-	るつぼ	
134	16T	I	一括	土師器	小皿	(3.4)	(1.4)	2.4	糸切底, るつぼ	
135	16T	II下	一括	土師器	皿?	-	(0.8)	3.6	糸切底, るつぼ	
136	16T	I下	一括	須恵質陶器	壺	5.0	(2.8)	-	口縁部, 灰白色, 硬質	
137	16T	地盤上	一括	須恵質陶器	壺	13.4	(6.6)	-	口縁部, 青灰色, 硬質	
138	16T	I	一括	須恵質陶器	大甕	17.5	(3.1)	-	口縁部, 灰色, 硬質	
139	16T	地盤上	一括	須恵質陶器	大甕	18.5	(7.7)	-	口縁部, 青灰色	
140	16T	I	一括	須恵質陶器	大甕	-	(5.2)	-	胴部, 灰色	
141	16T	地盤上	一括	須恵質陶器	大甕	-	(13.4)	-	胴部, 中世前期13c	
142	16T	I	一括	須恵質陶器	大甕	-	(3.7)	12.9	胴部, 中世前期13c	
143	9T	II下	一括	須恵質陶器	ナリ鉢	-	(4.9)	7.4	灰白色, 硬質	
144	16T	I	一括	須恵質陶器	ナリ鉢	-	(7.0)	-	胎土きめ細かい, 薄灰色	
145	16T	地盤上	一括	陶器	ナリ鉢	8.5	(6.4)	-	備前焼	
146	IV	雑集積	一括	陶器	ナリ鉢	14.8	(3.6)	-	瓦質器, 灰系肌色, 硬質	
147	9T	II下	一括	陶器	ナリ鉢	15.7	(4.7)	-	瓦質器, 白系肌色, 軟質	
148	9T	表	一括	陶器	ナリ鉢	15.5	(5.9)	-	瓦質器, 灰茶色, やや硬質	
149	16T	II下	169	陶器	ナリ鉢	16.0	(8.2)	-	瓦質器, 白系肌色, 軟質	
150	9T	II下	152	陶器	ナリ鉢	-	(6.5)	-	瓦質器, 朱色, 軟質	
151	IV	雑集積	一括	陶器	ナリ鉢	-	(5.7)	-	備前焼	
152	9T	II下	156	陶器	ナリ鉢	-	(3.5)	7.0	備前焼	
153	9T	II	一括	陶器	ナリ鉢	-	(3.0)	5.6	瓦質器, 黄系肌色, 軟質, 磨耗大	
154	16T	I	一括	陶器	ナリ鉢	-	(6.5)	5.3	瓦質器, 磨耗大, 13c頃	
155	16T	I	一括	陶器	ナリ鉢	-	(3.0)	9.4	瓦質器, 白系朱色, 軟質	
156	9T	II下	145	陶器	ナリ鉢	-	(3.5)	9.5	瓦質器, 白系朱色, 軟質	
157	9T	II	一括	陶器	壺	6.7	(6.3)	-	瓦質器, きめ細かい, 胎土, 軟質	
158	16T	II下	100	陶器	壺	16.1	(4.3)	-	瓦質器, きめ細かい, 胎土, 硬質	
159	16T	II下	139	陶器	鉢・甕類	-	(7.4)	8.5	瓦質器, 硬質	
160	16T	II下	107	陶器	大甕	15.0	(2.9)	-	常滑焼, 14c?	
161	16T	I	一括	陶器	大甕	19.7	(3.7)	-	常滑焼, 14c?	
162	16T	II下	113	陶器	大甕	-	(14.4)	-	常滑焼, 胴部, 14c?	
163	16T	I	一括	陶器	大甕	-	(8.0)	-	常滑焼, 胴部, 14c?	
164	16T	I下	一括	陶器	壺・甕類	-	(5.0)	-	扇形へのへ記号, 肩~胴部, 硬質	
165	9T	表	一括	陶器	壺・鉢類	-	(3.7)	-	瀬戸焼, 天目	
166	16T	II	一括	陶器	壺・鉢類	-	(1.8)	-	瀬戸焼, 天目	
167	16T	I	一括	陶器	皿?	-	(1.1)	2.2	挟り入り高台, 15c初	
168	16T	I	一括	陶器	碗	-	(1.7)	1.9	近世白薩摩	
169	16T	II下	105	陶器	鉢・甕類	-	(1.9)	2.4	近世白薩摩	
170	16T	II	一括	陶器	瓶類	-	(2.0)	-	中国産?, 精緻な胎土	
171	16T	I	一括	陶器	壺類	-	(3.2)	-	中国産, 硬質	
172	9T	I	一括	白磁	皿	5.0	(2.0)	-	口先付	
173	16T	下	一括	青磁	碗・鉢類	5.3	(3.5)	-	15c中~後期, 龍泉窯系	
174	16T	排土	一括	青磁	碗?	5.8	(1.9)	-	半筒形	
175	9T	II下	60	青磁	鉢?	7.3	(2.3)	-	胎磁白濁色	
176	16T	II	一括	青磁	碗	7.6	(3.6)	-	胎磁灰色	

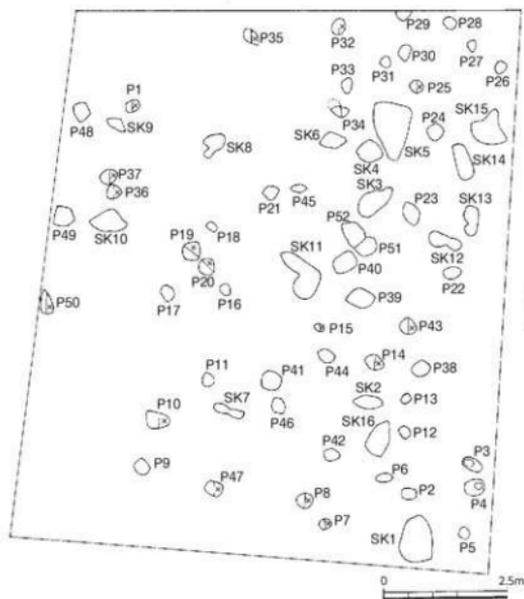
第9表 本城跡西側出土遺物観察表(3)

挿図	レイ外 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	種別	器種	法量(㎝)			特徴・備考
							口径	高さ	底径	
29	177	16T	I下	一括	青磁	鉢	8.1	(5.3)	-	胎磁灰色、14c後～15c初
	178	9T	II下	73	青磁	鉢	9.8	(4.6)	-	14～15c頃、龍泉窯系
30	179	16T	II	一括	青磁	碗・鉢類	5.0	(2.5)	-	15c後、龍泉窯系?
	180	9T	II下	66	青白磁	鉢	8.5	(5.4)	-	15c、胎磁灰色
	181	16T	II	一括	青白磁	猪口	-	(1.1)	1.0	
	182	9T	II下	70	青磁	鉢	-	(2.15)	3.0	龍泉窯系、双鱼文
	183	16T	II下	102	磁器	碗類	4.4	(2.6)	-	猪口類か小型碗、胎磁肌色
	184	IV	表	一括	磁器	皿・鉢類	-	(1.3)	3.2	胎磁白色
	185	9T	II下	41	滑石製品	石鉢	9.0	(3.2)	-	つば付、14c～15c前



第31図 本城跡 8・12トレンチ 遺構検出図

半屈したピットは底面が平坦で断面も円筒形を呈すことから柱穴跡と考えられるが、隣接する 12 トレンチではこれらに続く、あるいは建物復元を可能にする遺構は検出できず、13 トレンチでは地形が落ち込む地点が確認された以外に遺構は検出されなかった。14 トレンチではピット群が多く検出された。8 トレンチ同様一部のピットで全・半掘を行った結果、底部が平坦で断面が円筒形を呈し、栗石を相伴するものも多く、検出したピットはほとんどが柱穴跡と考えられる。P3、P4 では柱痕跡が見られ、P35 では柱抜き取り痕のような形状が見られた。土坑とした中に柱抜き取りの



第32図 本城跡 14トレンチ 遺構検出図

(3) 東側 [8、12~14、17、18 トレンチ]

遺構 [第7図、第31図~第32図、第10表~第12表]

8 トレンチからピットが10基、12 トレンチからピット基と土坑が2基、14 トレンチからピットが52基、土坑が16基それぞれ検出された。検出面はすべてのトレンチで地盤上面である。発掘調査では8 トレンチでのピット検出を踏まえ、建物跡群の広がりを確認するため、12~14のトレンチを設定した。

8 トレンチのピットは径約30~50cm程度であり、

のもあると見られる。しかしながら現地でも図面上でも検討を重ねたが、建物に復元できる柱穴跡の組合せは検出・確認できない。

遺物 [第33図~第35図、第13表]

186~191 は遺構出土の遺物、192~210 は表土から包含層までの一括出土遺物である。

186 は土師器皿で、外面回転ナデ、内面ハケナデ調整される。

187 は瓦質器で鐙の付く脚部である。

188~190 は白磁の碗・鉢・皿類の口縁部でいずれも外反する。

191 は底部が基筒底

第10表 本城跡外12レシ遺構計測表

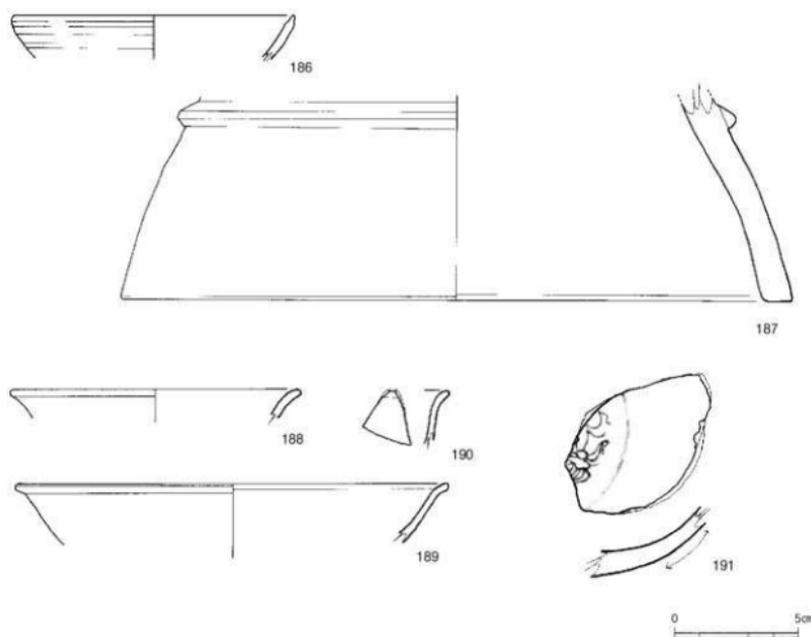
棟号	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
31	8T	P1	28	26	13	円形	-	-	未測、小円
	8T	P2	50	35	30	長円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石1
	8T	P3	40	30	28	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、柱状取込付樋
	8T	P4	28	20	-	(円形)	-	-	未測、小円
	8T	P5	37	29	30	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、P6と切合
	8T	P6	32	31	29	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、P5と切合
	8T	P7	32	28	20	円形	-	-	未測、小円
	8T	P8	50	36	30	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、P9と切合
	8T	P9	29	27	33	隅丸三角形	平坦	すり鉢状	半測、埋土1層、P8と切合
	8T	P10	42	40	27	長円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石5

第11表 本城跡12レシ遺構計測表

棟号	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
31	12T	P1	32	28	-	円形	-	-	未測
	12T	P2	40	25	-	長円形	-	-	未測
	12T	SK1	54	36	-	長円形	-	-	未測
	12T	SK2	86	50	-	円形	-	-	未測

第12表 本城跡14レシ遺構計測表

棟号	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
32	14T	P1	32	22	38	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、磁器片1、薬石
	14T	P2	30	22	30	長円形	平坦	円筒	全測、埋土1層、白磁口縁1
	14T	P3	42	24	20	長円形	平坦	円筒	全測、埋土1層、柱状跡
	14T	P4	38	30	26	円形	平坦	円筒	全測、埋土1層、柱状跡
	14T	P5	24	22	10	円形	平坦	円筒	全測、埋土1層、薬石
	14T	P6	34	18	-	長円形	-	-	未測
	14T	P7	28	24	10	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層
	14T	P8	35	32	14	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層
	14T	P9	34	32	-	円形	-	-	未測
	14T	P10	50	40	50	台形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石
	14T	P11	27	24	10	円形	斜面	円筒	全測、埋土1層
	14T	P12	22	24	-	円形	-	-	未測
	14T	P13	22	21	-	隅丸方形	-	-	未測
	14T	P14	41	30	20	隅丸方形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石
	14T	P15	20	18	6	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層
	14T	P16	25	22	20	台形	平坦	円筒	全測、埋土1層
	14T	P17	37	28	-	円形	-	-	未測
	14T	P18	23	20	-	長円形	-	-	未測
	14T	P19	42	40	30	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石
	14T	P20	36	36	40	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石
	14T	P21	34	30	-	台形	-	-	未測
	14T	P22	34	24	-	長円形	-	-	未測
	14T	P23	51	33	-	長円形	-	-	未測
	14T	P24	35	35	-	円形	-	-	未測
	14T	P25	29	27	20	円形	瓦底	円錐	半測、埋土1層、上部に薬石
	14T	P26	27	24	-	円形	-	-	未測
	14T	P27	24	20	-	台形	-	-	未測
	14T	P28	29	24	-	円形	-	-	未測
	14T	P29	(32)	(21)	-	(円形)	-	-	未測
	14T	P30	33	28	-	台形	-	-	未測
	14T	P31	23	23	-	台形	-	-	未測
	14T	P32	34	26	12	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層
	14T	P33	31	23	-	台形	-	-	未測
	14T	P34	38	21	20	台形	平坦	円筒	半測、埋土1層
	14T	P35	41	26	12	台形	平坦	逆台形	半測、埋土1層、柱穴? 抜取穴?
	14T	P36	30	30	20	台形	平坦	すり鉢状	半測、埋土1層、柱穴?
	14T	P37	35	30	30	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石
	14T	P38	39	34	-	隅丸方形	-	-	未測
	14T	P39	58	41	-	隅丸方形	-	-	未測
	14T	P40	50	49	-	隅丸方形	-	-	未測
	14T	P41	42	42	-	円形	-	-	未測
	14T	P42	34	24	-	円形	-	-	未測
	14T	P43	37	33	20	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石1
	14T	P44	37	30	-	隅丸方形	-	-	未測
	14T	P45	32	16	25	長円形	平坦	円筒	全測、埋土1層、薬石2
	14T	P46	36	25	-	-	-	-	未測
	14T	P47	38	34	17	隅丸方形	平坦	逆台形	半測、埋土1層
	14T	P48	40	39	-	隅丸方形	-	-	未測
	14T	P49	47	46	-	略五角形	-	-	未測
	14T	P50	50	30	25	円形	平坦	円筒	半測、埋土1層、薬石多い
	14T	P51	45	(32)	-	円形	-	-	未測
	14T	P52	50	36	-	円形	-	-	未測
14T	SK1	98	76	-	長円形	-	-	未測	
14T	SK2	62	26	-	長円形	-	-	未測	
14T	SK3	80	38	-	長円形	-	-	未測	
14T	SK4	64	44	-	隅丸方形	-	-	未測	
14T	SK5	112	88	-	台形	-	-	未測	
14T	SK6	54	36	-	円形	-	-	未測、薬石5	
14T	SK7	62	10	-	楕円筒形	-	-	未測	
14T	SK8	56	40	-	変じ形	-	-	未測	
14T	SK9	44	22	-	扇形	-	-	未測	
14T	SK10	76	46	-	扇形	-	-	未測	
14T	SK11	107	42	-	不定形	-	-	未測	
14T	SK12	64	14	-	変じ形	-	-	未測	
14T	SK13	71	16	-	変じ形	-	-	未測	
14T	SK14	72	32	-	隅丸長方形	-	-	未測、検出面に土師器	
14T	SK15	80	72	-	扇形	-	-	未測	
14T	SK16	74	49	-	略五角形	-	-	未測	



第33図 本城跡 東側遺構 出土遺物

と見られる青白磁である。なお、図化しなかったが、SK14から磨耗の激しい土師器が出土している。

192～196は土師器皿類である。192、195は外内面ともハケナデ、底部外面もハケナデ調整。193は外内面とも回転ナデ調整。見込みに鉄分が付着しており増埒として使用されたと見られる。194は外面回転ナデ後ハケナデ、内面と底部外面はハケナデ調整される。195は外面回転ナデ、内面回転ナデ後ハケナデ調整。内面にはススが付着し灯明皿として使用されたと見られる。

197は須恵質陶器の大型甕である。外面は格子目タタキ、内面は工具ナデで調整。外面にはススが付着している。

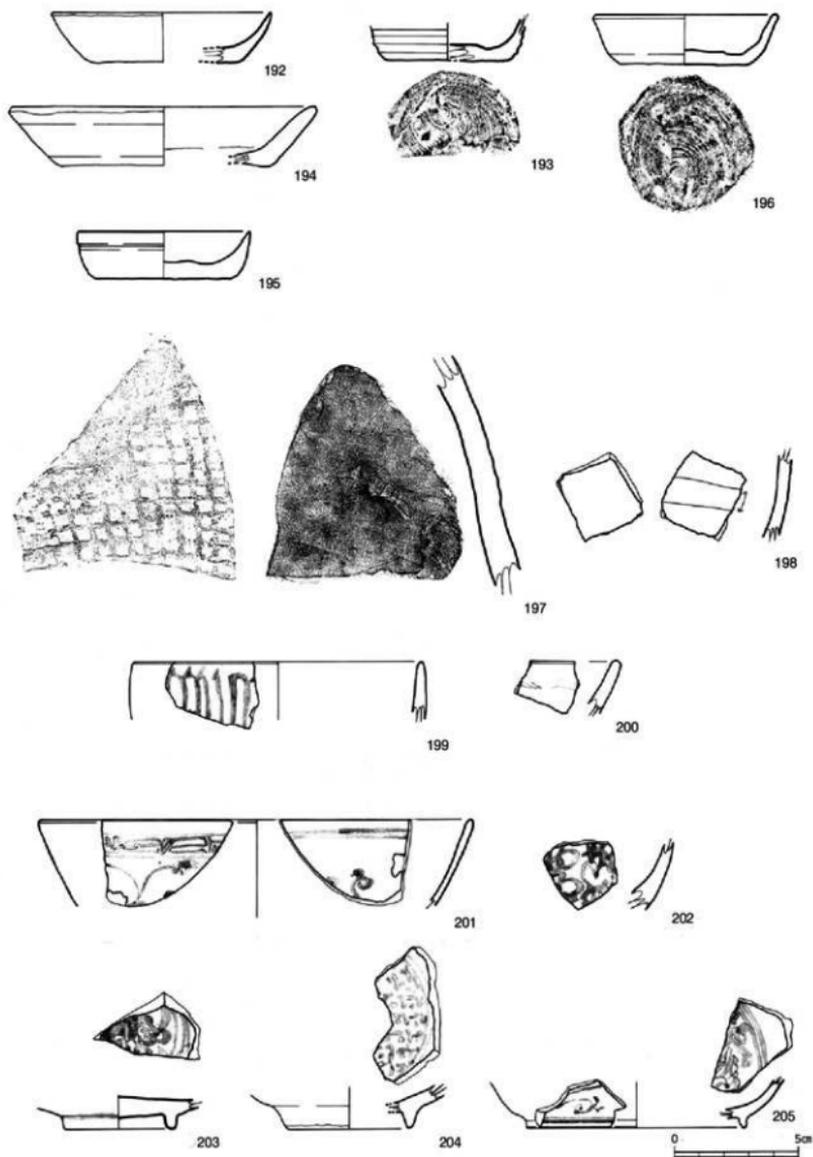
198は陶器の甕類である。外面は茶緑色の施釉、内面には帯状に無釉の箇所が見られる。

199は青磁でくすんだ緑色の施釉が見られる。

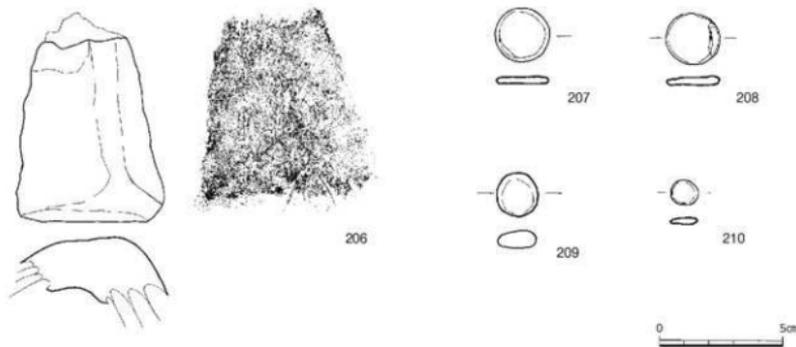
200は外面に草文が刻まれる青白磁の口縁部である。

201～205は染付である。201は雷文体と唐草文が描かれる。203～205は墨付を輪状に剥ぎ取る。206は胎土が白系肌色で軟質の焼成である。形状から（軒丸）瓦として図化しただが、この一点のみの出土であり、この遺物の位置づけは今後の課題としたい。

207～210は基石である。すべて黒または黒灰色で全面研磨されている。207、208は均整の取れた成形である。



第34図 本城跡 東側 表層～包含層 出土遺物① (土師器, 須惠質陶器, 陶器, 青磁, 染付)



第35図 本城跡 東側 表層～包含層 出土遺物② (瓦, 基石)

第13表 本城跡東側出土遺物観察表

挿図	レイアウト番号	出土区	出土層	遺物番号	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考
							口径	高さ	底径	
33	186	14T	SK8	一括	土師器	皿?	5.7	(1.5)	-	磨耗大
	187	14T	SK9	一括	瓦質器	脚台	-	(8.8)	13.7	やや軟質、鉢類の脚部か
	188	14T	SK6	一括	白磁	碗・鉢類	5.9	(1.2)	-	胎磁白色
	189	14T	P2	一括	白磁	皿?	8.6	(2.5)	-	胎磁白色
	190	14T	P1	一括	白磁	皿・碗類	-	2.2	-	胎磁白色
	191	14T	SK11	一括	青白磁	皿	-	(3.2)	-	胎磁灰色、唐草文?草花文?
34	192	13T	I	一括	土師器	小皿	4.4	2.0	3.0	糸切底、朱系肌色、胎土石英多
	193	13T	I	一括	土師器	小皿	(3.1)	(1.7)	2.5	糸切底、白系肌色、ろっぼ
	194	13T	I	一括	土師器	皿	6.2	2.4	4.2	切離法不明、白系肌色
	195	13T	I	一括	土師器	小皿	3.5	1.95	2.8	糸切底、胎土石英多
	196	13T	I	一括	土師器	小皿	3.8	2.1	2.7	糸切底、胎土石英多、灯明皿
	197	13T	I	一括	須恵質陶器	大壺	-	(9.5)	-	樽番城窯、中世前期13c、肩筋
	198	III	石垣	一括	陶器	甕類	-	(3.4)	-	中国産、胴部、きめ細かい胎土
	199	III	表	一括	青磁	碗	5.8	(2.4)	-	龍泉窯系、15c後半
	200	17T	表	一括	青白磁?	碗・鉢類	-	(2.2)	-	胎磁白濁色
	201	8T	I	一括	染付	鉢・碗類	8.8	3.5	-	15~16c
	202	III	表	一括	染付	碗	-	(2.7)	-	15~16c、草花文?
	203	8T	I	一括	染付	碗	-	(1.4)	2.2	15~16c、花卉文
	204	18T	地盤上	一括	染付	碗	-	(1.8)	2.4	15~16c
	205	17T	表	一括	染付	皿?	-	(1.9)	4.4	15~16c
35	206	13T	I	一括	瓦?	軒丸瓦?	-	-	-	素焼、軟質
	207	14T	排土	一括	基石	黒	-	-	-	長2.2 短2.1 厚0.3
	208	17T	表	一括	基石	黒	-	-	-	長2.2 短2.1 厚0.3
	209	14T	I	一括	基石	黒	-	-	-	長1.8 短1.7 厚0.7
	210	8T	I	一括	基石	黒	-	-	-	長1.1 短1.0 厚0.3

(4) 土塁下基壇部及び虎口部 [6、10、21、S1～S4 トレンチ]

遺構 [第4図、第7図、第36図、第14表]

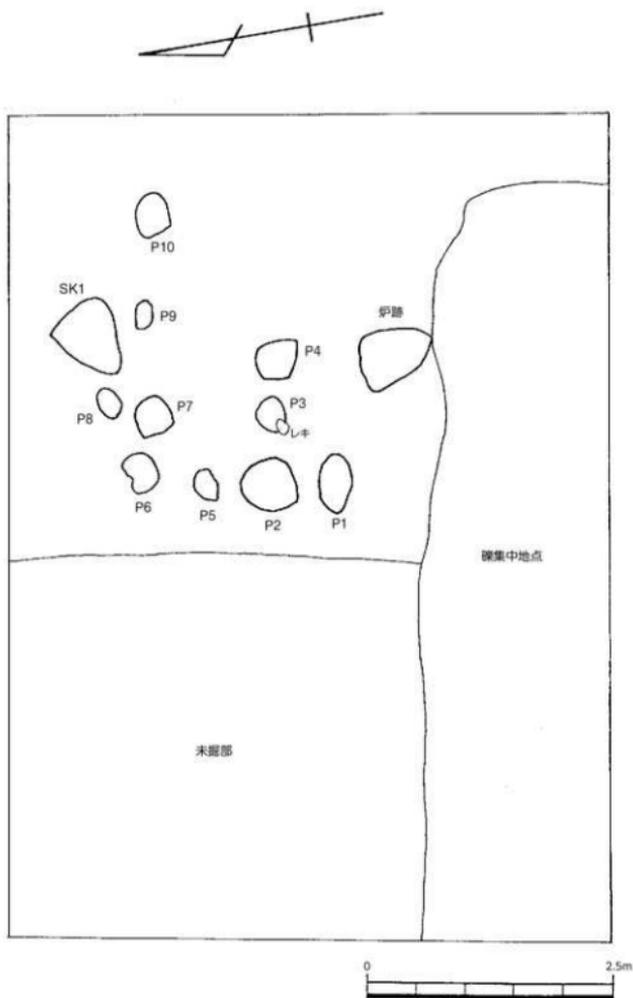
本城南側の土塁は虎口に近づくにつれて高くなり、その流れで高さは低くなりながら内枳形虎口の袖部を形成している。東側にも袖部が残り再び土塁を形成し、本城跡の曲輪を取り囲む形となっている。この土塁については第4図に掲載している。この図中、21 トレンチの西側地点から14 トレンチの東側の地点の等高線が表示されていない曲輪南西部から北東部にかけての、ケバのみ図示している箇所については、現代の道路工事により削られたものの、旧来の土塁形状に復元したとのことであるが、元来残っていた形状、規模までは復元されていないと見られる。

この残存している土塁の下位には石敷遺構で囲まれた基壇状の地形が見られる。そこに6・10 トレンチを設定した。6 トレンチからは石敷遺構が検出され、10 トレンチからはピットや土坑、炉跡などの遺構検出がされたほか、6 トレンチと同様に礫が多く出土した。しかしながら、礫に配置や規則性などが取できないため、遺構と位置づけずここでは礫集中地点とした。10 トレンチのピット及び土坑は炉跡を囲むように検出されたことから、炉跡に付随する性格を持った施設のものと考えられる。この炉跡から出土した炭化物については科学分析を実施（第4章自然科学分析に詳細を掲載）した。6・10 トレンチからは石敷遺構や礫集中地点を中心に大型の甕の破片が多く出土しており、これらの遺構との関連を示すものとも考えられる。

虎口トレンチについては門や通路に関連する遺構の検出を目的とした。小規模のトレンチを当初3箇所設定したが、S2Tでの石敷遺構の検出を受けて、範囲確認のS4Tを設定し掘り下げた。S1Tからは正円状のピット1基が、S2Tからは石敷遺構と石列遺構が、S4Tから石列遺構が検出された。これらの遺構についてはその検出状況から、未掘部には遺構の全体が良好に残存していると考えられたため、これ以上の拡張、掘り下げは行わず、写真撮影だけに記録を止めた。

第14表 本城跡10トレンチ遺構計測表

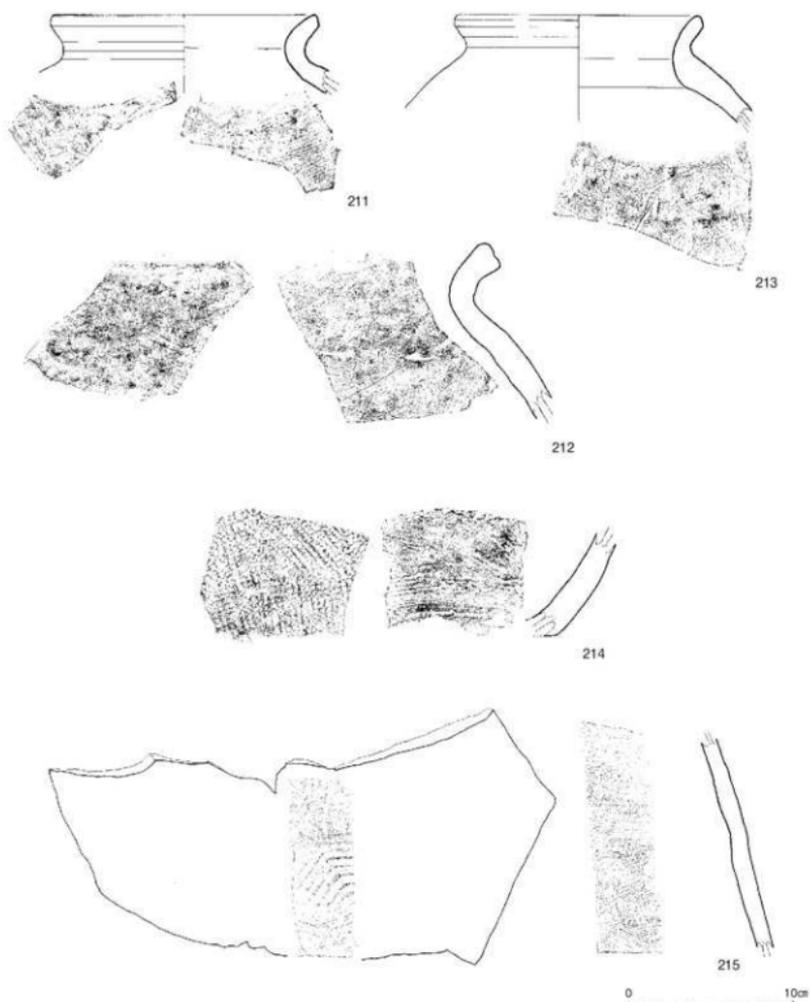
挿図	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
36	10T	P1	58	30	-	長凹形	-	-	未掘
	10T	P2	60	53	-	凹形	-	-	未掘
	10T	P3	36	28	-	凹形	-	-	検出面に礫1点
	10T	P4	49	42	-	略台形	-	-	未掘
	10T	P5	30	19	-	長凹形	-	-	未掘
	10T	P6	40	38	-	長凹形	-	-	未掘
	10T	P7	44	40	-	凹形	-	-	未掘
	10T	P8	30	24	-	小凹形	-	-	未掘
	10T	P9	30	17	-	小長凹形	-	-	未掘
	10T	P10	46	38	-	凹形	-	-	未掘
	10T	SK1	78	70	-	隅丸三角形	-	-	未掘
	10T	炉	78	58	-	隅丸三角形	-	-	未掘



第36図 本城跡 10トレンチ遺構検出概要図

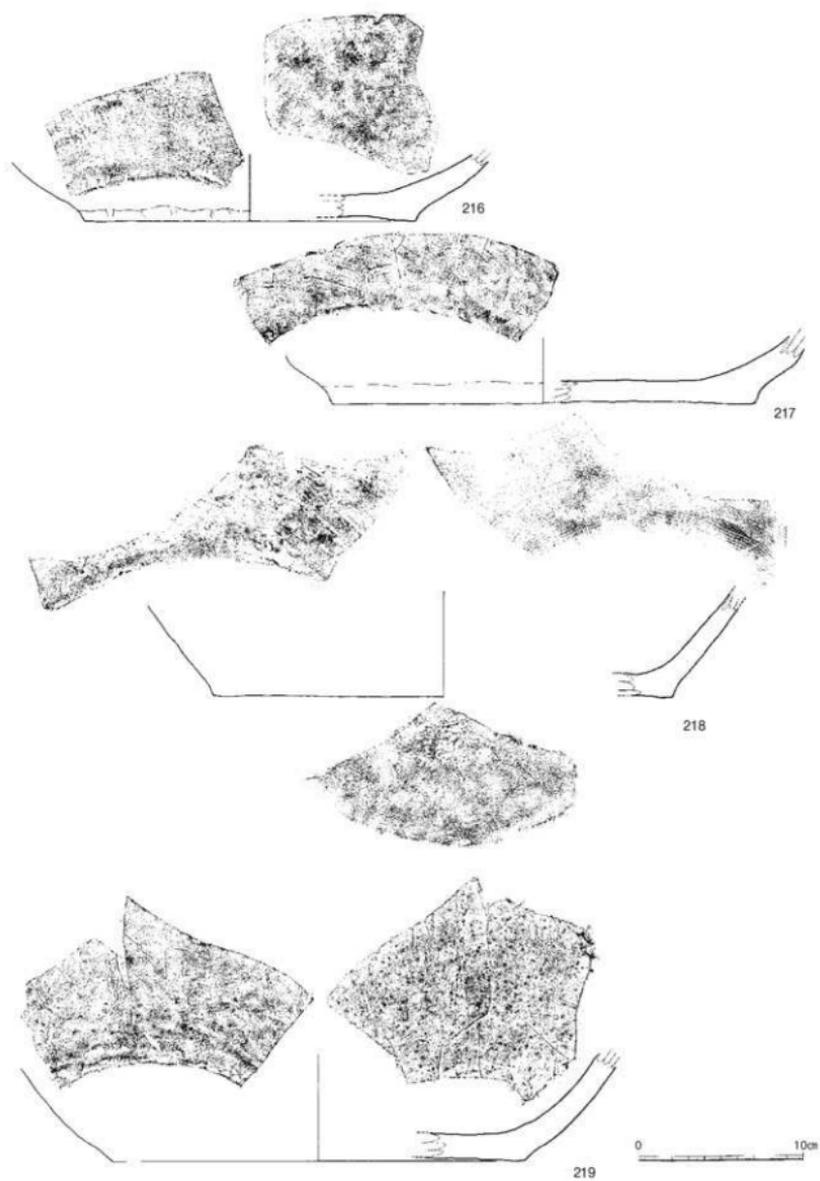
遺物 [第37図～第44図、第15表～第17表]

211～227は遺構出土の遺物、228～240は表土から包含層までの一括出土遺物である。

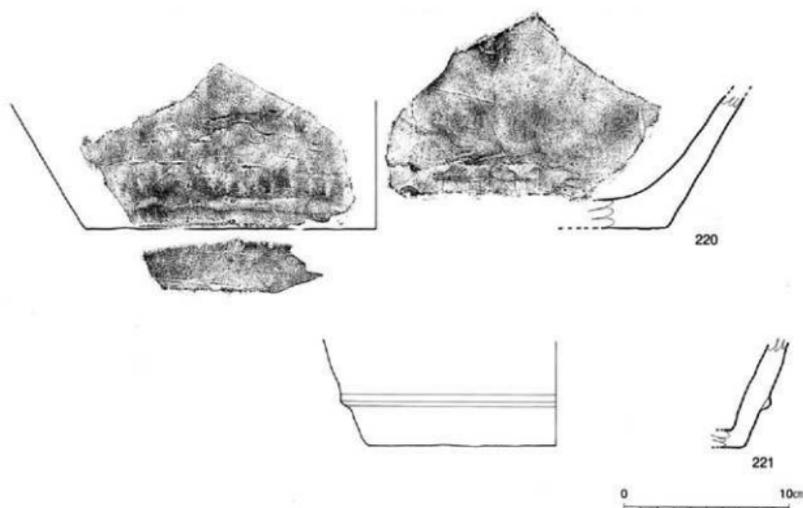


第37図 本城跡 土塁下基壇部遺構 出土遺物① (須恵質陶器)

211～219 は須恵質陶器である。すべて 10 トレンチの石敷遺構面からの出土である。211 は壺である。外面山形タタキ、内面ヘラオサエ、ハケナデで調整。断面にはスが入る。212～219 は大型の甕である。212 は外面山形タタキ、内面ヘラ・ハケナデで調整。断面にはスが入る。213 は外面回転ナ



第38図 本城跡 土壘下基壇部遺構 出土遺物② (須恵質陶器)



第39図 本城跡 土塁下基壇部遺構 出土遺物③ (須恵質陶器, 陶器)

デ後ハケナデ、内面回転ナデ、ハケナデで調整。214 は外面格子目タタキ、内面ヘラナデで調整。215 は外面山形タタキ後ハケナデ、内面ハケナデで調整。216 は外面山形タタキ後ハケナデ、内面ハケナデで調整。217 は外面山形タタキ、内面ヘラナデで調整。底部外面立ち上がり部にはハケカキアゲ調整が見られる。断面にはスが入る。218 は外面山形タタキ後ハケナデ、内側面ヘラナデ、内底面ハケナデで調整。断面にはスが入る。219 は外面工具ナデ、内面ヘラナデで調整。

220 は陶器大甕である。外内面工具カキアゲ、回転ナデで調整。

221 は土師器の鉢類である。外内面ともハケナデ調整。胴部に鏝がつく。

222 は青白磁である。口縁部が強く外反する。

223、224 は青磁である。223 はくすんだ緑色の施軸で大きい轆漕弁が見られる。224 は高台は無釉で豊付が輪状に剥ぎ取られる。

225～227 は染付である。226 は高台内面に長命富貴の銘が見られる。

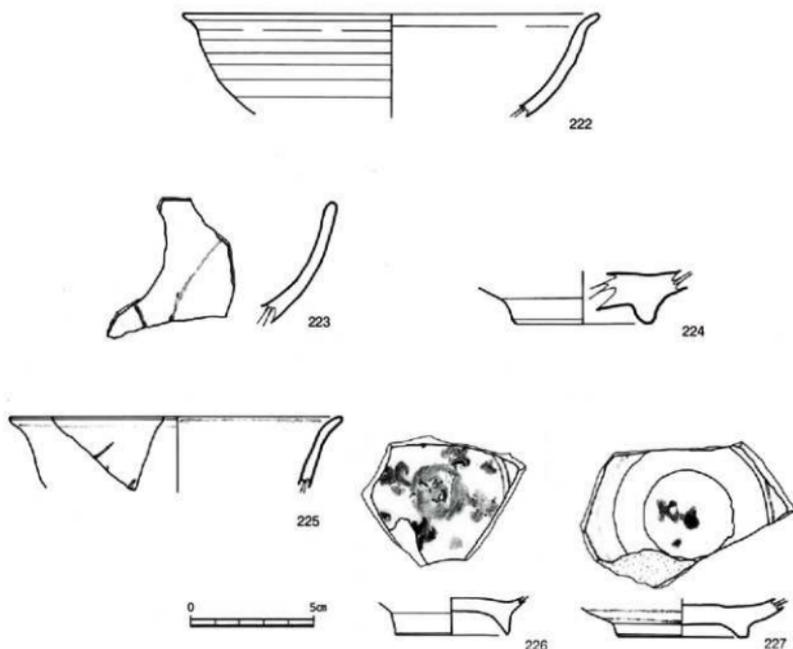
228 は須恵質陶器である。外面は回転ナデ調整だが、櫛描文は文様・記号的要素も感じられる。内面はハケナデ、カキアゲで調整。

229 は瓦質器の大甕である。外面山形タタキ、内側面ヘラナデ、口縁内部はハケナデ調整。断面にはスが入る。

230 は図示した矢印部分にススの付着が見られることから、器台類で灯明皿の受け皿部分か鏝のような部分と見られる。

231 は陶器大甕である。外内面回転ナデ後ハケナデ調整。全面に自然釉が施される。

232～235 は中国産陶器である。232 は外面から口縁部内面まではツヤのない鉄軸、内面は灰色の



第40図 本城跡 土塁下基壇部遺構 出土遺物④（青白磁，青磁，染付）

自然釉が施軸される。233 は中国草南地方のものと思われる。両面ともツヤのある鉄釉が施軸されるが剥落が激しい。234 は外面にはツヤのない鉄釉、内面には鉄釉の上に濁った緑色の釉が施軸される。胎土も内外二層で内側が暗い紫色、外側が灰白色である。235 は片面のみ自然釉が見られ、無釉のほうは多少擦れているため、小型壺・甕類の底部とした。

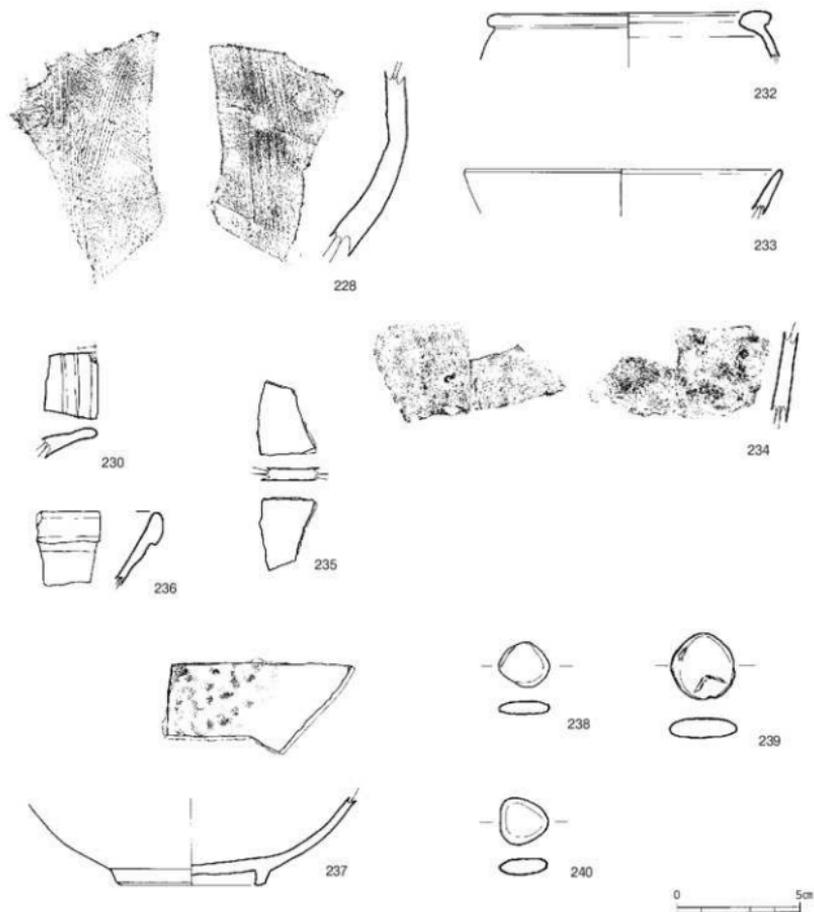
236 は玉縁口縁を持つ白磁である。

237 は染付である。畳付は釉剥ぎされ、内湾する。

238、239 は基石で全面研磨される。240 は全面研磨されるが、形状が三角形であること、色調が暗深紫色であることから愛玩石とした。

241～245 は虎口トレンチの出土遺物で、242 と 245 が遺構からの出土、他は表土から包含層までの一括出土遺物である。

241 は奈良火鉢である。頸部には雷文のような二重の四角形文が見られる。242、243 は瓦質器の摺鉢である。242 は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデで調整。243 は外面横位の回転ナデで、指頭ナデまたはハケナデも見られる。内面は胴部が斜位、底部が横位のハケナデで調整。244 は陶器の大型壺・甕である。タタキ縮めの後、工具ナデ調整。245 は青磁である。図中矢印の範囲まで

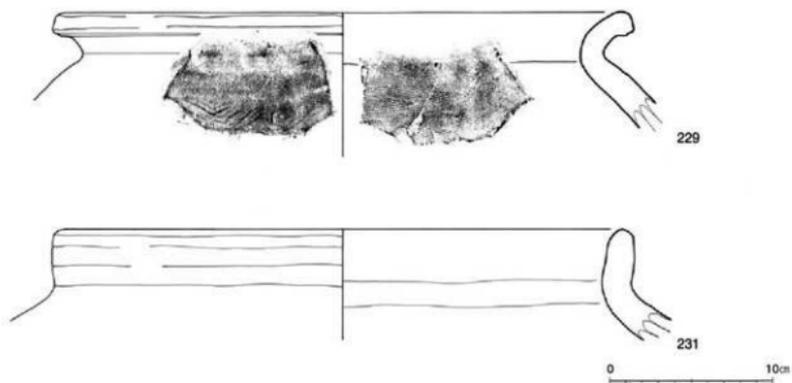


第41図 本城跡 土壘下基壇部遺構 出土遺物① (須恵質陶器, 陶器, 白磁, 染付, 基石)

施釉される。見込みに細い線状の文様が刻まれる。

(その他の遺物)

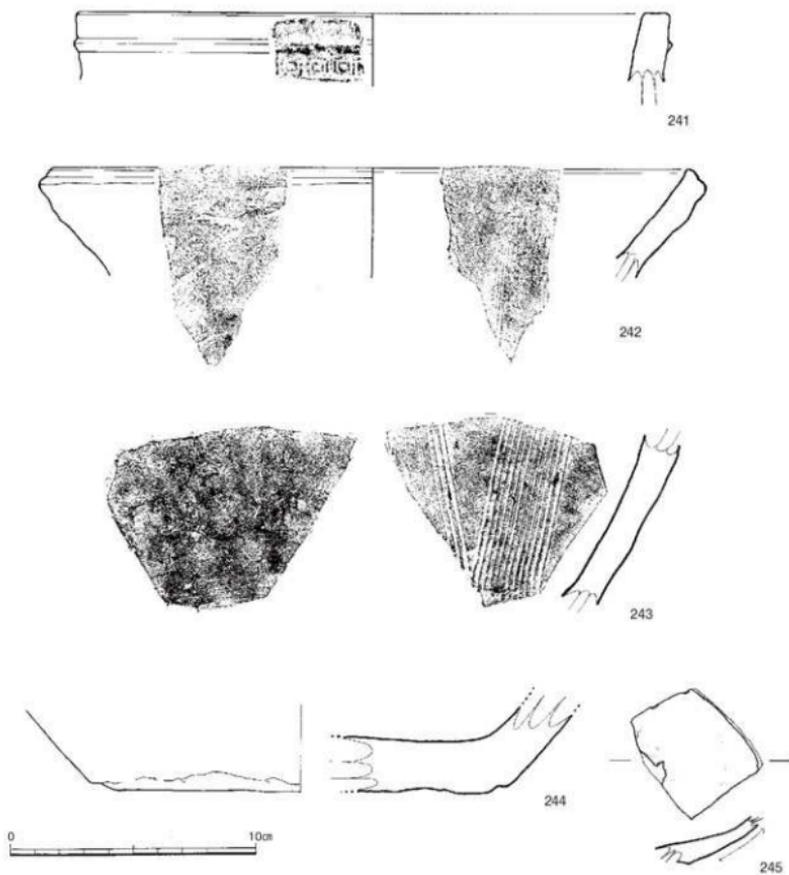
246、247は後期旧石器時代の遺物である。本城跡全トレンチから計4点の同時代の遺物が出土した。図化しなかった石器は細石刃核あるいは石核と見られる。いずれも他所からの混ざりこみとは考えにくく、山城造成期以前の遺物の残りと考えられる。246は小型の台形石器である。両側縁部



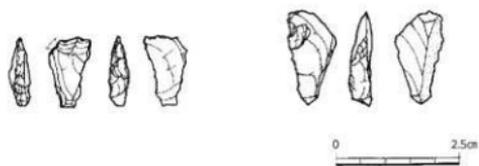
第42図 本城跡 土塁下基壇部 表層～包含層 出土遺物②（瓦質器，陶器）

に細かいブランディングが見られる。背面刃部には刃こぼれが見られる。247 は小型のナイフ形石器である。左側面部には原石面が残る。基部両側には細部加工が見られる。246、247 ともチャート製である。

このほか、16 トレンチ出土の鉄滓一点を図版中にのみ掲載する。



第43図 本城跡 虎口トレンチ 表層～包含層 出土遺物（瓦質器、陶器、青白磁）



第44図 本城跡 その他の遺物（石器）

第15表 本城跡土壘基壇・虎口出土遺物観察表

棟図	レイアウト 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴・備考
							口径	高さ	底径	
37	211	10T	石敷	一括	須恵質陶器	壺	8.9	(4.8)	-	中世前期13c, 青灰色
	212	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(10.8)	-	中世前期13c, 薄い灰色
	213	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	7.3	(6.5)	-	青灰色, 硬質
	214	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(6.3)	-	樟香城焼, 中世前期, 13c, 底部
	215	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(12.8)	-	中世前期?, 薄い灰色, やや硬質, 肩部
38	216	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(4.1)	10.1	中世前期?, 薄い灰色, やや硬質, 底部
	217	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(4.1)	12.7	中世前期13c, 薄い灰色, 底部
	218	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(6.5)	14.0	中世前期13c, 薄い灰色, 底部
	219	10T	石敷	一括	須恵質陶器	大甕	-	(6.6)	12.5	薄い灰色, 軟質, 底部
39	220	6T	石敷	一括	陶器	大甕	-	(7.8)	18.0	赤茶褐色の胎土, 底部
	221	6T	石敷	一括	土師器	鉢・鉢類	-	(6.4)	11.5	赤茶褐色の胎土, 底部
40	222	6T	石敷	一括	青白磁	鉢	8.6	(4.2)	-	灰色の胎土, 透明釉
	223	6T	石敷	一括	青磁	鉢・碗類	-	(5.0)	-	龍泉窯系, 14c, 胎磁灰色
	224	6T	石敷	一括	青磁	鉢	-	(2.2)	2.7	龍泉窯系, 15~16c
	225	10T	石敷	一括	染付	碗	6.7	(2.8)	-	15~16c, 墓文
	226	6T	石敷	一括	染付	碗	-	(1.5)	2.3	15~16c, 花弁文
	227	6T	石敷	一括	染付	鉢・皿類	-	(1.6)	2.5	15~16c, 見込みに蛇の目痕
41	228	6T	排土	一括	須恵質陶器	壺?	-	(7.5)	-	薄い灰色, 硬質, 肩~胴部
42	229	10T	I下	一括	瓦質器	大甕	17.35	(5.5)	-	中世前期13c, 白系灰色, 軟質
41	230	7T	表	一括	陶器	器台類?	-	(1.3)	-	胎土暗紫色, ツヤのない鉄種施釉
42	231	6.10I	石敷	一括	陶器	大甕	17.0	(6.7)	-	薄い紫色, 硬質
	232	10T	II	一括	陶器	小甕	5.8	(1.9)	-	中国産, 胎土石英多
41	233	7T	表	一括	陶器	碗?	6.3	(1.9)	-	中国(草原)産, 胎土淡黒色
	234	6T	表	一括	陶器	甕類	-	(3.7)	-	中国産, 胴部
	235	6T	表	一括	陶器	壺・鉢類?	-	(0.5)	-	中国産, 底部?
	236	6T	石塁	一括	白磁	鉢	7.1	(3.0)	-	12c後半
	237	10T	I	一括	染付	碗	-	(3.5)	3.0	15~16c
	238	6T	表	一括	基石	黒	-	-	-	長2.1 短1.9 厚0.5
	239	7T	表	一括	基石	白	-	-	-	長2.7 短2.5 厚0.8
	240	7T	表	一括	愛玩石?	暗深紫	-	-	-	長1.9 厚0.7
43	241	表	表	一括	瓦質器	鉢	12.1	(2.8)	-	S1T~S4T
	242	石敷	表	一括	瓦質器	すり鉢	12.8	(4.5)	-	S2T, 薄い灰色
	243	表	表	一括	瓦質器	すり鉢	-	(6.8)	-	S1T~S4T, きめ細かい胎土
	244	表	表	一括	陶器	大型壺・甕類	-	(3.5)	7.5	S1T~S4T, 底部, 胎土暗茶褐色, 硬質
	245	石敷	表	一括	青白磁	鉢・碗類	-	(1.9)	-	S2T

第16表 本城跡出土石器観察表

棟図	レイアウト 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	器種	材質	法量			特徴
							長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	
44	246	17T	表土	一括	台形石器	チャート	1.4	0.8	0.41	小型, 灰色に黒織の石材
	247	17T	表土	一括	ナイフ形石器	チャート	1.8	1.0	0.74	小型, 灰色に黒織の石材

第4節 蔵之城跡の調査 [第45図、第46図]

(1) 概要

蔵之城跡では合計9トレンチを設定した。遺構の検出状況は第46図の通りである。なお、発掘調査では本城跡と同じく、検出された遺構は原則現地保存とするため、掘り下げについては必要最低限度で行った。これに伴い遺構検出状況等の図化作業に係る測量も必要以上は行わなかったが、これを補完するため写真撮影による記録作業を適宜実施した。

遺構 [第46図～第48図、第17表]

4トレンチからはピットが4基検出された。全部半掘した結果、埋土は1層であり、底部の形状、断面からP2～P4は柱穴跡と見られる。P1はやや小さいが、P3からは青磁口縁部同一品が2点出土した。地鎮用と見られる。5トレンチからはピットが1基検出された。半掘した結果、埋土は1層で、小規模の段を有している。6トレンチからはピットが3基検出された。全て埋土は1層である。平面と断面形状から全て柱穴跡と見られる。P3は片方の側面が斜位であることから柱抜き取り痕とも見られる。土師器の小片が2点出土している。7トレンチからはピットが4基検出された。うち、P2とP3で半掘を行った結果、埋土は1層で、断面及び底部の形状から柱穴跡と見られる。P3は一方の側面が斜位であることから柱抜き取り痕と見られる。反対側にもピットが礫を挟んで作られている。9トレンチからは検出面で栗石を8点有するピットを検出した。平面形状と規模が5トレンチのピットと似ており、他のピットよりは両者とも比較的大きい。また、9トレンチでは北側で地盤が段状に削られ、曲輪中央部に向かい、落ち込む地形を検出している。このほか、3トレンチでは焼土・炭化物を伴う土坑を検出しており、この炭化物については科学分析を実施(第4章自然科学分析に詳細を掲載)した。

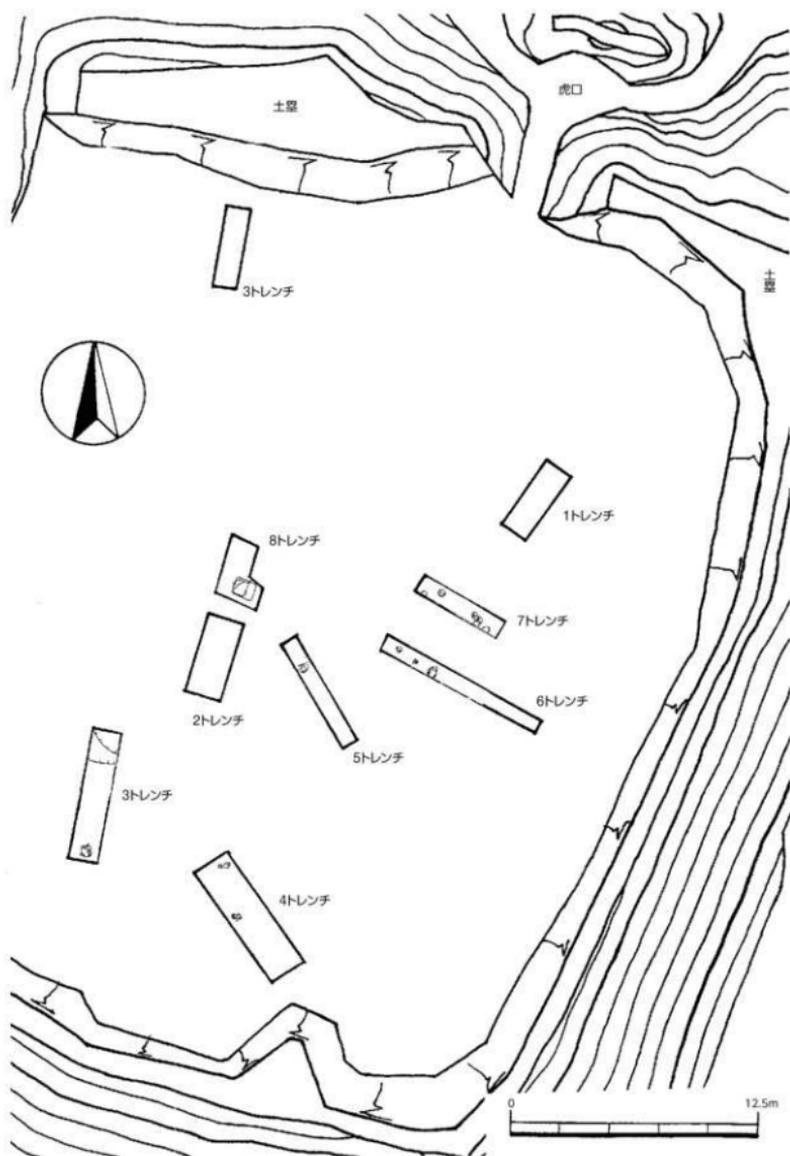
8トレンチからは大型の方形土坑が検出された。およそ1m四方の方形を呈している。トレンチ中央部南側にピットも検出された。このピットも半掘する形で土坑を半掘した結果、西側角部は斜位に掘り込まれるが、ここ以外ほぼ垂直に掘り込まれ、底部は硬い地盤まで掘り込まれている。ピットは断面の形状と埋土から、後世の自然営為または耕作活動によるものと見られる。このピット以外の埋土には地盤の土壌が混ざり、灰黒色から暗い緑灰色を呈している。土坑埋土の堆積は断面観察から、底に炭化物やその他のものを置いて間もなく一気に埋められたと見られる。なお、この炭化物と土坑内の土壌については科学分析を実施(第4章自然科学分析に詳細を掲載)した。土坑からはこの他に土師器や青磁が出土している。

遺物 [第49図～第50図、第18表]

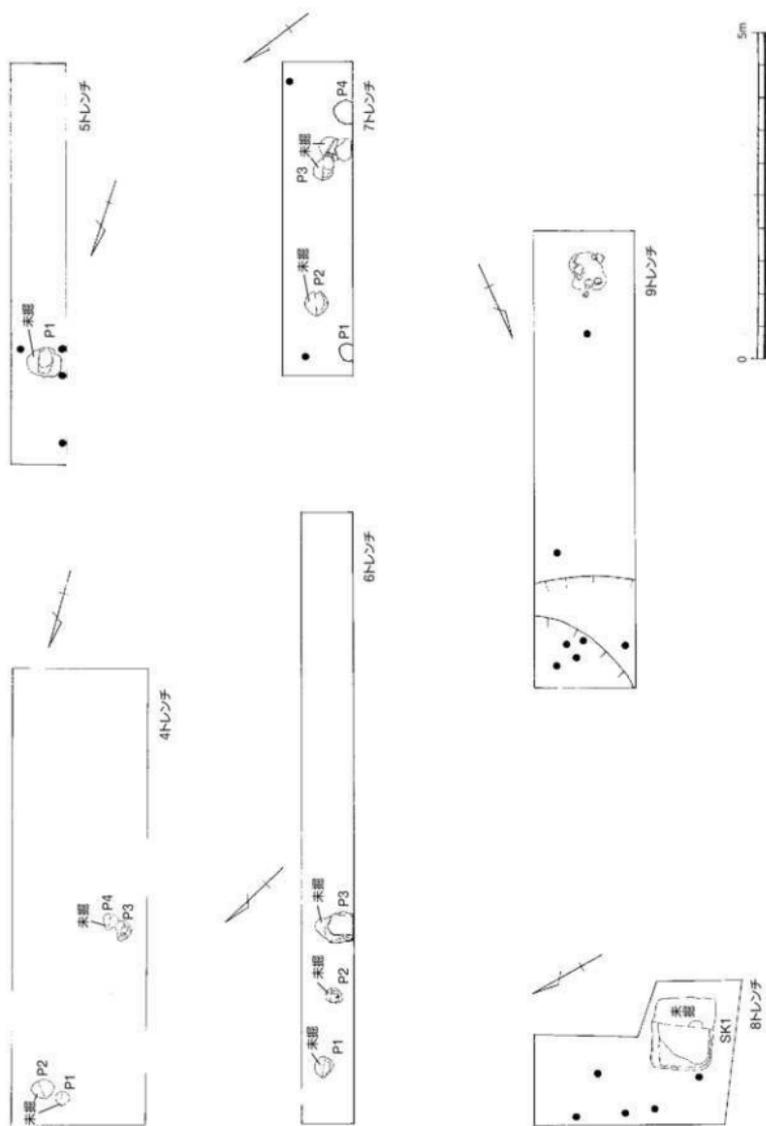
248～255は遺構出土の遺物、256～266は表土から包含層までの一括出土遺物である。

248～253は土師器皿・坏類である。248は外内面ハケナデ調整、249は外面回転ナデ後ハケナデ、内面ハケナデ調整、250～252は外面回転ナデ後ハケナデ、内面及び底部外面ハケナデ調整、253は外面回転ナデ、内面ハケナデ調整、254は青磁である。薄い緑釉の施釉で口縁部が外反する。255は奈良火鉢である。頸部の刻印は×印状の文様だが磨耗が激しく詳細は不明である。

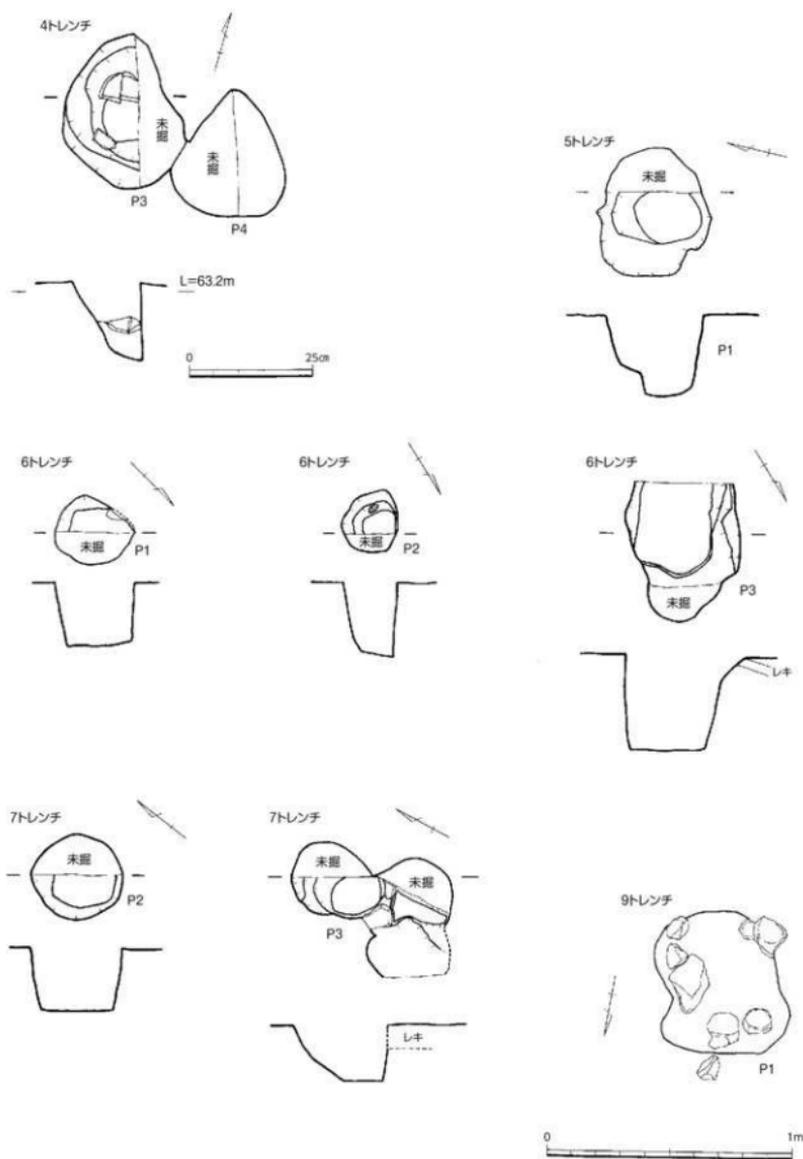
256は土師器である。外内面ハケナデで調整。薄い器壁で口縁部は直行する。



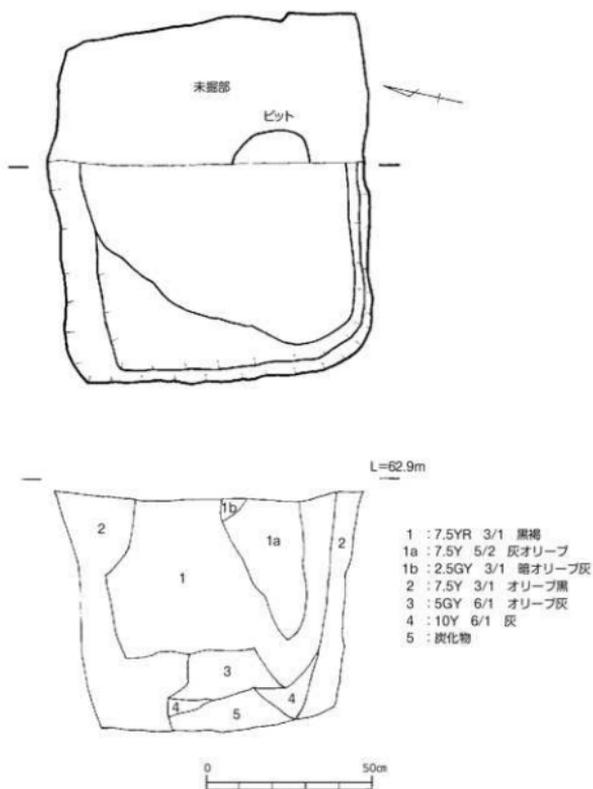
第45図 蔵之城跡 遺構検出図



第46図 蔵之城跡 トレンチ 遺構検出状況及び地盤上面遺物出土状況



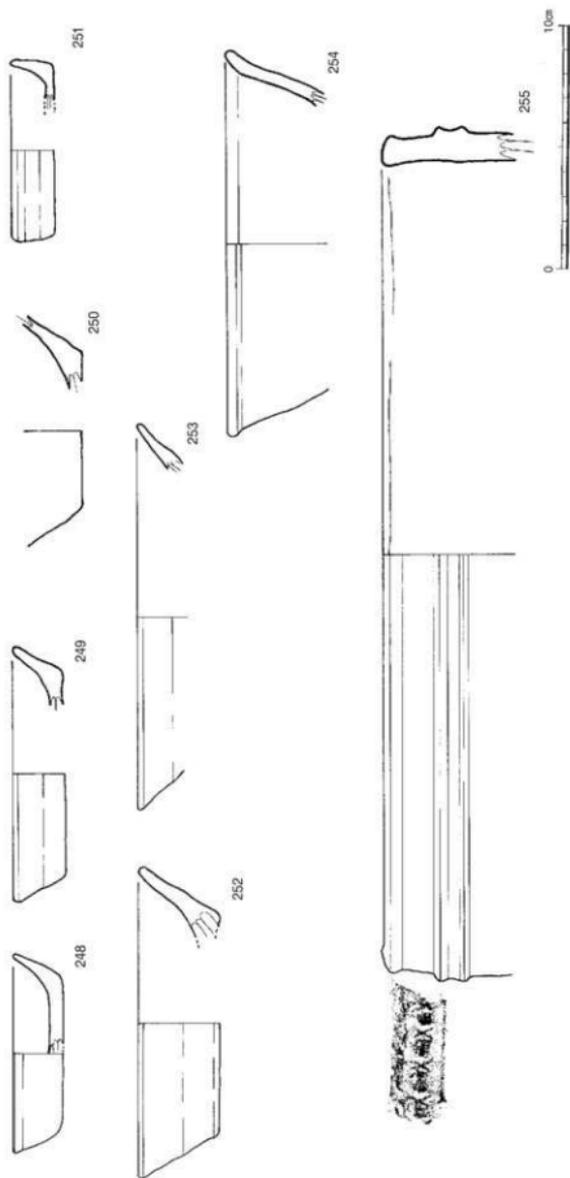
第47図 蔵之城跡 ビット平面図・断面横断面図



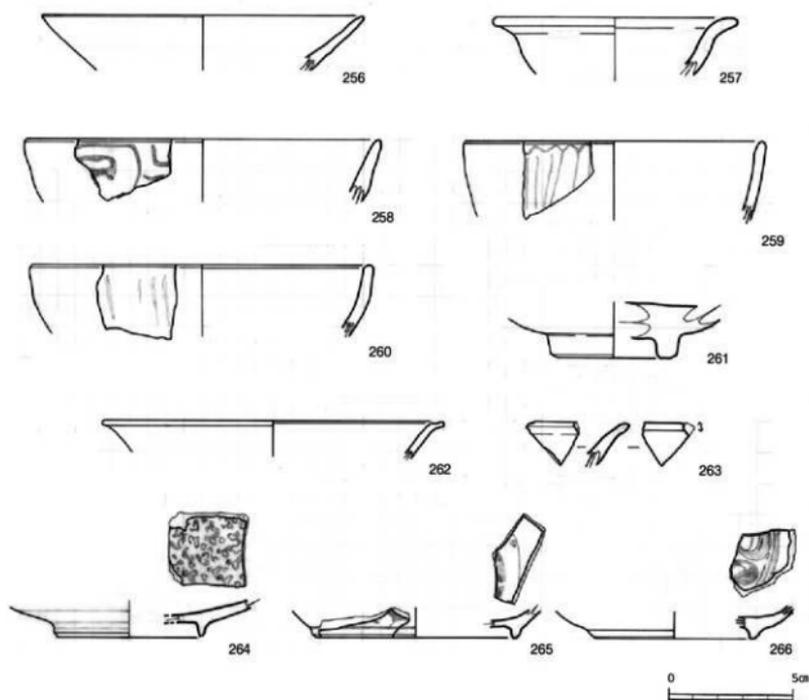
第48図 蔵之城跡 8トレンチ土坑半掘状況及び土層断面図

第17表 蔵之城跡トレンチ遺構計測表

挿図	調査区	遺構	計測値(単位:cm)			形状			遺物・備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
47	4T	P1	25	21	25	隅丸方形	平坦	凹筒	半掘, 埋土1層
	4T	P2	37	30	7	隅丸方形	平坦	逆台形	半掘, 埋土1層
	4T	P3	32	25	30	隅丸方形	やや斜面	逆台形	半掘, 埋土1層, 礫1, 青磁片口縁部2(同一)
	4T	P4	26	23	30	隅丸三角形	やや斜面	逆台形	半掘, 埋土1層
	5T	P1	52	46	33	長円形	平坦	凹筒	半掘, 埋土1層
	6T(西)	P1	31	28	26	円形	平坦	凹筒	半掘, 埋土1層, 礫1
	6T(西)	P2	26	21	30	円形	やや斜面	逆台形	半掘, 埋土1層, 礫1
	6T(西)	P3	(53)	(45)	40	隅丸方形	平坦	凹筒	半掘, 埋土1層, 土師器小片2, 柱抜取穴
	7T	P1	(38)	(23)	-	(円形)	-	-	未掘
	7T	P2	37	35	26	円形	平坦	凹筒	半掘, 埋土1層
48	8T	P3	79	24	33	円形	平坦	逆台形	半掘, 埋土1層, 礫2, 柱抜取穴
	7T	P4	(38)	(30)	-	(円形)	-	-	未掘
	8T	SK1	110	94	70	方形	平坦	逆台形	半掘, 土師器片, 青磁
	47	9T	P1	60	45	-	隅丸方形	-	-



第49図 戴之城跡遺構出土遺物（土師器，青磁，瓦質器）



第50図 蔵之城跡 表層～包含層 出土遺物（土師器、青磁、白磁、染付）

257～261 は青磁である。257 はくすんだ緑釉で微細な貫入がある。258 はくすんだ緑釉で貫入は見られない。雷文帯を持つ。259 はくすんだ緑釉で貫入は大きい。退化した鎗蓮弁を持つ。260 はくすんだ緑釉で貫入は見られない。退化した鎗蓮弁を持つ。261 はくすんだ緑釉で貫入が少し入る。高台内面は無釉で畳付は輪状に削られる。

262、263 は白磁である。262 は強く外反する薄い口縁部である。263 は口禿げの口縁部である。

264～266 は染付である。264 は畳付が削り取られ細く内湾する。265 は畳付が輪状に削り取られる。高台内面は無釉。266 は畳付が削り取られる。

第18表 蔵之城跡出土遺物観察表

棟号	レ/7外 番号	出土 区	出土層	遺物 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴
							口径	高さ	底径	
49	248	8T	土坑	一括	土師器	小皿	4.5	2.0	3.0	糸切底
	249	8T	土坑	一括	土師器	小皿	5.2	2.1	4.0	糸切底、胎土きめ細かい
	250	8T	土坑	一括	土師器	皿?	-	(2.2)	3.0	切離法不明、外面スス付着
	251	8T	土坑	一括	土師器	小皿	3.5	1.8	3.5	切離法不明
	252	8T	土坑	一括	土師器	坏	6.3	3.3	4.3	糸切底、白系肌色、軟質
	253	8T	土坑	一括	土師器	坏?	7.9	(1.9)	-	白縁部
	254	4T	P3	一括	青磁	鉢	8.0	(4.1)	-	龍泉窯系、15c初期
	255	2T	溝1	一括	瓦質器	鉢	16.9	(5.4)	-	奈良火鉢、胎土砂粒目立つ
	256	3T	I	一括	土師器	皿?	6.5	(2.4)	-	
50	257	8T	I	一括	青磁	瓶類?	5.0	(2.6)	-	龍泉窯系
	258	9T	表	一括	青磁	碗	7.1	(2.6)	-	龍泉窯系、15c初
	259	9T	表	一括	青磁	碗	6.0	(3.3)	-	龍泉窯系、15c後期
	260	5T	I	一括	青磁	鉢	6.9	(2.9)	-	龍泉窯系、16c
	261	3T	表	一括	青磁	鉢	-	(2.3)	2.6	龍泉窯系?、15c
	262	2T	表	一括	白磁	鉢	7.0	(1.6)	-	
	263	3T	I	一括	白磁	碗	-	(1.7)	-	13c末~14c初
	264	1T	表	一括	染付	碗	-	(1.5)	3.0	15~16c
	265	6T	I	一括	染付	皿・碗類	-	(1.1)	4.0	15~16c
	266	3T	表	一括	染付	皿	-	(1.1)	3.2	15~16c

第4章 自然科学分析

亀井山城跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 自然科学分析の概要

亀井山城跡の発掘調査では、曲輪1（本城跡）の第10トレンチで炉跡、曲輪2（蔵城跡）の第3トレンチで焼土土坑、第8トレンチで方形土坑などの遺構が検出された。ここでは、これらの遺構の年代や性格および当時の周囲の植生や環境を把握する目的で、放射性炭素年代測定、樹種同定、リン・カルシウム分析、花粉・寄生虫卵分析を行った。分析試料の詳細については、下記の各分析項目ごとに示した。

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

試料No.	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	曲輪1, 第10トレンチ, 炉跡土坑	炭化物	超音波洗浄, 酸-フッ素-酸処理	AMS
No.2	曲輪1, 第10トレンチ, 炉跡土坑	炭化物	超音波洗浄, 酸-フッ素-酸処理	AMS
No.3	曲輪2, 第3トレンチ, 焼土土坑	炭化物	超音波洗浄, 酸-フッ素-酸処理	AMS
No.4	曲輪2, 第3トレンチ, 焼土土坑	炭化物	超音波洗浄, 酸-フッ素-酸処理	AMS
No.5	曲輪2, 第8トレンチ, 方形土坑底面奥部	炭化物	超音波洗浄, 酸-フッ素-酸処理	AMS
No.6	曲輪2, 第8トレンチ, 方形土坑底面前部	炭化物	超音波洗浄, 酸-フッ素-酸処理	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。統計誤差 (\pm) は 1σ (シグマ) (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ (シグマ) (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 では 470 ± 20 年 BP (2σ の暦年代で AD 1415~1450 年)、No. 2 では 610 ± 20 年 BP (AD 1290~1400 年)、No. 3 では 330 ± 15 年 BP (AD 1480~1640 年)、No. 4 では 330 ± 20 年 BP (AD 1480~1640 年)、No. 5 では 545 ± 20 年 BP (AD 1320~1350, 1390~1430 年)、No. 6 では 675 ± 20 年 BP (AD 1270~1310, 1360~1390 年) の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。同成社, p. 301-322.

Ⅲ. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、曲輪2（蔵城跡）第8トレンチの方形土坑内から採取された炭化材4点である。

3. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）を作成
- 3) 落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

4. 結果

表2に同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 No.3・No.4 写真1・2

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

散孔材 diffuse-porous wood No.1 写真3

横断面：小型の道管散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～20本ぐらいのものが見られる。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で多列幅である。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、イスノキ、ヤブツバキ、ヤマモモなどの樹種に類似するが、炭化等による影響で残存性が悪く、微細な組織の観察が困難であることから、散孔材の同定にとどめた。

5. 考察

樹種同定の結果、曲輪2（蔵城跡）第8トレンチの方形土坑内から採取された炭化材4点は、コナラ属アカガシ亜属2点、散孔材2点と同定された。

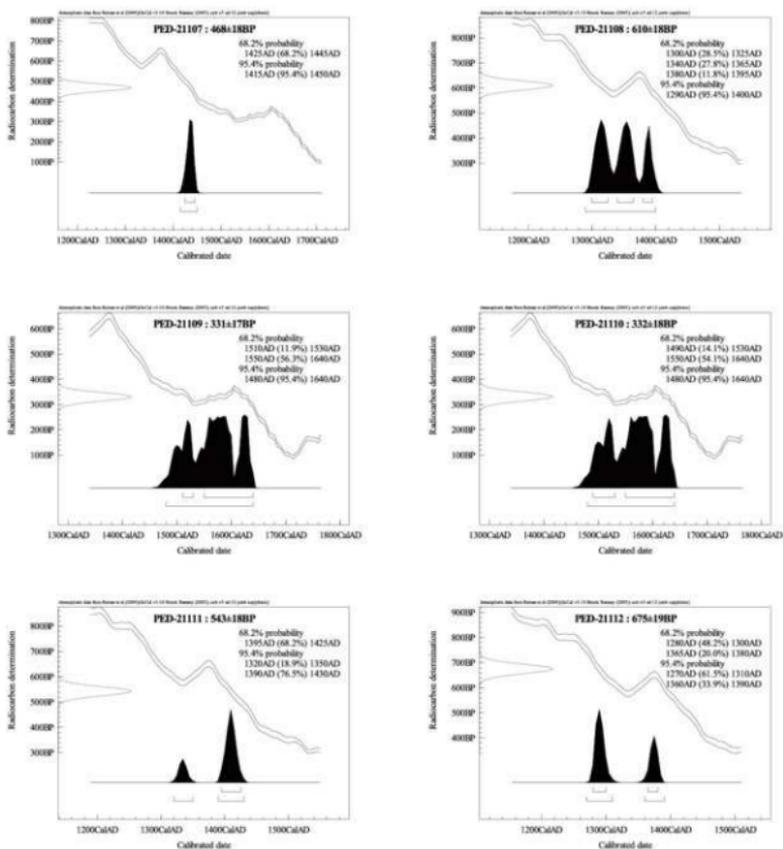


圖 1 曆年較正結果

表 1 放射性碳素年代測定結果

試品名	測定年份 PEZ	$\delta^{13}C$ (‰)	曆年較正前 年代(年BP)	氣泡代 年代(年BP)	曆年代 (曆年年代) : cal	
					1 σ = 68.2% (機率)	2 σ = 95.4% (機率)
1	21107	-06.64 ± 0.18	689 ± 18	470 ± 20	A01401-1443 (96.2%)	A01415-1450 (96.4%)
2	21108	-07.32 ± 0.18	810 ± 18	610 ± 20	A01340-1310 (26.8%)	A01290-1400 (96.4%)
					A01340-1365 (27.8%)	
					A01380-1395 (11.8%)	
3	21109	-08.64 ± 0.18	331 ± 17	330 ± 13	A01510-1530 (11.9%)	A01500-1640 (96.3%)
4	21110	-07.08 ± 0.18	322 ± 18	320 ± 20	A01480-1520 (14.7%)	A01480-1640 (96.4%)
					A01510-1640 (54.1%)	
5	21111	-06.98 ± 0.17	543 ± 18	540 ± 20	A01380-1420 (96.2%)	A01320-1350 (18.9%)
6	21112	-08.81 ± 0.18	675 ± 18	475 ± 20	A01280-1300 (48.2%)	A01270-1310 (61.5%)
					A01360-1390 (33.9%)	A01360-1390 (33.9%)

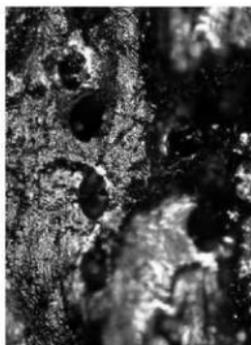
表2 亀井山城跡曲輪2第8トレンチ出土炭化材の樹種同定結果

試料	結果 (学名/和名)	
No.1	<i>diffuse-porous wood</i>	散孔材
No.2	<i>diffuse-porous wood</i>	散孔材
No.3	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
No.4	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属

コナラ属アカガシ亜属は、イチイガシ、アラカシなどのカシ類であり、温暖な温帯下部の暖温帯照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。散孔材としたものは、残存性が悪く種類の特定には至らなかったが、イスノキ、ヤブツバキ、ヤマモモなどの可能性があり、コナラ属アカガシ亜属も含めて暖温帯に分布する広葉樹と考えられる。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

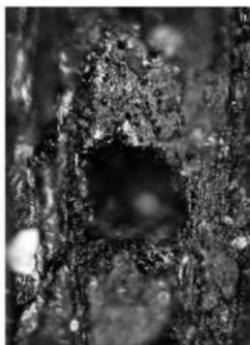
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造。文永堂出版, 290p.
- 島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣, 296p.
- 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会, 242p.



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

1. No.3 コナラ属アカガシ亜属



横断面 : 0.4mm

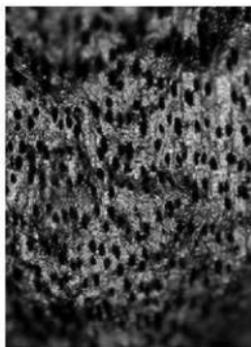


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

2. No.4 コナラ属アカガシ亜属



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

3. No.1 散孔材

IV. リン・カルシウム分析

1. はじめに

土壌に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。人骨など動物の骨はリン酸カルシウムが主成分であるが、貝殻や石灰石は炭酸カルシウムが主成分であり、リンはほとんど含まれていない。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壌中における保存性が高い(竹迫、1993)。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体(人骨など)の確認および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2. 試料

分析試料は、曲輪2(蔵城跡)第8トレンチの方形土坑の埋土下部(底面から15cm)から採取されたNo.1、および比較試料として遺構外(地盤から10cm)から採取されたNo.2の計2点である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置(XGT-5000Type II)を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法(FP法)による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料を粉碎して塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力20t/cm²でプレスして錠剤試料を作成
- 3) 測定時間500秒、照射径100μm、電圧50kV、試料室内真空の条件で測定

今回の分析では、まず元素マッピング分析による元素の分布図からリン(P)の輝度の高い箇所を選び、各試料ごとに5ポイント(a~e)についてポイント分析を行った。

4. 分析結果

表3に蛍光X線分析結果、図2にリン(P₂O₅)とカルシウム(CaO)の含量、写真図版に元素マッピング図とポイント分析の箇所を示す。定量分析結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記した。

5. 考察

一般に、未耕作地の土壌中におけるリン酸含量は0.5%以下であり、耕作地では1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料(遺物・遺構外の試料)との対比を行う必要がある。

分析の結果、No.1(土坑の埋土下部)ではリン(P₂O₅)の含量が1.3~4.4%であり、No.2(遺構外の比較試料)の0.2~0.4%と比較して明らかに高い値である。このうち、リンの含量が4.4%と最も高いポイントdでは、カルシウム(CaO)の含量が7.6%と高い値であり、リンに対するカルシウムの割合(CaO/P₂O₅)は約1.7である。人骨などの動物の骨は、主成分がリン酸カルシウムであり、リンに対するカルシウムの割合は約2.0で、ポイントdはこの値に近い。なお、No.1のその他のポイントでは、カルシウムの含量が0.2~2.4%であり、リンに対するカルシウムの割合は低くなっている。カ

ルシウムは一般に溶解性が高いことから（竹迫、1993）、土壌中で拡散・移動した可能性も考えられる。

以上のことから、曲輪2（蔵城跡）第8トレンチの方形土坑については、埋土下部に人骨などの動物骨が存在していた可能性が考えられる。なお、墓遺構や貯蔵穴の分析では、リン酸やカルシウムの分布が平面的および層位的に大きく偏る傾向があることから、生物遺体等が存在したと思われる部分を中心に、より多くの試料について検討を行うことが望まれる。

文献

竹迫 敏（1993）リン分析法。第四紀試料分析法2，研究対象別分析法。日本第四紀学会編，東京大学出版会，p. 38-45。

藤根久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析。日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，p. 108-109。

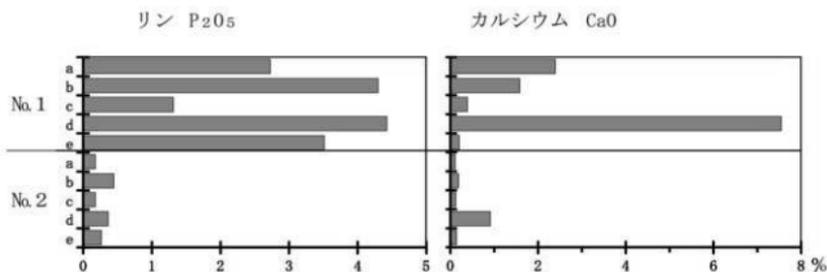


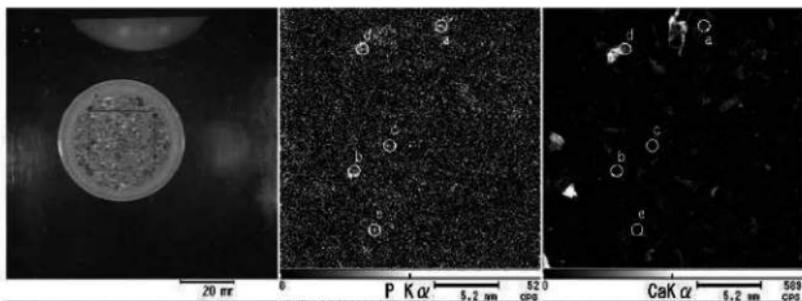
図2 亀井山城跡曲輪2第8トレンチにおけるリン・カルシウム含量

表3 亀井山城跡曲輪2第8トレンチにおける蛍光X線分析結果

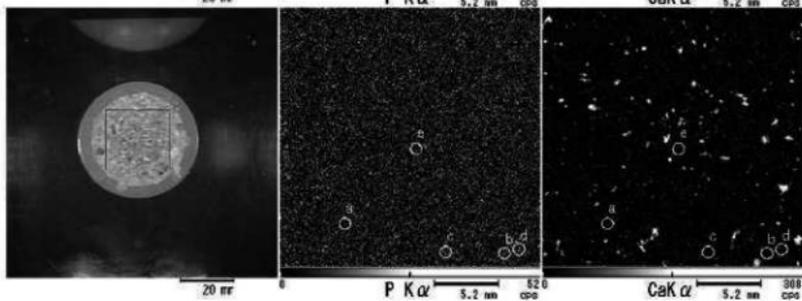
単位：wt%

試料No.	#	試料#	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
1	a		0.64	18.89	48.89	2.73	0.49	0.36	2.40	0.52	0.84	24.10	0.02	0.03	0.04	0.04
	b		0.67	18.63	52.12	4.30	0.48	0.68	1.59	0.83	2.58	18.03	0.02	0.03	0.01	0.03
	c		0.87	19.64	72.45	1.32	0.21	1.29	0.40	0.49	0.12	3.19	0.01	0.01	0.00	0.01
	d		0.00	14.95	24.02	4.43	0.50	0.13	7.55	0.16	4.04	44.03	0.02	0.09	0.03	0.05
	e		0.57	26.29	54.21	3.52	0.34	0.45	0.21	0.76	0.04	13.51	0.02	0.01	0.01	0.04
2	a		0.83	19.02	65.85	0.18	0.30	1.95	0.12	1.12	0.57	9.99	0.01	0.00	0.00	0.05
	b		1.14	17.86	69.73	0.45	0.25	2.20	0.20	1.01	0.18	6.91	0.02	0.01	0.01	0.03
	c		0.82	21.50	67.37	0.18	0.26	1.86	0.13	0.88	0.26	6.70	0.01	0.01	0.00	0.02
	d		0.80	18.86	66.12	0.37	0.23	2.07	0.92	1.05	0.62	8.81	0.02	0.01	0.01	0.11
	e		0.90	15.63	73.32	0.27	0.30	1.67	0.15	1.33	0.21	7.09	0.01	0.00	0.00	0.01

No. 1



No. 2



プレス試料と元素マッピング図およびポイント分析箇所

V. 花粉・寄生虫卵分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。また、同一試料で寄生虫卵分析を行うことで、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいは便所遺構を確認することも可能である。花粉や寄生虫卵などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、曲輪2（蔵城跡）第8トレンチの方形土坑の埋土下部から採取されたNo.1（底面から30cm）とNo.2（底面から15cm）の計2点である。

3. 方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2～3度混和）
- 5) 水洗後サンプルを2分
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入し標本を作製
- 8) 検鏡・計数

基本的にアセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 分析結果

(1) 花粉分析

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉1、草本花粉1、シダ植物胞子1形態の計3分類群である。分析結果を表4に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

スギ

〔草本花粉〕

イネ科

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

№2 (底面から 15cm) では、樹木花粉のスギ、草本花粉のイネ科、シダ植物単条溝胞子が検出されたが、いずれもわずかである。№1 (底面から 30cm) では、花粉やシダ植物胞子は検出されなかった。

(2) 寄生虫卵分析

寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。

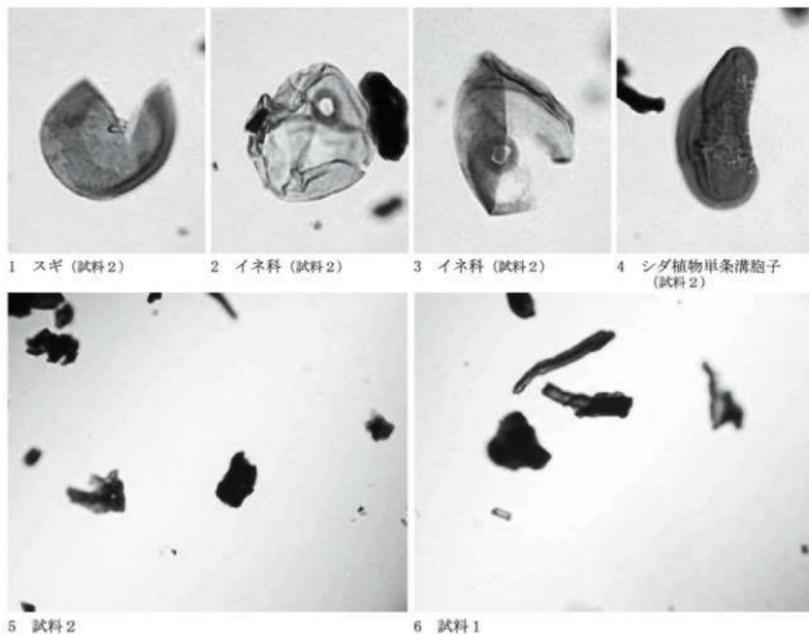
5. 考察

花粉分析の結果、方形土坑の埋土下部の№2 (底面から 15cm) では、わずかながら樹木花粉のスギ、草本花粉のイネ科、シダ植物単条溝胞子が検出されたが、№1 (底面から 30cm) では花粉やシダ植物胞子は検出されなかった。また、寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。

花粉や寄生虫卵が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下でこれらの有機質遺体が分解されたことなどが想定されるが、寄生虫卵については当初から含まれていなかった可能性も考えられる。

文献

- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物。医動物学。新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京 7 条 1 坊—。奈良国立文化財研究所, p. 14-15.
- 金原正明 (1999) 寄生虫。考古学と動物学。考古学と自然科学, 2, 同成社, p. 151-158.
- 金原正明 (2004) 寄生虫卵分析。環境考古学ハンドブック。朝倉書店, p. 419-429.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
- 中村純 (1967) 花粉分析。古今書院, p. 82-110.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.



1 スギ (試料2)

2 イネ科 (試料2)

3 イネ科 (試料2)

4 シダ植物単条溝孢子 (試料2)

5 試料2

6 試料1

1-4 — 10 μ m、5、6 — 10 μ m

表4 亀井山城跡曲輪2第8トレンチにおける花粉・寄生虫卵分析結果

分類群		1	2
学名	和名	底面上30cm	底面上15cm
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科		2
Fern spore	シダ植物孢子		
Monolate type spore	単条溝孢子		1
Arboreal pollen	樹木花粉		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Nonarboreal pollen	草本花粉		2
Total pollen	花粉総数	0	3
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度		1.4 ×10
Unknown pollen	未同定花粉		1
Fern spore	シダ植物孢子		1

VI. まとめ

放射性炭素年代測定の結果、曲輪1第10トレンチの炉跡土坑の2試料では、AD 1415～1450年とAD 1290～1400年、曲輪2第3トレンチの焼土土坑の2試料ではAD 1480～1640年、曲輪2第8トレンチの方形土坑底面の2試料ではAD 1320～1430年とAD 1270～1390年の年代値（暦年代）が得られた。

曲輪2第8トレンチの方形土坑については、炭化材の樹種同定でコナラ属アカガシ亜属や散孔材（イスノキ、ヤブツバキ、ヤマモモなどの可能性あり）が認められた。また、リン・カルシウム分析では、方形土坑の埋土下部でリンおよびカルシウムが高い値を示し、その比率などから人骨などの動物骨が存在していた可能性が認められた。花粉・寄生虫卵分析では、寄生虫卵は検出されず、花粉もほとんど検出されなかった。花粉や寄生虫卵が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下でこれらの有機質遺体が分解されたことなどが想定されるが、寄生虫卵については当初から含まれていなかった可能性も考えられる。

はじめに

亀井山城（鹿児島県出水市野田町上名に所在）は、標高 65 メートルを最高所とする 15 万平方メートル、土塁囲みの曲輪を核に四方に空堀を巡らせ、大小 14 の曲輪からなるとされている。今回、亀井山城跡から出土した土師器の編年および亀井山城の存続時期に関する基礎資料を得るために年代測定を実施した。

1. 試料

資料は、本城跡曲輪 1 第 16 トレンチ土師器集積遺構の山城造成土第 2 層下位で出土した炭化物である。土師器は、出土状況から埋納の痕跡や規則性が認められておらず、一度に破棄されたか、一時的に置かれたと推定されている。分析の対象とした炭化物は、土師器の個体間に挟まれる状態で出土しており、土師器と同時期と推測されており、土壌中に炭化物が混じる状態であった。なお、試料は全て分析に使用した。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着していたため、ピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、再び塩酸(HCl)によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mm孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

なお、暦年校正とは大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を校正することである。暦年校正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年校正プログラムや暦年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果

同位体効果による補正を行った年代測定結果を表1、暦年較正結果を表2に示す。補正年代は、集石土坑出土炭化材が 470 ± 30 BPを示す。また、測定誤差を σ として計算させた暦年較正結果は、集石土坑出土炭化材がcalAD1,429~1,445である。

以上の結果、土師器の間に挟まれるように出土した炭化物は、中世頃の時期に属すると考えられる。今後、複数点について年代測定結果を実施し、統計的に解釈していくことが必要と思われる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料	地点	遺構	層位	樹種	処理方法	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
14C試料	本城跡曲輪 1第16トレンチ	土師器 集積遺構	山城造成土 2層下位	炭化物	AaA	470 ± 30	-27.04 ± 0.43	500 ± 20	IAAA-100998

1)処理方法は、酸処理-アルカリ処理-酸処理(AAA処理)で、アルカリ濃度が1N未満の場合はAaAと表記している。

2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

4)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	地点	遺構	層位	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
					σ	2σ	cal AD	cal BP		
14C試料	本城跡曲輪 1第16トレンチ	土師器 集積遺構	山城造成土 2層下位	465 ± 24	σ	cal AD 1429 - cal AD 1445	cal BP 521 - 505	1,000	IAAA-100998	
				2σ	cal AD 1416 - cal AD 1452	cal BP 534 - 498	1,000			

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV8.0(Copyright 1988-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第5章 まとめ

第1節 遺構について

掘立柱建物SB1及び柱穴跡群

本城跡の20トレンチで検出された柱穴跡群については、トレンチ内において構成・組合せを検討したが、完全な建物の復元には至らなかった。全柱穴跡は段掘り、一部は半掘を行ったうえ、同規模と思われる柱穴跡の組み合わせを検討し、掘立柱建物跡とした組合せがSB1である。

SB1P1からSB1P8は、ほぼ柱穴跡間の距離が一間で他の柱穴跡よりはやや規模が大きいものである。SB1P9とSB1P10についてはこれらの柱穴跡と同規模であり、位置的にもSB1P4間とSB1P5に、SB1P6間とSB1P7間にそれぞれ並ぶ配置であるが、間隔があわず他の建物跡の一部とも考えられる。また、P35、P36、P94も柱抜き取りの跡が見られ、やや規模も大きく若干南北方向の軸のズレはあるものの、もともとはSB1と同一の建物跡の可能性も考えられる。

本城跡で検出された柱穴跡群は、建物復元こそ困難であったが、建物が何度も建て替えられている様子は判明した。そしてそれは、本城跡の中央部から東側にかけて顕著に見られた。

大型土坑

本城跡4トレンチの大型土坑については、平面の規模・形状はほぼ同規格であるものの、それぞれの配置には関連が看取できず、段掘りのみの調査であるため、それぞれの性格までは特定できていない。SK5でのみ炭化物が認められた以外は礫を伴うくらいである。また、この土坑群は石塁基壇状地形の中央部に配置され、隣接する20トレンチの柱穴跡群（掘立柱建物施設）との関連が深いと考えられるものの、直接的な関連は不明である。

土師器集積遺構

本城跡16トレンチの土師器集積遺構については、土師器の年代と共存した炭化物の年代測定から15世紀の前半から中期頃のものと思われる。遺構の目的は不明なところが多いが、土師器自体には損傷は見られないため、不要となったものを廃棄したというよりは、何らかの政治的、あるいは指導者等による求心的なイベントに使用された後、一括に廃棄されたものと考えたい。

大型方形土坑

蔵之城跡8トレンチの大型方形土坑については、科学分析では動物遺体が存在した可能性を示す結果が出ている。土坑底部出土の樹木の炭化物が何を意味するかは不明で、半掘した範囲内で結論付けるには材料に乏しいが、火気を使用した調理的機能を持つ土坑か、埋葬遺構と位置づけたい。

遺構のまとめ

本城跡の15・16トレンチ以外と、蔵之城跡では遺構検出面は全てが地盤上面であり、1層とした造成土中には中世遺物が大半を占めるが、時期は12世紀後半から16世紀中頃までが混在して出土し、若干近世以降のものも見られる状況である。両城跡では造成や耕作活動が後世に大きく働き、遺構形成面の土層もこのとき消失したと見られ、各遺構についての詳細な時期特定は困難であった。

しかしながら、本城跡の各トレンチの遺構検出状況から、大まかに、曲輪内での機能的性格の様子は窺い知ることができると考える。中央部及び東側では掘立柱建物が繰り返し建てられ、西側で

は本城に必要な機材等を作るような作業場、工房の場所があり、南側の土塁下辺りでは貯蔵したものを炊くような施設の存在があるのではないだろうか。蔵之城跡では、その名の由来を示す遺構遺物の検出に努めたが、トレンチ設定の制限もあり、「蔵跡」の発見は出来なかった。後世の城跡の呼称には俗説等も多く、一概にここに「蔵」的な機能を持つ施設があったのかは不明である。

両城跡とも遺構の掘削は必要最小限度に止めて現地保存しており、今後は本城跡以外の、または近隣地域の中世山城跡などの発掘調査により類例を待ち、検討したいと考える。

第2節 遺物について

土師器皿・坏の分類[第51図～第53図]

対象としたのは本城跡16トレンチの土師器集積遺構の一括資料と、この遺構以外で出土した土師器で、いずれも口縁部から底部が残存しているものである。これらを法量差により器高が2.7cm以下のものを皿、器高が2.8cm以上のものを坏と分類することができた。第53図の法量差相関図グラフで図示した中、皿C類とした一部に坏のグループに入るものがあるが、口径と底径の比からここでは皿に分類している。

これらを器種別に体部の形態的特徴から以下により細分類した。

皿A類：薄い器壁で体部は直線的に移行し、口縁部が先細りし、体部は丸みを帯びるものもある。

皿B類：底部からの体部立ち上がりは直線的だが端部に飛び出しを持つものもある。体部は直線的に外傾し口縁部はやや肥厚する。

皿C類：厚い底部と腰部を持ち、体部立ち上がり端部に飛び出しを持つものもある。口縁部は体部よりは細くなるもの。

皿D類：厚い底部で、体部はやや丸みを持って直線的に立ち上がり外反する。口縁部は先細る。

皿E類：厚めの器壁で、体部立ち上がりは直線的に移行し外反する。口縁部は肥厚する。

皿F類：体部は直線的に外傾し、口縁部に変化点を持つもの。

皿G類：体部は直線的に外傾し、腰部に変化点を持つもの。

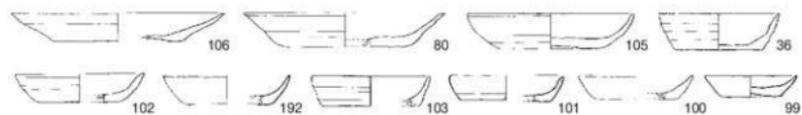
坏A類：体部は直線的に立ち上がり、直線的に外傾するもの。口縁部に変換点を持つものもある。

坏B類：底部から体部はやや立ち上がり腰部がやや膨らむ。口縁部に変換点を持つものもある。

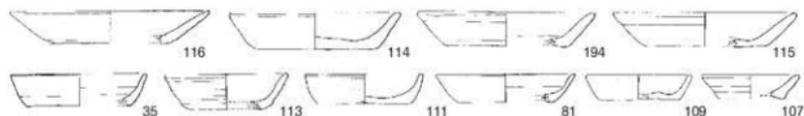
土師器の年代

16トレンチの土師器集積遺構で出土した土師器は31～66で、分類したものでは、皿E類は該当せず、皿A・B類も少ない。中心は皿C・D・F類で、坏では坏A類が多い。また、皿のF類と坏A類の多くと坏B類の一部には口縁部に変化点(稜)を持つものが特徴的に見られる。この特徴のものは16トレンチの土師器集積以外の遺構出土のものにも若干であるが見られる。また一方、土師器集積遺構で相伴した炭化物を年代測定した結果、15世紀前半から中期頃までの時期を示した。

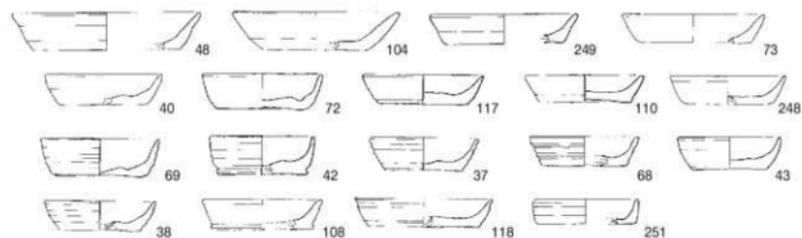
他遺跡での出土例を見てみると、本市に隣接する薩摩郡さつま町の虎居城跡では、分類した土師器のうち、本遺跡では見られない、または少ないものとして挙げられるのが、坏A・坏B類と思われ、それ以外はおぼろげに似た土師器と考えられる。また、南九州市の知覧城跡では、皿F類が、本遺跡の皿F類と坏A類に多く見られる口縁部の変化点(稜)の特徴と相似している。これは、虎居城跡の坏D類と皿F類の中にもいくつか見られる。ただし、知覧城跡の皿F類と、虎居城跡の坏D



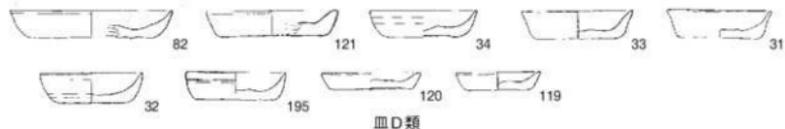
皿A類



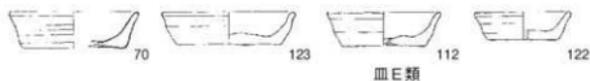
皿B類



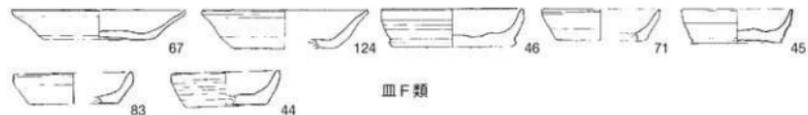
皿C類



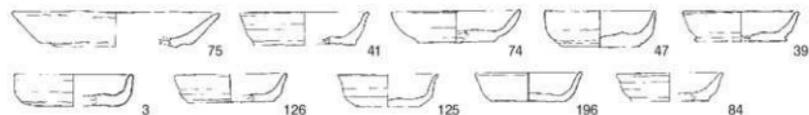
皿D類



皿E類



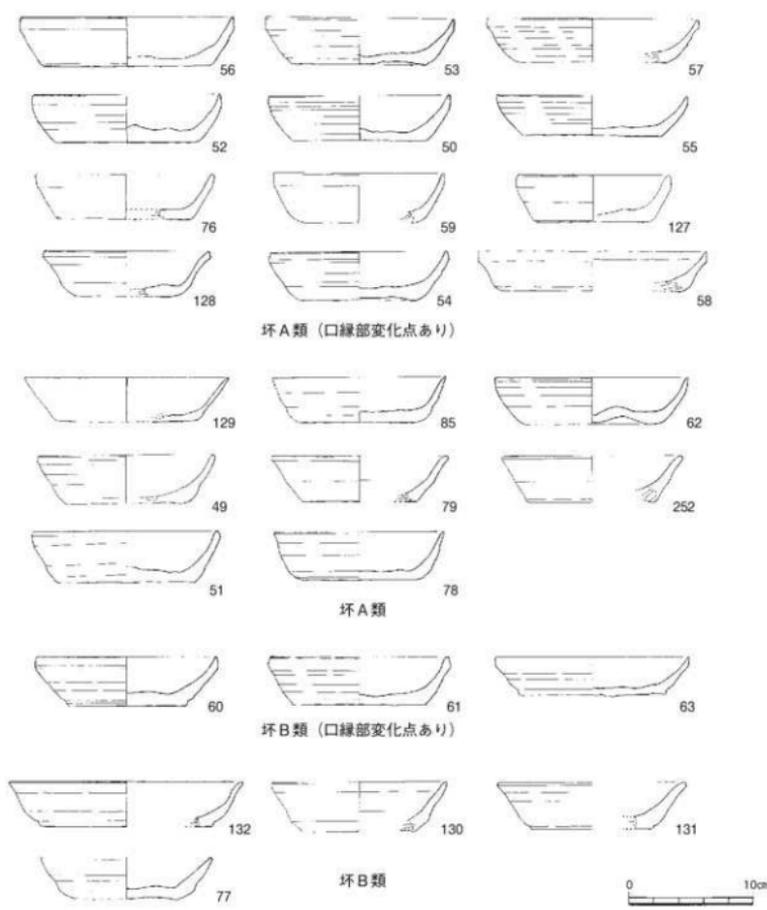
皿F類



皿G類

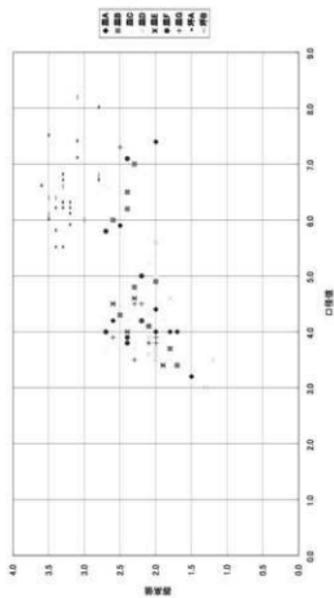


第51図 土師器分類図(1)

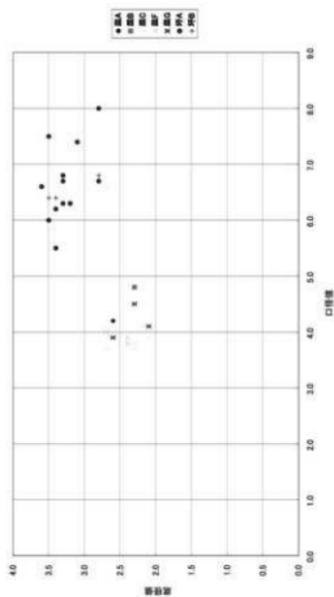


第52図 土師器分類図(2)

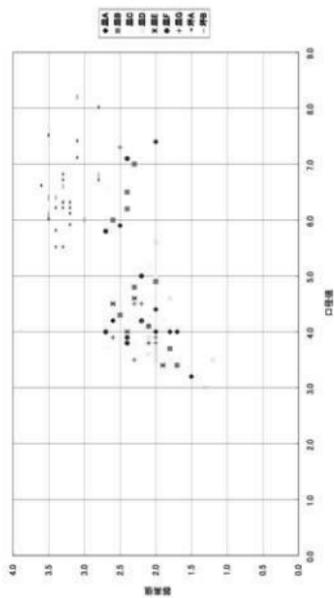
法量差(口住・巻高)相関グラフ



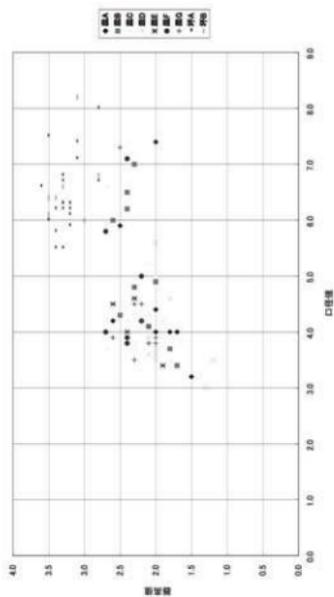
法量差(口住・巻高)相関グラフ [前期検査温度時のみ]



法量差(口住・巻高)相関グラフ



法量差(口住・巻高)相関グラフ



第53図 法量差 相関グラフ

類は、変化した口縁部はやや外傾するが、本遺跡のものは直立かやや内傾する傾向のものが多い。虎居城跡では、土師器の年代を伴った青磁と青花から15～16世紀相当としている。

これらのことから本遺跡での16トレンチ出土の土師器年代は、15世紀中頃と位置付けたい。

他遺跡との比較による遺物のまとめ

本城跡では、古いものでは12世紀後半の同安窯系青磁や玉縁口縁白磁などがあるがごく少量である。13世紀の樺番城焼や須恵質陶器大甕類、摺鉢などが見られるが、種類が限定的な傾向である。14～15世紀にかけて若干遺物量、種類が増え、15世紀以降では、主に輸入陶磁器の青磁、染付類を中心に多種類になる傾向が見られる。蔵之城跡ではこの時期のものが多く出土している。そして、16世紀以降のものはまた減少する傾向にある。

第3節 まとめ

発掘して検出された各遺構からは年代・時期を特定することは困難であった。ただし、現存する山城遺構については、空堀、虎口、切岸など戦国時代後期の様相を示すものが良好に残されている。

土師器集積遺構及び16トレンチの土師器年代を15世紀中頃とすると、これ以外の遺物との関連も割り切り整合性を持って考えられるのではないかと。本城跡及び蔵之城跡の遺物はこの頃をピークに輸入・製作、使用されたものと考えられる。これはこの時期が亀井山城の最盛期であることを示すものとする。それ以前では、13世紀に大型甕や摺鉢を多用する時期や機能が一部であるが、それ以前については遺物量が圧倒的に少なく、山城としての機能があったかは不明である。

これらについて、三木靖氏は、「本城跡がその曲輪配置状況と発掘調査の内容から間違いなく亀井山城の築城時から最期まで機能的に中心部で、時代が進むにつれ、特に戦国時代後期には周囲の曲輪や防御施設を整備し、より堅固な山城となっていく。土師器などの出土遺物からは、ここでは日常的に人々が防御・戦闘体制などの準備を怠ることなく生活し、ハレの場などで使用していたような様子が窺えるのではないかと。亀井山城が戦国時代後期に興った記録は見られず、発掘調査でもそれらを示すような遺物は確認されていないことから、亀井山城は堅固な防御体制をもつことになり、結果的に、亀井山城が戦いの場となることを免れたのでなかろうか」との見解を示された。

16世紀中期に城主が他所で謀殺されたことにより、亀井山城はその機能を消失するとされている。城主が本拠地外の他所での謀殺は、本城を攻め落とすことの困難さを裏付ける要因のひとつなのかもしれない。

発掘調査と現存する亀井山城跡からは、その初現期や中間期については明らかにすることは出来なかったが、戦国時代後期の日常の姿を垣間見ることは出来たのではないかと。

【引用・参考文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター「虎居城跡」2011鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(162)

知覧町教育委員会「知覧城跡(三)」2006知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会 pp. 55-70

小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会 pp. 71-87

中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」1995 真福社

「世界陶磁全集 2、3、7、12、13、14」1980 小学館

「出水郷土誌」2004 出水郷土誌編集委員会 鹿児島県出水市

「野田町郷土誌」2003 野田町郷土誌編さん委員会 鹿児島県出水郡野田町

第Ⅱ部 分布調査

1 調査の経緯

平成 17 年度までに旧出水市では、ほぼ市内全域の遺跡分布調査が終了していた。平成 18 年 3 月の合併に伴い、旧高尾野町と旧野田町では遺跡分布地図に遺跡分布の空白地帯があり、久しく両旧町管内では分布調査が行われていないことが判明したため、この空白地帯を中心に分布調査を実施することとなった。

分布調査は平成 19 年度から同 22 年度にかけて国及び県の補助を受け、市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査等のうちの一事業として実施した。なお、調査組織、体制等は第Ⅰ部第 1 章第 2 節に準じる。

調査員は出水市教育委員会生涯学習課主査 岩崎新輔である。作業員は以下の通り。

平成 19 年度 分布調査作業員 須賀良一、田下正廣、野間口三千男、福浜信夫

平成 20 年度 分布調査作業員 川口渉、田代貞次、田下正廣、福浜信夫

平成 21 年度 分布調査作業員 木原義次、迫田博志、西正弘、福浜信夫

平成 22 年度 分布調査作業員 川畑健治、北嶋善政、迫田博志、田代貞次

2 調査の方法

分布調査は市販の住宅地図を使用し、原則作業員 2 人 1 組で対象地点を踏査し、遺物を採集した際には調査員がその時代や種類を判断した。採集した遺物が遺跡の存在を示すようなものである場合には、その地点を中心に現地形を確認の上、地図上に遺跡範囲を記録した。また同時に、新発見遺跡は近景・遠景などの写真撮影も行った。

新発見遺跡の名称は、その遺跡範囲の小字名を地籍図等で調べ、遺物採集地点の小字名を遺跡名としたが、遺跡範囲が広く複数の小字が存在する場合は、遺跡範囲の中心地点の小字名を遺跡名とした。

なお、行政が行う発掘調査対象遺跡の時代は通常中世までであるが、出水市内には藩政期の武家屋敷群が出水地区と野田地区にあり、高尾野地区にも近世の竈跡が築かれたりしている事などから、この時期も大事であると考え、近世の時代を示す遺物も採集し、この時代も分布調査対象遺跡とした。

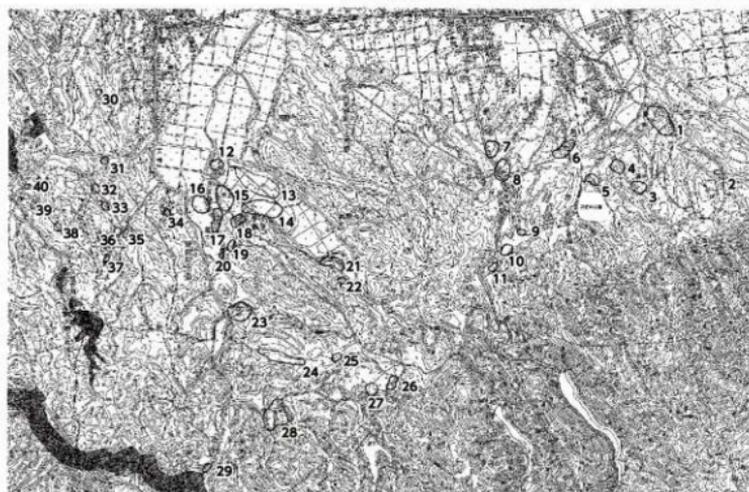
3 平成19年度の調査

[第54図、第19表]

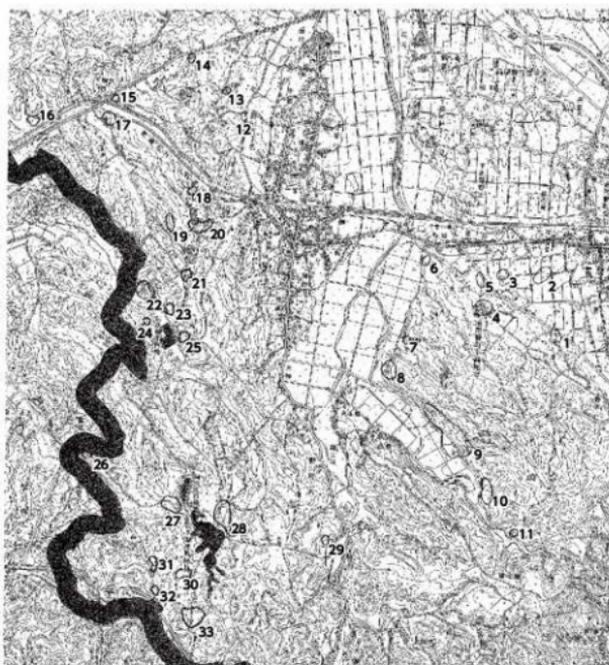
高尾野町大久保・柴引・下高尾野の各南部地区と、野田町上名南部地区を対象に実施した。合計40の遺跡が確認された。詳細は第53図並びに第20表の通りである。30番の城内貝塚は、亀井山城跡のひとつの曲輪の崖部分に一部が露出していた。二枚貝のみが看取できた。遺物等は確認できなかった。地元の話ではこの地点の道路工事の際に多量の貝殻が出土していたとのこと。

第19表 平成19年度新発見遺跡一覧

番号	遺跡名	住所	所在	遺物	時代
1	田平	野田	高尾野町大久保田平	骨角類、土器片、銅器、銅貨、銅鏡、古代土鏡、古銅器、銅貨、銅鏡	縄文、中世～近世
2	木下	野田	高尾野町大久保木下	土器片、銅貨、銅鏡	中世～近世
3	峠道	野田	高尾野町大久保峠道	縄文土器片、中世	縄文、中世
4	小豆野	野田	高尾野町大久保小豆野	土器片	縄文
5	高野	野田	高尾野町大久保高野	縄文土器片、銅貨、銅鏡、土器片	縄文、中世
6	西院	野田	高尾野町大久保西院	土器片、銅貨、銅鏡	中世～近世
7	中巻	野田	高尾野町柴引中巻	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、中世～近世
8	倉持	野田	高尾野町柴引倉持	土器片、銅貨、銅鏡	古代、中世～近世
9	遠矢	野田	高尾野町柴引遠矢	土器片、銅貨、銅鏡	古代、中世～近世
10	八久保	野田	高尾野町柴引八久保	土器片、銅貨、銅鏡	中世～近世
11	八久保	野田	高尾野町柴引八久保	土器片、銅貨、銅鏡	古代、近世
12	新木	野田	野田町上名新木	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、古代、近世
13	上早田	野田	野田町上名上早田	土器片、銅貨、銅鏡	古代、中世～近世
14	野角	野田	野田町上名野角	土器片、銅貨、銅鏡	古代、中世～近世
15	新田	野田	野田町上名新田	土器片、銅貨、銅鏡	古代、中世～近世
16	七枝	野田	野田町上名七枝	土器片、銅貨、銅鏡	中世～近世
17	龜土山	野田	野田町上名龜土山	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、古代、中世
18	竹林	野田	野田町上名竹林	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、古代、近世
19	大迫	野田	野田町上名大迫	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、中世～近世
20	大迫	野田	野田町上名大迫	土器片、銅貨、銅鏡	近世
21	上野	野田	野田町上名上野	土器片、銅貨、銅鏡	近世
22	上野	野田	野田町上名上野	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、中世～近世
23	野田小豆野	野田	野田町上名小豆野	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、古代、中世～近世
24	横山	野田	野田町上名横山	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、中世～近世
25	大迫	野田	野田町上名大迫	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、古代
26	大迫	野田	野田町上名大迫	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
27	大迫	野田	野田町上名大迫	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
28	特手	野田	野田町上名特手	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
29	大迫	野田	野田町上名大迫	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
30	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、中世
31	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、中世
32	石倉A	野田	野田町上名石倉	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
33	石倉B	野田	野田町上名石倉	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
34	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
35	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
36	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
37	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
38	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
39	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世
40	大久保	野田	野田町上名大久保	土器片、銅貨、銅鏡	縄文、近世



第54図 平成19年度 新発見遺跡 位置図 (縮尺5万分の1)



第55図 平成20年度 新発見遺跡 位置図 (縮尺5万分の1)

第20表 平成20年度新発見遺跡一覧

番号	遺跡名	市	町名	遺物	時代
1	徳長橋	堺市	高尾野町下高尾野字徳長橋	古墳時代土器、近世陶器	古墳、近世
2	道土	堺市	高尾野町下高尾野字道土	古土器	古墳
3	本道	堺市	高尾野町下高尾野字本道	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
4	木天原	堺市	高尾野町下高尾野字木天原	土器、古墳時代土器	古墳、近世
5	芝原	堺市	高尾野町下高尾野字芝原	土器、古墳時代土器	古墳、近世
6	下土原	堺市	高尾野町下高尾野字下土原	土器、古墳時代土器	古墳、近世
7	高尾野焼窯跡	堺市	高尾野町下高尾野字焼窯跡	大型陶器、陶器、窯跡	近世
8	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
9	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
10	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
11	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
12	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
13	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
14	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
15	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
16	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
17	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
18	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
19	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
20	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
21	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
22	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
23	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
24	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
25	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
26	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
27	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
28	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
29	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
30	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
31	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
32	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世
33	野田山	堺市	高尾野町下高尾野字野田山	土器、古墳時代土器	縄文、古墳、近世

4 平成20年度の調査
 [第55図、第20表]
 高尾野町下高尾野の南部地区と、野田町上名南部地区、西部地区と同町下名西部地区を対象に実施した。合計33の遺跡が確認された。詳細は第54図並びに第21表の通りである。7番の高尾野焼窯跡は、大型の陶器片や窯道具が採集され、地元を受け継がれる伝承とも符合する地点である。



第56図 平成21年度 新発見遺跡 位置図(1) (縮尺5万分の1)



第57図 平成21年度 新発見遺跡 位置図(2) (縮尺5万分の1)

第21表 平成21年度新発見遺跡一覧

番号	遺跡名	住所	所在	遺物	時代
1	鹿沼	736-1	高尾野町下木沢字鹿沼	燧石、骨、縄文土器土器、中世磁器、古瓦	縄文(早)、古墳、中世～古墳
2	東原	737-1-1	高尾野町下木沢字東原	土器、土器土器、古瓦	縄文、古墳、中世
3	西本城	737-2-1	高尾野町下木沢字西本城	縄文土器土器、古瓦	縄文、古墳～古代
4	西本城	738-1	高尾野町下木沢字西本城	縄文土器土器、古瓦	古墳、中世
5	西本城	738-2	高尾野町下木沢字西本城	土器、中世磁器、古瓦	古墳～中世
6	中野	738-3	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	古墳、中世
7	中野	738-4	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
8	中野	738-5	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
9	中野	738-6	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
10	中野	738-7	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
11	中野	738-8	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
12	中野	738-9	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
13	中野	738-10	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
14	中野	738-11	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
15	中野	738-12	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
16	中野	738-13	高尾野町上木沢字中野	土器、古瓦	縄文
17	京平丸	739-1	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
18	京平丸	739-2	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
19	京平丸	739-3	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
20	京平丸	739-4	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
21	京平丸	739-5	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
22	京平丸	739-6	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
23	京平丸	739-7	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
24	京平丸	739-8	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
25	京平丸	739-9	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世
26	京平丸	739-10	野田町下京平字京平丸	土器、古瓦	縄文、中世

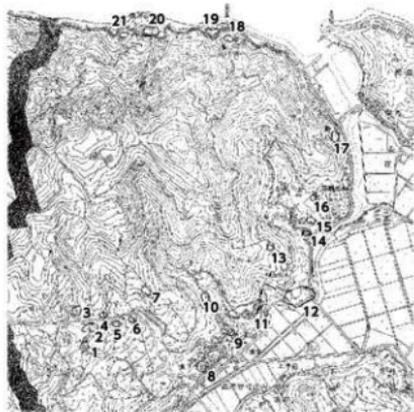
5 平成21年度の調査

[第56図、第57図、第21表]

高尾野町大久保北部地区と上水流域地区、下水流域地区、同町江内南部地区及び野田町下名北部地区を対象に実施した。合計26の遺跡が確認された。詳細は第55図、第56図並びに第22表の通りである。1～3番の各遺跡では縄文時代早期から、古墳時代、古代、中世、近世にかけての複合遺跡が確認された。

海岸に近い立地条件と合わせて今後の発掘調査の成果に期待したい遺跡群である。

野田町下名地区では、狭い範囲であるが、旧石器時代の遺物が採集された山口遺跡がある。野田町内には顕著な旧石器時代の遺跡はこれまで確認されておらず、周辺部や立地条件によってはまだ同時代の遺跡もあるのでないかと見られる。



第58図 平成22年度 新発見遺跡位置図(縮尺5万分の1)

6 平成22年度の調査[第58図、第22表]

高尾野町江内北部地区を対象に実施した。合計21の遺跡が確認された。詳細は第57図、第23表の通りである。

遺跡は山麓部や狭い台地の平坦部に多く確認された。

11番の江内上ノ原遺跡や、12番の柳ヶ水遺跡は山麓部の台地が飛び出した、広い平坦部という立地条件から、広範囲にわたり遺物が採集された。

高尾野町北部と野田町北西部にかけての遺跡からはチャート製の石器も多く採集されている。隣の阿久根市にはチャートの原産地があることから、このチャート製石器に関しては出水市以外の周辺地域の遺跡との関連が興味深いところである。

第22表 平成22年度新発見遺跡一覧

番号	遺跡名	市	所在法	遺物	時代
1	江内野原	江内野原	高尾野町江内野原	土器片、中世前期土器	古代～近世
2	江内山下	江内山下	高尾野町江内山下	古墳時代土器、中世前期土器、銅貨	古墳、中世～近世
3	蓮沢跡	蓮沢跡	蓮沢跡	土器片、中世前期土器	中世～近世
4	東原	江内野原	高尾野町江内東原	古墳時代土器、土器片	古墳～古代
5	伊良	伊良	高尾野町江内伊良	土器、古墳時代土器、銅貨、鎌倉時代土器、近世土器	縄文、古墳～近世
6	谷原	谷原	高尾野町江内谷原	古墳時代土器	古墳
7	長原	長原	高尾野町江内長原	土器片、中世前期土器	古代～中世
8	外戸口	外戸口	高尾野町江内外戸口	土器片、古墳時代土器、土器片、中世前期土器、近世土器	縄文、古墳～近世
9	柳ヶ水	柳ヶ水	高尾野町江内柳ヶ水	青銅、骨石、土器片、古墳時代土器、近世土器	中世～近世
10	土田	土田	高尾野町江内土田	土器片、古墳時代土器、銅貨	縄文、近世
11	江内上ノ原	江内上ノ原	高尾野町江内上ノ原	土器片、中世前期土器、銅貨	縄文、中世～近世
12	柳ヶ水	柳ヶ水	高尾野町江内柳ヶ水	銅貨、骨石、土器片、青銅、中世前期土器	縄文、古代～近世
13	山原	山原	高尾野町江内山原	土器片、古墳時代土器、銅貨	縄文、古墳、近世
14	宇田	宇田	高尾野町江内宇田	中世前期土器	中世～近世
15	徳田	徳田	高尾野町江内徳田	銅貨、中世前期土器	縄文、中世～近世
16	長原	長原	高尾野町江内長原	土器片、中世前期土器	縄文
17	長原	長原	高尾野町江内長原	土器片、中世前期土器	古代～近世
18	長原	長原	高尾野町江内長原	土器片、中世前期土器	縄文、近世
19	長原	長原	高尾野町江内長原	土器片、中世前期土器	中世～近世
20	長原	長原	高尾野町江内長原	土器片、中世前期土器	縄文
21	木原太郎	木原太郎	高尾野町江内木原太郎	銅貨、土器片、中世前期土器	縄文、中世～近世

第Ⅲ部 市内遺跡試掘・確認調査

1 調査の方法

出水市教育委員会では、開発事業の照会で事業が遺跡範囲内にあることが判明した場合に、その事業内容から試掘・確認調査の必要の有無について、現地確認を行った上で判断している。

試掘・確認調査方法は、遺跡の現況とそれまでの調査結果や周辺部での調査経歴等を踏まえて判断する。掘削方法については原則重機を使用するが、明らかに遺跡が出土されることが予想される場合には、人力により掘削を行う。出水市では原則重機を使用する場合を試掘調査、人力を使用する場合を確認調査と位置付けている。

試掘・確認調査は平成20年度から同23年度にかけて国及び県の補助を受け、市内遺跡（亀井山城跡他）発掘調査等のうちの一事業として実施した。なお、調査組織、体制等は第1部第1章第2節に準じる。

調査員は出水市教育委員会生涯学習課主査 岩崎新輔である。

2 平成20年度の調査[第59図、第23表]

上松遺跡、御堂遺跡では個人住宅建設に伴い試掘調査を実施した。試掘調査の結果、両遺跡とも遺跡は確認されなかった。

出水城跡では、件の治山事業に伴いひとつの曲輪地点で確認調査を実施した。調査の結果、曲輪内平坦部から中世の遺構と遺物が出土し、別地点のトレンチでは通路状遺構が検出された。この結果、県では治山事業の見直しも含め、事業を中止した。遺構は現地に埋め戻し、遺物は記録を取った上で取り上げた。

3 平成21年度の調査[第59図、第60図、第24表]

上大川内の上場地区で大型牛舎施設の建設に伴い、試掘調査を行った。同地区は旧石器時代の著名な遺跡、市指定史跡上場遺跡が所在する高原地域であり、周辺部にも古い時代の遺跡群があり、事業範囲も広く規模も大きいことから試掘調査をすることとした。6箇所トレンチを設定したが、既に遺物包含層は消失しており、遺跡は確認されなかった。

出水貝塚では個人敷地境界に擁壁を設置する事業での確認調査を実施した。平成8～10年度に同貝塚を発掘調査しており、事業地は貝層が検出されていた地点である。このため、擁壁を設置する斜面にトレンチを4箇所、斜面上の平坦部、以前の貝層検出地近くにトレンチを設定した。確認調査の結果、1～3トレンチと5トレンチから貝層が検出されたが、ぎりぎり事業の範囲外であった。このため、擁壁工事の際には立ち会うこととし、貝層の保護を図った。

受口壇遺跡と西木佐木野遺跡では携帯電話基地局建設に伴う試掘調査を実施した。調査の結果、遺跡は確認されなかった。

4 平成22年度の調査[第60図、第61図、第25表]

大久保遺跡群では学校クラブ施設建設に伴う試掘調査、桃山遺跡では携帯電話基地局建設に伴う試掘調査、上名遺跡群(町原地点、大畑地点)では個人住宅建設に伴う試掘調査をそれぞれ実施した。どの調査でも遺跡は確認されなかった。

5 平成23年度の調査[第61図、第62図、第26表]

小針原遺跡、野添遺跡、坪ノ後遺跡では個人住宅建設に伴う試掘調査、下名遺跡群では介護施設建設に伴う試掘調査を実施した。いずれの試掘調査でも遺跡は確認されなかった。

下郡山遺跡では焼酎工場建設に伴う試掘調査を一部の建設予定地内で実施した。調査の結果、古墳時代の遺物が多数と中世の遺物が出土し、時期不明のピットも検出された。この結果、後に実施された同事業予定地の確認調査結果と併せて、同地を含めた遺跡は本調査へと移行した。

第23表 平成20年度出水市内試験・確認調査一覧

番号	遺跡名	所在地	原因者	事業内容	工事面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査日	調査結果	調査後 処置	備考
20-1	上松	知識町山下	個人	個人住宅 建設	270	4.5	9月25日	出土なし	工事施工	
20-2	御堂	下知識町上村西	個人	個人住宅 建設	56	2.2	1月19日	出土なし	工事施工	
20-3	出水城跡	龍町、武本	鹿児島県	治山事業	1,000	11.6	3月2～4日	溝跡(遺構)跡、茶臼、青磁土 師器、土甕、石器	工事中止	遺物のみ取上げ、 遺構埋め戻し(現地)

第24表 平成21年度出水市内試験・確認調査一覧

番号	遺跡名	所在地	原因者	事業内容	工事面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査日	調査結果	調査後 処置	備考
21-1	周知外	上天川内平六ヶ 原	民間業者	大宮牛舎 建設	38,900	110.6	12月8～9日	出土なし	工事施工	
21-2	出水貝塚	中央町表郷東	民間業者	土留壁設 置	27	12	12月15～16日	貝層ブロック	工事施工	工事立会実施
21-3	受口壠	野田町上名受口	民間業者	携帯電話 無線基地 局	97	4	12月21日	出土なし	工事施工	
21-4	西木佐木野	野田町上名 木佐木野	民間業者	携帯電話 無線基地 局	97	4	12月21日	出土なし	工事施工	

第25表 平成22年度出水市内試験・確認調査一覧

番号	遺跡名	所在地	原因者	事業内容	工事面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査日	調査結果	調査後 処置	備考
22-1	大久保遺跡群	高尾野町太旗橋	学校法人	サッカー部 体育館 拡張建設	197	21	6月11日	出土なし	工事施工	
22-2	桃山	野田町上名宇 塚山	民間業者	携帯電話 無線基地 局	97	6	10月28日	出土なし	工事施工	
22-3	上名遺跡群	野田町上名宇 塚	個人	個人住宅 建設	513	6	2月15日	出土なし	工事施工	
22-4	上名遺跡群	野田町上名宇 塚原	個人	個人住宅 建設	358	6	2月15日	出土なし	工事施工	

第26表 平成23年度出水市内試験・確認調査一覧

番号	遺跡名	所在地	原因者	事業内容	工事面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査日	調査結果	調査後 処置	備考
23-1	小針原	境町針原	個人	個人住宅 建設	514	8.4	6月17日	出土なし	工事施工	
23-2	下郡山	文化町藤下	民間業者	受胎工場 建設	4,200	182.5	7月20～22日	ピット、古墳時代土器、中世土器	本調査実施	
23-3	野添	下知識町津山	個人	個人住宅 建設	425	6	8月10日	出土なし	工事施工	
23-4	下名遺跡群	野田町下名春	社営福祉 法人	介護施設 建設	1,081	14.2	10月7日	出土なし	工事施工	
23-5	坪ノ後	下幡町米ノ津中	個人	個人住宅 建設	266	6	11月7日	出土なし	工事施工	



20-1上松遺跡(縮尺 5万分の1)



上松遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



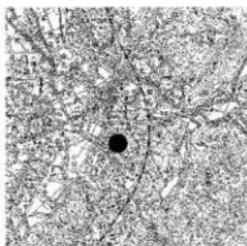
20-2御堂遺跡(縮尺 5万分の1)



御堂遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



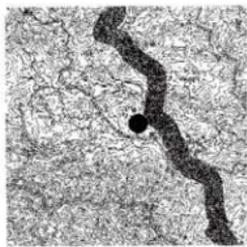
20-3出水城跡(縮尺 5万分の1)



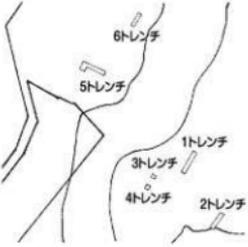
出水城跡 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)



遺構検出状況



21-1周知外地区(縮尺 5万分の1)

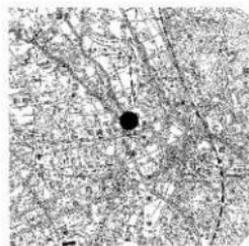


周知外地区 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)

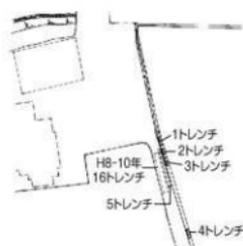


6トレンチ完掘状況

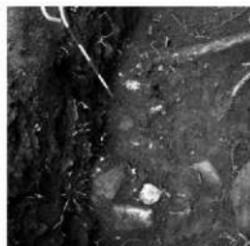
第59図 平成20・21年度 市内試掘調査遺跡



21-2出水貝塚(縮尺 5万分の1)



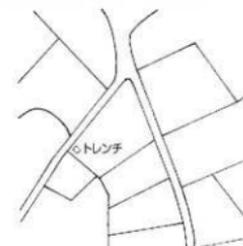
出水貝塚 試掘トレンチ位置(縮尺 5百分の1)



5トレンチ貝層上面検出状況



21-3受口壇遺跡(縮尺 5万分の1)



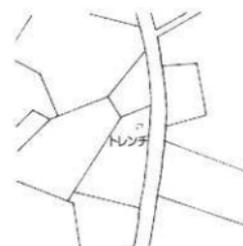
受口壇遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



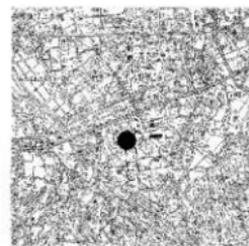
21-4西木佐木野遺跡(縮尺 5万分の1)



西木佐木野遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



22-1大久保遺跡群太鼓橋地点(縮尺 5万分の1)

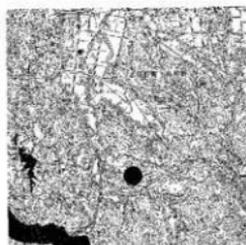


大久保遺跡群太鼓橋地点 試掘トレンチ位置(縮尺 1千分の1)

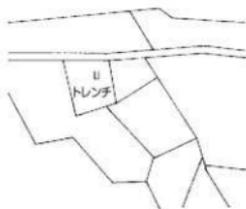


トレンチ完掘状況

第60図 平成21・22年度 市内試掘調査遺跡



22-2 桃山遺跡 (縮尺 5万分の1)



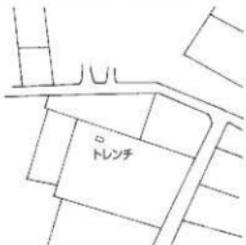
桃山遺跡 試掘トレンチ位置 (縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



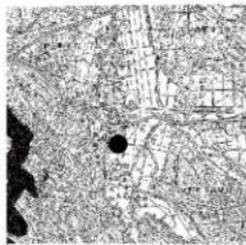
22-3 上名遺跡群町原地点 (縮尺 5万分の1)



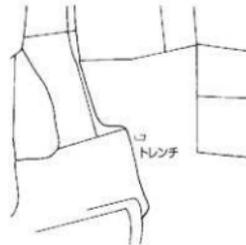
上名遺跡群町原地点 試掘トレンチ位置 (縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



22-4 上名遺跡群大畑地点 (縮尺 5万分の1)



上名遺跡群大畑地点 試掘トレンチ位置 (縮尺 1千分の1)



トレンチ完掘状況



23-1 小針原遺跡 (縮尺 5万分の1)



小針原遺跡 試掘トレンチ位置 (縮尺 1千分の1)

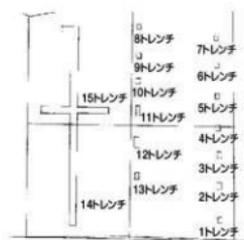


2トレンチ完掘状況

第61図 平成22・23年度 市内試掘調査遺跡



23-2下郡山遺跡(縮尺5万分の1)



下郡山遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺710分の1)



14トレンチ遺物出土状況



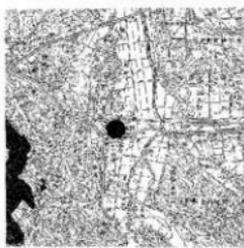
23-3野添遺跡(縮尺5万分の1)



野添遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺1千分の1)



トレンチ完掘状況



23-4下名遺跡群春地点(縮尺5万分の1)



下名遺跡群春地点 試掘トレンチ位置(縮尺1千分の1)



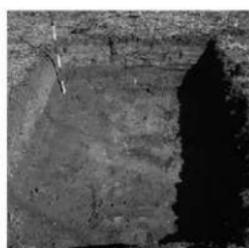
1トレンチ完掘状況



23-5坪ノ後遺跡(縮尺5万分の1)



坪ノ後遺跡 試掘トレンチ位置(縮尺1千分の1)



トレンチ完掘状況

第62図 平成23年度 市内試掘調査遺跡